

茨城女子短期大学紀要

第42集（2015年）

目 次

1. 小澤含章研究 —『鵲賦霧茹雲』の影印と翻刻を糸口にして—
..... 小野 孝尚・小野 春江 1
2. 小森盛研究序説 —小森盛詩作品等の著作を中心として—
..... 小野 孝尚 51
3. 三島由紀夫「火山の休暇」について
～〈菊田次郎物〉序章に代えて～
..... 小林 和子 59
4. 北原白秋『邪宗門』における象徴詩法
—〈生きた詩〉の創造のために—
..... 本庄あかね 69
5. 「女子短大生の瘦身願望と身体イメージに関する意識調査（2）」
..... 長谷部（国府田）はるか （ 1）
6. 保育者養成校における「こども音楽療育ワークショップ」の意味
..... 廣部 朋美・神永 直美・馬立 明美 （ 23）
7. 若い世代への伝言——震災ボランティアを通して
..... 埴 雅文 （ 37）
8. 地域情報デジタルアーカイブ構築のための準備
—茨城県北地域を対象として—
..... 小松崎浩司 （ 51）

茨城女子短期大学

42	茨女短大紀	No. 42 P1 ～ 132	茨 城 2015
----	-------	-----------------	----------

小澤含章研究

『鵲賦霧茹雲』の影印と翻刻を糸口にして――

小野 孝尚
小野 春江

はじめに

『改定 増補 漢文学者総覧』（長澤孝三 平成二十三年十月十六日
汲古書院）によると、「小澤含章は、姓号を小澤山東 名を含章 通
称は多仲 字を公平 号を山東 生地は常陸 没年は寛政九年 享年
四十四 師名空欄 備考には水戸藩儒、詩」とある。また、『茨城の墨
蹟』（大内健二 平成五年五月 晩印書館）『茨城の古書画人名事典』（大
内健二 平成十年五月 晩印書館）の人名事典等によると小澤含章は、
「（一七五四―一七九七）江戸時代中期～後期の儒者。宝暦四年生まれ。
詩文、書にすぐれ、またおおくの書画や古器を模写。水戸藩彰考館で編
修の仕事にたずさわった。寛政九年七月二十九日死去。四十四歳。常陸（ひ
たち）（茨城県）出身。名は含章。通称は多仲。号は山東。」等とあり、
これらが一般的に知られる小澤含章の人間像であろう。

『水府系纂 第七十三卷』（水府明徳会影考館所蔵）によると、「多仲
含章初永匡初名兵次郎又九郎兵衛安永四年丁未閏十二月十五日郷士六季
乙酉十二月十九日郷士ヲ免セラレ養父死シテ八年乙亥七月十三日三十人
扶持ヲ賜テ小普請組寛政三年辛亥五月十四日史館雇トナル九年丁巳五月
二十九日小十人組格史館勤是年閏七月朔死ス四十四歳羽生善衛門勝喜

（常州麻生住）女ヲ娶ル死シテ西郷儀衛門信栄女ヲ娶ル男子ナシ故ニ西
郷信栄三男平衛門永昌を養子トス」とある。

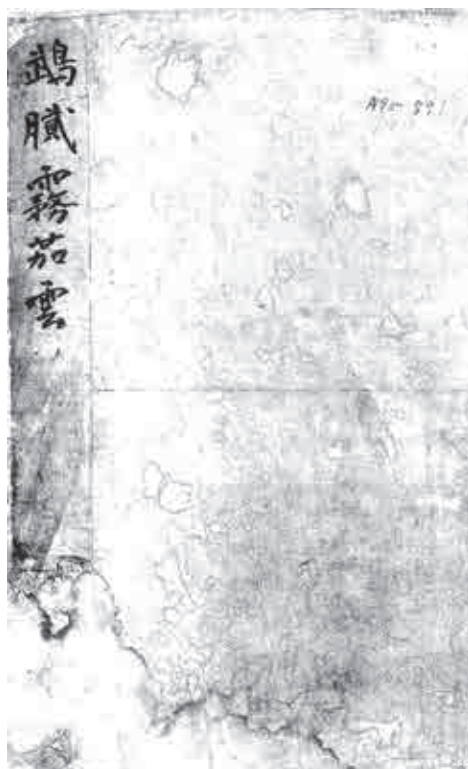
実は、小澤含章は、筆者春江の母方の祖先に連なる人物で、この度、
兄の志鳥融光が急逝し、兄は、生前私共が、小澤含章についての資料収
集や調査研究について進めていることを大変に喜んでおりました。その
兄の遺志を継いで微力ではありますが、調査研究を進めたいと思ってお
ります。

この度、偶然にも秋山高志先生による『在郷之文人達 近代之予兆』
（二〇一二年六月一日 那珂書房）が出版され、本書によつて初めて小
澤含章の『明月帖』が翻刻され、小澤含章についても明らかにされまし
たことに導かれながら、今後の小澤含章研究の参考にさせていただきます
と思います。

資料の収集や翻刻等に当っては、吉成英文氏にご協力いただきました。
『鵲賦霧茹雲』 稿本一冊 寛政八成）は東京大学図書館蔵であり、
この度本文の影印と翻刻をご許可して頂きましたことに厚く御礼を申し
あげます。

『鵲賦霧茹雲』の掲載に当りましては、原本の写真版を上段にして、
翻刻文を下段に掲げました。

I、
『鵲膩霧茹雲』の影印と翻刻



鵲
賦
霧
茄
雲

表
紙



表紙ウ



鵠賦霧茹雲卷之一

一丁才

一丁ウ

白澤者避恠靈獸而能言語者也
涉世錄云昔軒轅黃帝問白澤曰
天下寧靜見何恠乎白澤乃言若
要解恠但將白澤圖於堂屋上掛
之雖有妖恠不能成災
永忠原



白澤者避恠靈獸而能言語者也
涉世錄云昔軒轅黃帝問白澤曰
天下寧靜見何恠乎白澤乃言若
要解恠但將白澤圖於堂屋上掛
之雖有妖恠不能成災
永忠原

鰻
鮎
臍



鰻
鮎
臍

二
丁
才

二
丁
ウ

堅栗
時々寛政



堅栗
時々寛政

三丁才

三
丁
ウ

浮木魚



浮木魚

四丁才

四
丁
ウ



五丁才

查魚国訓宇岐岐東海ニ出ル大者一丈許小者五六尺篇
形細鱗背上有堅皮如

鮫背以其狀類查故名三

四月間出味美

右類取聚常陸

国誌之考語

也 凶者常

陸茨城郡

湊邑之産

梅旭誹

士生魚

海行見

再三為其舟筆之



無名ノ魚
水戸故主源良分之所領之頃
明和中那珂湊生魚取之其濱
御館進之御覽
有之未
知名

五丁ウ

無名ノ魚
水戸故主源良分之所領之頃
明和中那珂湊生魚取之其濱
御館進未
知名



六丁オ

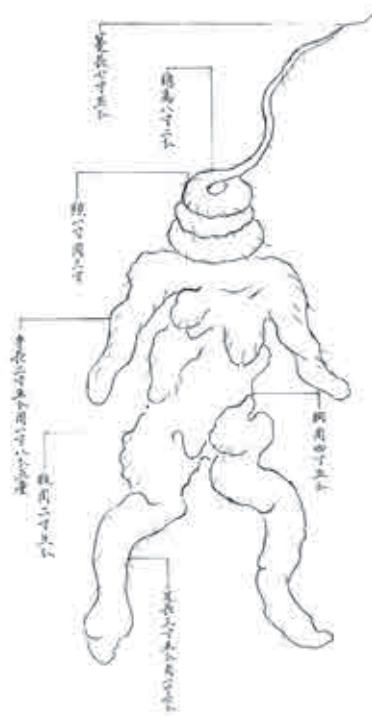
松岡郡下孫村ノ濱へ流レ寄シ魚 無名

腹中ヨリ小石多出ル腸三駄
アマリイツル

鰭ノ爪ノ内ハマガリシ爪アリ幅三
分二厘一寸

六丁ウ

人形薯蕷 寛政二康成年十一月七日 常州久自郡 太
田村所産也 西下街柳川善左衛門藏之



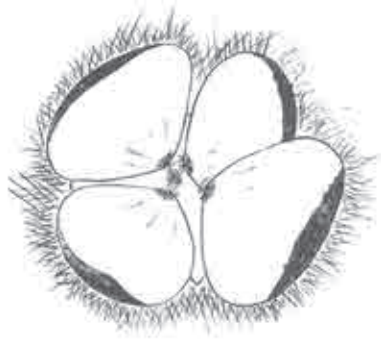
人形薯蕷 寛政二康成年十一月七日 常州久自郡 太

田村所産也 西下街柳川善左衛門藏之



七丁才

奈留外兒和蘭人勇私東私所凶狀也就審其說奈
爾外兒者歐還巴 西北臥兒狼德所產之巨魚而
胡泥私者一也可 兒奴 者角也和
蘭謂之淹延浮倫重譯 之則
一角也其
實 鉅牙而稱以角者蓋
取形似已今和蘭人齊
來即此物也 如其物性
主療則詳一角考中云



栗一毬五子圖

大如圖



栗一毬五子図

大如圖

七丁ウ

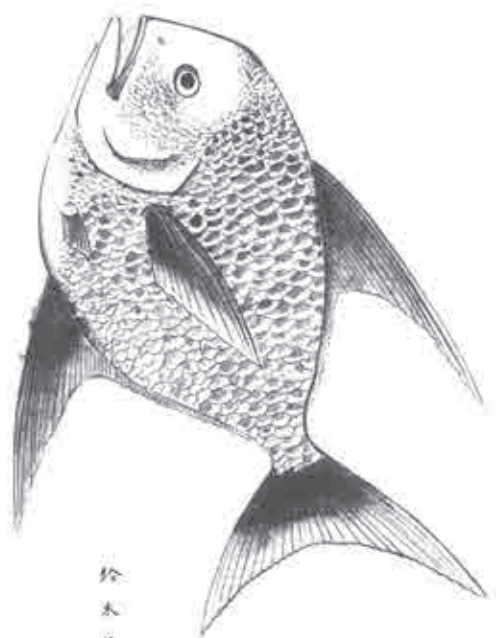
我父乃命世仁隱此天金井云所爾居計留賀六年先門方
 自裁給此門留栗乃幹仁今歲斯樣乃實衰結備門止天一毯
 仁互の子有袁手枝折天賜此計利常在三子奈武土從寂
 肉肥天一止志天空幾波無故今其形狀袁図空蟬香乃世仁
 希見云人仁与不意喜僕賀肆業毛將六季也計礼婆有
 感于茲天成章六乃經見驗有天賢久毛五乃常仁逢
 不悦乎
 寛政二年庚戌之秋八月十九日
 小澤含章識

八丁才

我父(乃)命世(仁波)隱(此天)金井云所(爾)居(計留賀)六年先(門)方
 自裁給(此門留)栗(乃)幹(仁)今歲斯樣(乃)實衰結(備門止天)一毯
 (仁)互(の)子有袁手枝折(天)賜(此計利)常在三子(奈武土)從寂
 肉肥(天)一(止志天)空(幾波)無故今其形狀袁図空蟬香(乃)世(仁)
 希見云人(仁)与(不)意喜僕(賀)肆業(毛)將六季也(計礼婆)有
 感于茲(天)成章六(乃)經見驗有(天)賢(久毛)五(乃)常(仁)逢
 (叙)不悦乎

寛政二年庚戌之秋八月十九日

小澤含章識



鈴木英淳圖

八丁ウ

鈴木英淳圖

常州鹿島郡磯浦所產土人稱埋捺葛子和形狀如
 圓自腮至尾一尺五寸餘二髭之間八寸許密鱗剛
 大銀色而黑尾端寢赤肉白骨爽味似棘鱖魚而最
 美鮐訓埋捺葛子和詩繼朱註鮐身廣而薄少力
 細鱗正字通小頭縮頂闊腹背細鱗色青白腹肉
 脂甚腴陸璣疏廣而薄肪恬而少力細鱗魚之美者
 押雅細鱗縮頂闊腹其廣方其厚鰮故曰鮐亦曰鰮
 品物圖攷鮐屬屋施吉鳥和鮐為埋捺葛子和所圖
 鮐亦方鰮無鱗還類鮐正字通鰮似鱸頭上突起
 連背身園肉厚止背骨爽可食恐是圖攷概此說
 乎雖然鮐即鰮鰮又似鰮則有鱗不縮頂已又按本

九丁才

常州鹿島郡磯浦所產土人稱埋捺葛子和形狀如
 圓自腮至尾一尺五寸餘二髭之間八寸許密鱗剛
 大銀色而黑尾端寢赤肉白骨爽味似棘鱖魚而最
 美鮐訓埋捺葛子和詩繼朱註鮐身廣而薄少力

細鱗正字通小頭縮頂闊腹背細鱗色青白腹肉
 肪甚腴陸璣疏廣而薄肪恬而少力細鱗魚之美者
 押雅細鱗縮頂闊腹其廣方其厚鰮故曰鮐亦曰鰮
 品物圖攷鮐屬屋施吉鳥和鮐為埋捺葛子和所圖
 鮐亦方鰮無鱗還類鮐正字通鰮似鱸頭上突起
 連背身園肉厚止背骨爽可食恐是圖攷概此說
 乎雖然鮐即鰮鰮又似鰮則有鱗不縮頂已又按本

草綱目鮐一名鰯魚小背闊腹扁身細鱗其色青白又大明一統志鰯魚養人以搓斷水鰯多依搓因謂之搓頭鰯又李東璧曰鰯魚生南海狀如鮐身正圓無硬肉骨作炙食至美以上摺諸說則此魚又鮐一種唯密鱗剛大為異也土人又相傳埋捺葛子和常屬西南大洋其產東北海者至勘矣含章嘗聞凡海水西南穩流東北激流潮勢亦隨之故其所產魚蟲龜貝鱗毛肉理為之扇激而大小龐綴同種異狀者往往有之然則如此魚何壺特以密鱗剛大可快之哉聯書候後之識者

寬政二康成之冬十月廿八日

小澤含章識

草綱同鮐一名鰯魚小背闊腹扁身細鱗其色青白又大明一統志鰯魚養人以搓斷水鰯多依搓因謂之搓頭鰯又李東璧曰鰯魚生南海狀如鮐身正圓無硬肉骨作炙食至美此上摺諸說則此魚又鮐一種唯密鱗剛大為異也土人又相傳埋捺葛子和常屬西南大洋其產東北海者至勘矣含章嘗聞凡海水西南穩流東北激流潮勢亦隨之故其所產魚蟲龜貝鱗毛肉理為之扇激而大小龐綴同種異狀者往往有之然則如此魚何壺特以密鱗剛大可快之哉聯書候後之識者

寬政二康成之冬十月廿八日

小澤含章識

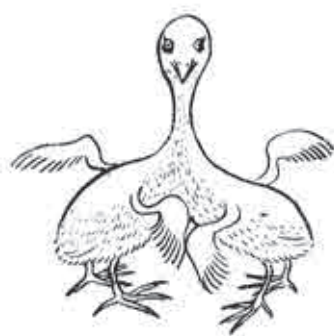


十丁才

自鼻至尾二尺五寸五分
久自浦産也俗茗
猫サガト

寛政三年辛亥冬十一月十二日

鈴木英淳圖



十
丁
ウ



十二丁才

鈴木英淳圖

鈴木喜右工門様御代官所羽州村山郡長卜口村名主權藏武石工門倅千五郎
当二才

申年二月十七日出生 當時丈ケ二尺八、九寸程手首八寸廻程足首九寸廻り腹二尺七寸・八寸

ほと 手くびれ五ヶ所程 目方凡九貫、目も可有之と相見へ未□見不申
候去申八

月朔日此よりまんちゆう一ツ絶申し當時もおこし米杯も絶申候由至て貧窮漸養育致し

候由追々は角力取にも可致候二付忠の高御重目等も本途ヲ糺候へハ大き
く成不

申と申事
にて委く糺不申由二御座候

色こふのとし

尾張の海より

網にかかりて

あかりたる

異獣の図

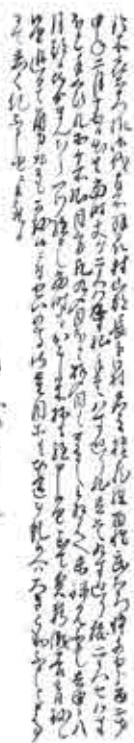
大きなことし

天明二寅の五月

見之

足水

寛政四年壬子六月廿日寫



寬政三年辛亥三月水戸士人吉田
佐次郎得之上町之鰻魚肆買之呈
南陽医官之鑒定弟子大友直圖之
其言曰惣體油骨流出後鬣間如陰
豪者之傍陰口有油出鼻先無骨大二尺有
五寸許色薄黑色青輝斑点青輝尤
甚眼如佛之玉眼無瞳自前見之如
貓面也

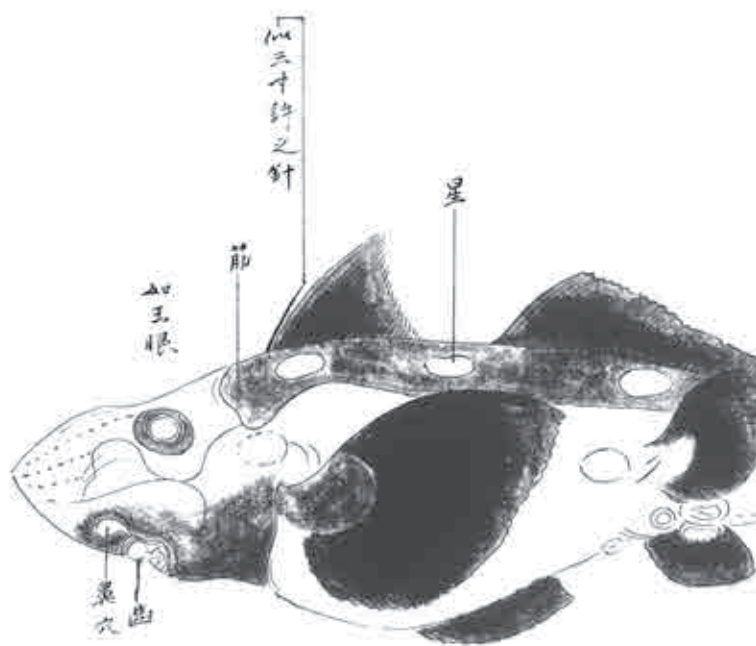
常陸 大島晴員子輻又寫
天下野人題



十二丁才

寬政三年辛亥三月水戸士人吉田
佐次郎得之上町之鰻魚肆買之呈
南陽医官之鑒定弟子大友直圖之
其言曰惣體油骨流出後鬣間如陰
豪者之傍陰口有油出鼻先無骨大二尺有
五寸許色薄黑色青輝斑点青輝尤
甚眼如佛之玉眼無瞳自前見之如
貓面也

常陸 大島晴員子輻又寫
天下野人題



十二丁ウ

水戸下谷町太郎次ト云う者ノ家ニテ
寛政三年辛亥六月廿三日出生同
郷富三郎ヨリ畫ヲ贈ル 章再聞ニ
トイヘリ

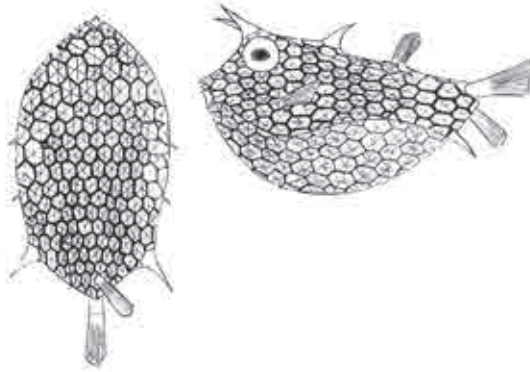


十三丁オ

水戸下谷町太郎次ト云う者ノ家ニテ
寛政三年辛亥六月廿三日出生同
郷富三郎ヨリ畫ヲ贈ル 章再聞ニ
三日過テ
死シタリ
トイヘリ

鱸ノ子
ト云

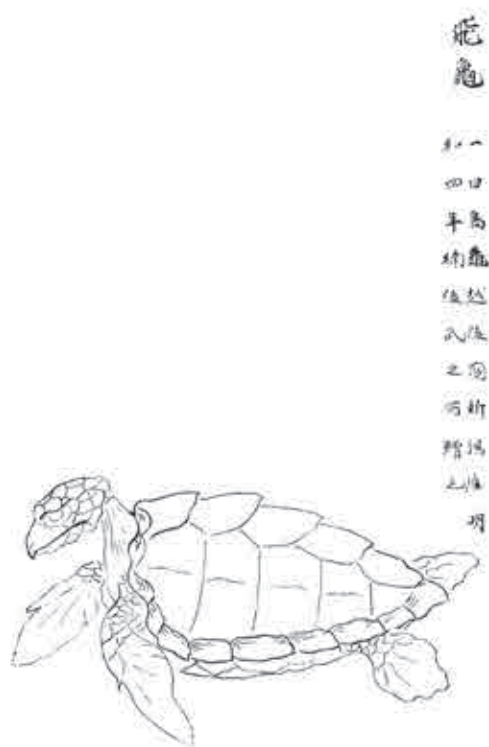
手網ノ濱ノ産
町屋村幸重所蔵也
大如圖
寛政三年辛亥
秋九月章寫



十三丁ウ

鱸ノ子
手網ノ濱ノ産
町屋村幸重所蔵也
大如圖

寛政三年辛亥
秋九月章寫



飛龜

和
一
四
年
鳥
龜
越
後
國
新
潟
縣
贈
也
明

飛
龜

一
日
鳥
龜
越
後
國
新
潟
縣
贈
也
明

十
四
丁
才

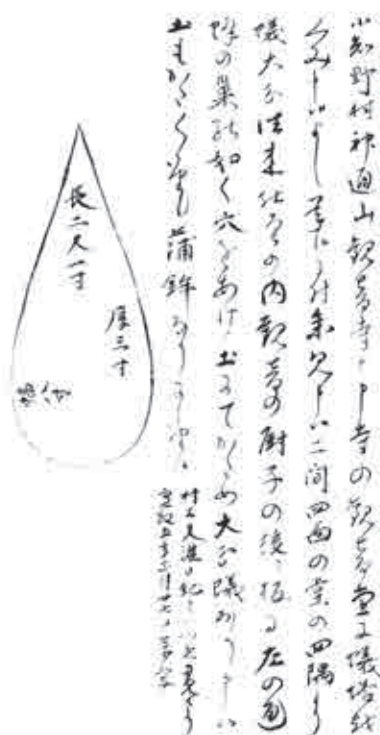


十四丁ウ

自腮至
尾三寸六
分二釐之間
二寸八分釐長
五寸七分許若

大如圖

寬政三年辛亥之秋九
月廿一日 磯浜所産



十五丁オ

小知野村神通山観音寺と申寺の観音堂に蜂塔越

くみ申候よし羊候に付来見申候二間四面の堂の四隅より

蜂大分往来仕堂の内観音寺の厨子の後の板に左の通

蜂の巢能如く穴をあけ土にてかため大分蜂おり申候

土もかたく候し蒲鉾なりに候由 村上美濃日記といふ出覧より

安政五年三月廿七日章寫



十五丁ウ

酒井左衛門様
此獣ハ日月と申也

酒井左衛門様御在江より御土産に持来しけたもの能
 人間にあら須目の光日月のことく鼻三角にして
 口は盤耳までもさけ齒ハ六本長さ一寸ほと耳
 人の古とく鳴聲鶴に似た里足猿のことく毛
 なかく人を飯喰ふよし高三百石とり竹村
 重兵衛と申人鎗にて御差しとめ申候由可里で
 柳の風能といへる人の頭せし歌とし承し
 故後にかつつけ 申候
 世の中越をいかたの宮乃月日ほし鳴聲を
 名にがくやこび(妖)けむ

十六丁オ

酒井左衛門様御在江より御土産に持来しけたもの能
 人間にあら須目の光日月のことく鼻三角にして
 口は盤耳までもさけ齒ハ六本長さ一寸ほと耳
 人の古とく鳴聲鶴に似た里足猿のことく毛
 なかく人を飯喰ふよし高三百石とり竹村
 重兵衛と申人鎗にて御差しとめ申候由可里で
 柳の風能といへる人の頭せし歌とし承し
 故後にかつつけ 申候
 世の中越をいかたの宮乃月日ほし鳴聲を
 名にがくやこび(妖)けむ



十六丁ウ

寛政五年癸丑三月

常州久自濱ニテ

狗ト嚙合死タル

水豹面 和名 アザ

ラシ

四月六日 渡邊

寛圖示



十七丁オ

長二尺五六寸 背びれ鱸の如し 背中まで色あか
くけ猪の毛のことし短く九尺申頭のいろはい毛色し
天明六年午六月初旬高戸濱ニテ鰯網ニカカリ
申

以 小宮山氏之寫
寛政五年癸丑冬
十一月七日章寫



十七丁ウ

武蔵崎玉郡幸手領ノ中袋新田ノ内花田村ト云
所へ落タリ子其雷ハレワタリテ見レハアヤシ

キ獸一疋ウゴメキ居リケリ宝寶五年亥五月

十六日ノ事ナリ十七日ニテ生ヲ有シ申何ヲモ

喰ラハテヤ申テ死ケリト申候ナン

惣身中犬ノ程バカリニテ毛長六寸バカリ其色

灰色ニシテ身ハ巾着

ノ如シ顔鼻ハ法螺貝

ノ如クニサシ出タリ

爪ノ長三寸バカリ

尾ノ長五寸ハ

カリ前足惣身

ヨリ直ニ付テ腕

ナシ長サ六寸程有

スベテ土龍ノ形ニ

タリ

右雷獸以小宮山氏本

寫寛政五年癸丑冬十一月七日



十八丁才

十八丁ウ

寛政丙辰夏六月寫

小澤氏珍叢

寛政丙辰夏六月寫

小澤氏珍叢



十九丁才

小澤含章珍藏



裏
表
紙

Ⅱ、諸家との交友を巡って

次に同時代の小澤含章に関わりのある人物や、その人物の略生涯とアネクト等についての概略を見て行き、小澤含章との交友関係についてやそれらを通して見た小澤含章の人物像についても迫ってみたい。

『太田盛衰記』（昭和五十六年五月二十日 常陸書房）の木村謙次の私記に「小澤公平交友の士」とあり、「寛政九年、八月二十九日蒲生君来訪、八月二十日帰国、公平悼歌、おもかけの あるや涙に かきくれて 詞もたゆるなき人のあと とあるは即ち小澤含章で、通称多仲と呼び 同姓豊久の子であるが入って九郎兵衛の嗣子となつた人、山東と号し含章は諱である、尾花庵二世を継いだ、幼から学を好み博古多識、尤も詩書を善くした、選ばれて影考館に入つて大日本史編集の事に参じ小十人扶持を賜つた。常に客を愛し筆硯を携へて水戸に來遊するものあれば乃ち公平の家に至つて逗留数日するも何等意に介せざるもの、如くであつたといふ。寛政九年七月二十九日、四十四歳で没した。墓は酒門共同墓地にあるが子虚の悼歌は一ヶ月後霊前に供へたものらしい。墓碑銘は立原萬の撰であるが銘に、生きて天下の善士を友とし、没して千古の名家を追ふ、没する者其所を得るも、存する者の哀を如何と云つてゐる、その頃の著に明月帖一卷がある。明月に題して各々交訂の友が詠じた詩が載つてゐる天明七年八月公平三十四歳の時で編中には、枕石寺の西天和尚、木村子虚、高野世龍、伊藤隆安、中郡猛、釈隆豊、増山雄、猿田忠、猿田敬、田辺政有などであつたが立川淳美は欠席したらしい。この会はまだ鳳塾といつて、高野世龍の門生達が跋の後に列記されてゐるから受

業門生として関公敦、大森赫、山昌、乙観、中郡猛などであつたことは明月帖の跋に記されてゐるのを見ても知られる。公平、世龍、淳美、隆安など居つた、寛政、享保の頃の太田は一面正に文運隆昌といった時代を評することも出来よう。子虚はよく水戸への往復などには立ち寄つて寒暄を述べてゐる。」とある。

本文中の蒲生君平は、『日本大百科全書』（小学館）によると、（一七六八—一八一三）江戸後期の学者。名は秀実、通称は伊三郎、字を君藏または君平といい、修静庵と号した。下野国（栃木県）宇都宮の灯油商福田又右衛門正栄の四男。蒲生氏郷の子孫であるという家伝に従い、のちに自ら福田を蒲生と改姓した。十四歳のときから同国鹿沼の儒者鈴木石橋の門に入り、国史や古典を学び、さらに水戸の藤田幽谷と親交を結び、水戸学の影響を受けた。一七九〇年（寛政二）、東北遊歴中の高山彦九郎を慕つて石巻まで行つたが会えず、帰路仙台の林子平を訪ねて、北辺の防備などの国事を語り合つた。九五年には、ロシアの南下に対する海防の薄さを憂えてふたたび東北地方を巡歴し、のち一八〇七年（文化四）ロシア船による北辺侵犯事件が起きた際は、国防策を記した『不恤緯』を幕府に上呈した。これより先の一七九六年、歴代天皇陵の荒廃を嘆いた彼は、『山陵志』の編纂を意図して上京し、のち近畿一帯の山陵を実地に踏査し、一八〇一年（享和一）全二巻を脱稿した。翌二年大学頭林述斎の門に入り、いつそう学問の道を深めた。

晩年は江戸に居を移して著述に専念し、文化十年七月五日に病没、江戸谷中の臨江寺に葬られた。法名は修静院殿文山義章大居士。ほかの著

作に時弊を論じた『今書』や、日本古来の官職の沿革を記した『職官志』などがある。とくに『山陵志』は幕末尊王論の先駆として有名。高山彦九郎、林子平とともに、寛政の三奇人とよばれる。

因みに君平は、寛政七年の九月には、宇都宮の実家に戻り、同八年の二月には、又江戸に出て、九月十九日には、水戸に行き小澤含章の「柳下園」の宴に招かれている。その後十一月には江戸を立ち京都に向かった。

木村謙次は、宝暦二年の生まれで、文化八年七月六日に亡くなっている。北方探検家。名は謙、字は子虚、号は醉古堂、醉古山館等。常陸国久慈郡天下野村（茨城県水府村現常陸太田市）出身。若くして才能を認められ水戸の立原翠軒に学ぶ。三十四歳の時に松島、仙台に旅した後、東北と蝦夷地を幾度となく調査する。寛政五（一七九三）年の水戸から松前までの日記『北行日録』は当時の東北地方、蝦夷地の状況を知る好史料。寛政十年に近藤重蔵の蝦夷地調査に加わる。択捉島に建てた「大日本恵土呂府」の題字を記した。また木村は医学も習得しており、北方探検中に近藤らを治療して助けたという。多くの北方関係史料を残している。

次に立原翠軒は、江戸時代中期から後期の水戸藩士。学者として五代藩主徳川宗翰、六代治保の二代にわたって仕える。本姓は平氏。家系は常陸平氏大掾氏の一門・鹿島氏の庶流といい、鹿島成幹の子・立原五郎久幹を祖とする立原氏。仮名は甚五郎。諱は萬。字は伯時。号は東里。致仕後に翠軒と号する。父は水戸藩彰考館管庫・立原蘭溪（甚蔵）。嫡男は水戸藩士、南画家の立原杏所、孫には幕末の志士・立原朴次郎、子

孫には昭和初期の詩人、建築家・立原道造がいる。延享元年（一七四四年）六月七日、水戸城下の武熊（竹隈）にて生まれる。幼い折は谷田部東壑に師事。宝暦十年（一七六〇年）に萩生徂徠を祖とする徂徠学派・田中江南が水戸を訪れた折に師の東壑とともにその門に入った。同十三年（一七六三年）、江南が去った後、江戸彰考館の書写場傭に任ぜられた。江戸にては文章を大内熊耳、唐音を細井平洲、書を松平楽山に学んだ。明和三年（一七六六年）、編集員を命ぜられ水戸史館に転じた。天明六年（一七八六年）六月、彰考館総裁に進み、以後に享和三年（一八〇三年）に致仕するまで『大日本史』の編纂に力を注ぎ、寛政十一年（一七九九年）には『大日本史』の紀伝浄写本八十巻を、『大日本史』編纂の遺命を残した二代藩主・徳川光圀の廟に献じた。この間、混乱の生じていた彰考館の蔵書を整理、欠本となっていたものを補写する様に命じ、古器物などの修膳、光圀以来の留書、書簡などが集積されたまま、整理されていなかったため、これを補修製本した。これが『江水往復書案』、『史館雜事記』として今日に伝わっているものの原本となっている。永く停滞していた修史事業を軌道に乗せたことは、翠軒の大きな功績によるものであり、翠軒の尽力により後世の水戸学が結実していったといわれている。また、翠軒は藩主治保の藩政にも参与し、天下の三大患について老中の松平定信に上書して、蝦夷地侵略等を警告した。寛政五年（一七九三年）、門人の木村謙次を松前に派遣し、実情を探らせたという。また、大日本史編纂の方針を巡り、弟子の藤田幽谷と対立を深めていたともいわれている。水戸市共有墓地の小澤家の墓には、立原萬揮毫による小澤含章の墓碑が建っている。碑文の後半には「生友天下之善士 没追千古之名

家 没者得其所 存者哀如何」とある。

藤田幽谷は、水戸城下の奈良屋町に生まれる。幼少の頃から学問で頭角を現すようになり、寺社奉行下役の小川勘助や医師の青木侃齋に学ぶ。侃齋の推挙を受け、彰考館編修で後に総裁となる立原翠軒の門人となる。天明八年にはその推薦で彰考館に入る。天明九年には正式に館員となり、水戸藩の修史事業である『大日本史』の編纂に携わった。水戸藩では徳川光圀の百遠忌に向けて写本を献本するため『大日本史』の校訂と浄書を行っていたが、『大日本史』の題号に国号を憚るべきとする題号問題が発生していた(史館動揺)。翠軒が藩主治保からこの問題を諮問されている間に幽谷は翠軒を差し置いて題号を『史稿』に改めるべきであるとする意見書を提出し、翠軒の修史方針や藩主治保の修学態度、さらには藩政改革の提言や対外情勢への意見などを著作で発表し、一時は編修職を解任される。この史館動揺は党派的な対立に発展する。

文化四年に彰考館の総裁に就任、百五十石を受ける。著作である『勸農或問』は水戸藩天保の改革の農村対策に影響を与えた。文化九年再び総裁を専任。門人に次男である藤田東湖、豊田天功、会沢正志斎らがおり、彼らは水戸学の尊王攘夷思想を全国に広める活動を行った。著書に『正名論』などがある。

翠軒との対立点として、一点目としては『大日本史』の題名であり、幽谷は『史稿』と主張し、翠軒が反対していた。二点目としては、『大日本史』の志表の継続または廃止をめぐる対立で、翠軒は廃止、幽谷は継続を主張した。三点目としては論賛の是非であり、翠軒は可、幽谷は

不可としたという。幽谷との対立は幽谷が『丁巳封事』を藩に上書し、藩政批判を行ったことで不敬の罪を問われ免職となった折に翠軒により破門されたことで表面化することとなった。これにより両者は絶交となった。享和三年(一八〇三年)、高橋担室が『大日本史』の論賛を削除すべきである旨を上書し、藤田幽谷もこれに同調したことで、翠軒は致仕を命ぜられ、徳川家康の事蹟研究を命ぜられ、弟子の小宮山楓軒とともに『垂統大記』を編纂したが文政六年(一八二三年)三月四日同著の完成を見ずに亡くなったという。享年八十。書画、篆刻、七弦琴にも秀で、著書として『西山遺聞』、『此君堂文集』、『新安手簡』などがある。『幽谷全集』に収録されている『幽谷詩纂』には、小澤含章を歌った七言律詩が「戯作」と題されて掲載されている。題下には、「句中用友 人別号字」とあり、「振衣柳下寄相思」「丹子成号振衣亭。小澤公平号柳下園」と歌っている。

さて、最後に小澤多仲永隆初名九郎兵衛の祖先は、伊勢永明と云って、佐竹義重に仕えて久慈郡太田郷に住んでいた。九郎兵衛は、明和期に鑄銭事業で財を成し、郷士から進み、安永七年に水戸藩士となり、水戸の三之丁に住んだ。翌八年の五月二十一日に六十三歳で亡くなってしまい、その後小澤家は、藩士となって水戸に住むことになった養子含章と太田に残って郷士となった賢達の二家に分かれた。

そして又、九郎兵衛は、芝六と号して俳諧をたしなんでおり、江戸で武弓亀文が買収した文台の上面に「ほととぎす招くか麦のむら尾花はせを」とあり、これを芭蕉の真蹟とし、社中名を「尾花庵」とし、含

章が二世を継いだものである。常陸太田市木崎二丁目の梅照院境内には、芝六の筆になる芭蕉の句「冬籠りまたよりそはむ此のはしら」の句碑が天明三年十月に建てられている。その後文台は、三世の立川一径に伝わったと云われている。

梅照院境内の芭蕉句碑



Ⅳ、小澤含章の編著書について

現在判明している小澤含章の編著書としては、次のものが挙げられる。

- 一、明月帖 写本一冊 天明七成 茨城県立図書館
- 二、万歳鯛考 稿本一冊 寛政二成 国立国会図書館
- 三、董其昌「正陽門帖」拓本一帖 寛政五版 東京・書壇院蔵
- 四、鵝膩霧茹雲 稿本一冊 寛政八成 東京大学図書館蔵
- 五、文園生 写本三冊 成立年代不明 国立国会図書館蔵
- 六、鸞鼎式味 写本一冊 成立年代不明 同社大学図書館蔵
- 七、芙蓉櫻集 写本一冊 成立年代不明 同社大学図書館蔵

六の『鸞鼎式味』は、同志社大学図書館蔵であるが、今出川図書館の小室・沢辺記念文庫（宮津市出身の自由民権家の小室信介（一八五二（嘉永五）～一八八五（明治十八））、沢辺正修（一八五八（安政三）～一八八六（明治十九年））の記念文庫。中島信行、木村栄吉、松本誠直らが募金して集めたものを寄贈したもので、一八九一（明治二十四）年

十月三日開庫式が行われた。主として日本史関係のものが多く、近世の写本が相当数を占めている。の中には、水戸藩の儒臣で同藩の史館総裁となり、「大日本史」の校訂に努め、その出版のための底本を作成した立原翠軒の自筆稿本、自筆写本、旧蔵書の多くと、江戸時代中期の国学者塙保己一の和学講談所旧蔵書などが含まれている中の蔵書である。内容は『約翰伝福音書』である。

七の『芙蓉櫻集』は、本居宣長の荒木田経雅宛て書簡（寛政三年八月十七日『本居宣長全集十七巻 筑摩書房』）に「水戸太田小澤九郎兵衛と申人ハ、近頃手前へも始而文通有之候 貴公様へは従来御文通も有之候由 いかなる学者にか、是迄存知不申候 右之人より、水戸諸士之歌文集メ候物参り 御写し被成候由 御卒業候ハハ御借シ被下度 奉頼上候」とある「水戸諸士之歌文集メ候物」であろうと推測されているものである。それにしても伊勢神宮の宮司である荒木田経雅と小澤含章の交友が伺えるのに驚きであり、その上本居宣長にも小澤含章は「いかなる学者にか」と云わしめている処も興味のある所である。

V、小澤含章に関する参考文献について

参考文献としては、

一、『幽谷全集』昭和十年六月二十五日 菊池謙二郎編著 吉田弥平発行

二、『立原翠軒』昭和三十八年六月二十五日 前田香径編著 立原善重発行

三、『大日本史記伝志表撰者考』昭和四十年三月十日 吉田一徳 風間書房

四、『水戸市史 中巻（二）』昭和四十四年八月十日発行 水戸市役所

五、『太田盛衰記』昭和五十六年五月二十日発行 吉原越著 常陸書房

六、『常陸太田市史 通史編 上巻』昭和五十九年 三月三十一日発行

七、『木村謙次』昭和五十九年三月三十一日発行 水府村教育委員会

八、『芭蕉句碑を歩く』平成元年六月一日発行 掘込喜八郎 筑波書林

九、『水戸の影考館―学問と成果―』平成三年八月二十日発行 福田耕二郎水戸史学会

十、『小澤氏の国学』梶山孝夫『水戸史学』第四十三号 平成七年十月

三十日発行水戸史学会
 十一、『水戸藩郷士の研究』平成十八年十月十三日発行 瀬谷義彦著 筑波書林

十二、『在郷之文人達近代之予兆』平成二十三年六月一日発行 秋山高志

十三、「新太田点描 九 柳下園・小澤含章」吉成英文『フォonz』

那珂書房

平成二十六年十二月十日 常陸太田市フォonz・ネットワーク発行

おわりに

幼少時からお盆やお彼岸になると、父は忙しいので、母や姉たちと共に墓参りをするのが常でありました。まずは、水戸市内にある旧水戸藩士の谷中の共有墓地の望月家から始まって、その後、同じく酒門の小澤家のお墓にお参りをしていました。小澤家の墓には、墓碑が二つありまして、一つは小澤含章でもう一つが小澤融昇でした。小澤含章の墓碑の揮毫に立原萬とありましたが、この人が、水戸藩の大学者の立原翠軒で詩人の立原道造の祖先であること等知る由もありませんでした。

小澤含章は、その役職からか博物学に強い関心を持っていたようです。特に人間の理解を超える動物や植物の奇形種について興味があったようです。好奇心旺盛で行動力もあり、水戸藩内外の情報を得て、詳細な絵を巧みに描き説明を加えています。中でも魚類には特別興味があったようで、これは後に小澤融昇が現在の大洗町磯浜の西福寺の徒弟となっていることにも関連するものがあるのではないかと考えられます。小澤融昇の墓碑には、「東茨城郡磯浜町西福寺権大僧都坂本融信師同寺於加行既権僧正清水溪深達師明治四十三年十一月為同郡上野合村小幡天台宗法円寺第七十四代住職」とあります。

筆者春江の父志鳥融淳は、法円寺第七十五代住職となり、長兄の志鳥融真が第七十六代の住職になっております。長兄の話によりますと「父は西福寺の弟子であったが、五歳の時に名指しで小澤融昇の徒弟となった」とのことであり、「磯浜の西福寺から融昇に連れられ、馬車に揺られ途中の松並木を超えると磯浜に戻れるものと思っていたが、着いた所は小幡の法円寺だった」そうである。五歳から親元を離れ、仏門に帰依し、成人すると、融昇のいとこの望月重彦の長女ミヨ（春江の母）と結婚しました。後に父は磯浜の西福寺第四十九代住職となり、亡次兄志鳥融光が、西福寺第五十代住職となりました。亡次兄志鳥融光には、本稿の校閲をお願いしたいと思っておりましたが、残念ながらそれも叶わないことになってしまい仏前に供えることになりました。

小澤含章の墓碑



小澤融昇の墓碑



小澤含章についての詳しいことは、身内の者でさえも知らずにいたことが、今となつては、大変に恥ずかしいことであることを知りました。先祖を大切にすることが大事で、先祖があつてこそ、今の自分たちがいることをしっかりと受け止めなければならぬと思います。私は、末の娘ではありますけれども、書道や漢文学や日本文学について学ぶ機会を与えてくれた両親に感謝の意を込め、これからは出来うる限りのことはして行きたいと思う今日この頃の年齢となりました。

振り返って見ますと、平成二年二月二十五日の日曜日に、母は、水戸市内にある旧水戸藩士の眠る酒門共有墓地の小澤家や望月家の墓を子どもたちにそれぞれ引き渡すことになり、年齢の順にそれぞれの区域を引き継ぎました。その時、末娘の私はこんもりとした山側の「望月参前」

の墓を引き継ぎ、「水府系纂」等によつて、この墓は、参前望月庄左衛門滋野信尚であることや妻の弥智を知り、信尚が光圀側近の小姓であることを知り、光圀とは、同甘共苦の存在であったことを知りました。光圀との関係についても明らかにすることが出来ました。

この度の小澤含章の人物像や著作についても、分からない存在であったものが、少しずつではありますが、分かるようになり、これを機に更に研究を深めていければ幸いと思います。

小森盛研究序説

— 小森盛詩作品等の著作を中心として —

小野 孝尚

はじめに

小森盛は、筑波根詩人横瀬夜雨夫人多喜の実弟であり、戦前に活躍した詩人であるが、その詩作品の著作については、従来から不明な点が多いため、現在では全く埋もれてしまった詩人の一人となっている。

その理由として、「夜雨と暮鳥と重吉」(『至上律』第十輯昭和二十七年一月)の中で、「私は詩集を殆ど散逸し、戦災でも失ひ、また自身の詩なども総て持たないことにしてあるが、八木さんの『秋の瞳』だけは、夜雨の書庫に残り今なほ私の手許にある。」ことによるものであり、親族の常陸大宮市の山方にお住いの小森悦郎氏や千葉県にお住いのご長男小森崑氏に遺稿等の所在を尋ねたが、不明とのことであった。

最近になって、平成二十五年の十月に崑氏から電話による連絡があり、親族の中でも、特に長女の旻子さんが父親の著作について調べ、コピーをしていたことが判明した。旻子さんが、母親の喜美さんに平成五年に送っていた資料の添え書きに「母上様 まだいくつか出て来るはずですが、手許にたまった分、お送り致します。『いはらき』に載ったものは、貴重品です 七月二十一日 旻子」とある。同封の『いはらき』(大正十四年九月九日)に掲載された小森盛の作品は、散文「喰ひ入る現実

秋の峠」で、その隣に「『茨城文藝』の夕 茨城文藝の創刊を祝賀すべく十二日夜六時から水戸郵便局前助川洋食店階上にて小宴を開く、会費は一圓の豫定で希望者は十一日迄に水戸市南町知新堂宛に通知する筈」とあり、コピー紙の欄外に鉛筆書きで「創刊号より小森盛、参加。雑誌の所蔵者、不明。」と記されている。娘である旻子さんの並々ならぬ父親の著作資料の収集に対する熱意が母親への断簡文面の中に見て取れるものがある。

平成二十五年十月二十一日の午後に崑氏は遠路遙々段ボール箱一箱を抱えて、本学に訪ねて来てくださり、それらの資料の経過等について説明され、私に預けられて帰宅された。

その後、平成二十六年十一月七日の午後に、再び本学を訪ねられて、小森盛の著作のコピーを持参された。この後、崑氏は、山方の悦郎氏を訪ねられるとのことであった。この時、小森家の略系図や高山辰雄による小森盛の肖像画の複製したものをお預かりした。略系図の中で、小森盛は特に母親の弟である太田丙子郎には世話になっており、命の恩人であると言っている。肖像画は崑氏によると最も父親らしいとのことである。

それらのコピーのほとんどは、小森盛が雑誌に発表した作品であった。



ここでは、始めにその詩作品等についての基礎的な作業として年代順に整理することにした。ただ残念なことに、年月日についての日にちについては、不明の作品が多いことが挙げられるので、これらについては、今後の調査に委ねたいと考える。尚、小森盛の美術評論関係の著作については、ここでは触れてはいない。

小森盛は、明治三十九（一九〇六）年三月二十一日に茨城県那珂郡山方村八十五番屋敷（現在常陸大宮市）に父小森亥之吉、母せい（長男信、長女タキ、二女正子）の二男として生まれた。横瀬夜雨夫人タキの実弟。茨城県立水戸中学校を大正十二年三月に卒業する。第四十四回の卒業生で百九名であった。同期には郡司次郎正がいるが、郡司には「同期準卒」とあり、これは、『水戸一高百年史』『別冊卒業生名簿』（昭和五十三年十一月十一日 水戸一高創立百周年記念事業実行委員会発行）凡例によると、「四修又は五在で上級学校へ進学した者をいう」とある。一級上には、野口雨情門下の塙義幹がおり、三級上には渡邊温がいた。

小森は、大正十五年四月から大正十六年三月までの一年間、江川尋常高等小学校、現在の茨城県結城市立江川北小学校の代用教員を勤める。この頃八木重吉を柏に訪ねている。義兄横瀬夜雨の秘書、その後上京して、高村光太郎グループの詩人となる。筑摩書房の『高村光太郎全集』に於ける光太郎宛ての書簡に見る茨城ゆかりの詩人は、取手の宮崎稔は別格として、川野辺精が七通。小森盛が三十通（初めての書簡は昭和二年七月十九日付）。寺門戸誠一が十九通。縄田林蔵一通。本澤浩二郎が一通等挙げられる。

小森盛は、アナーキスト系の詩人たちとも交わり、「弾道」（昭和五年創刊）や、「茨城文芸」に参加。そして橘孝三郎の兄弟村にも関係する。橘孝三郎は、茨城県立水戸中学校を明治四十五年三月に第三十三回生（八十五名）として卒業している。林正三も同期であった。草野心平や伊藤信吉らの「学校」にも参加。石川善助や尾形亀之助との親交があった。戦後、時事通信社に入社し、編集と校正の仕事のかたわら美術評論を

始める。昭和三十一年に時事通信社を退社し、美術評論と随筆に専念。昭和五十九（一九八四）年二月十六日に肺炎のため四街道市四街道一丁目二十の十三番地の自宅にて死去。現在の所、参考文献としては、常陽新聞社刊行による『茨城近代文学選集第五巻 詩歌編』が主たるものであり、今後の研究に俟たれる所が大きい。

亡くなった年の年賀状には、「日の中の一月一日。ほとくの体のガタピシンの外見を診て、これはいかんと言った医者も二人は死んだ。五臓六腑、とくに肝臓は拔群だから朝酒を啖って圈外風狂、独断勝手をきめこんでいる。修羅場を見すぎた阿羅漢七十八歳、四〇キロの瘦軀は強風に流され、蹟く石でもあればそこで転びたい。あと二年生きれば野合結婚も金婚式になるという。」数え年八十歳での元気な心意気が窺われるものがある。

I、詩作品の著作について

目高と雲（天心翹望 月と黄水仙）

『日本詩人』第六卷六号 大正十五年六月

愛妻詩選（貧しくて妻もなければ）青梅 桐の花

『詩神』第二卷第八号 大正十五年八月

蜘蛛の巣（蜉蝣 路傍の老婆 夏の朝）

『詩神』第二卷第九号 大正十五年九月

牧歌的風景（田舎の夏 路傍所見 麥秋の細道 夏の朝）

『詩歌時代』九月号 大正十五年九月

秋茄子 『日本詩人』第六卷十号 大正十五年十月

海邊抒情 『詩歌時代』十月号 大正十五年十月

草 『地上楽園』第一卷第七号 大正十五年十二月

秋の野の夢 『詩神』第二卷第十号 大正十五年十二月

小さい町 蔦 『詩神』第二卷第二号 昭和二年二月

カフエの月 春浅き骨董店

『随筆』第二卷第七号 昭和二年七月

素朴な風景―同郷の友泉浩郎兄よ―

『地上楽園』第二卷第八号 昭和二年八月

詩 『詩神』第二卷第九号

草の實 『民謡詩人』第一卷三号 昭和二年十一月

龍（少女坑夫 草の實）『大調和』十二月号 昭和二年十二月

（題名不明）『民謡詩人』 昭和三年二月

海豚 『至上律』第六号 昭和三年十二月

その時 『學校』第三号 昭和四年三月一日

なんでもない風景 『第二』第五号 昭和四年六月

来世を夢む 『至上律』第十号 昭和四年六月

人情に就いて 『學校』第六号 昭和四年七月

炎天の海見ゆる庭の一隅 『むらさき』第四卷八号 昭和四年八月

巷の聖母 『至上律』第十一号 昭和四年八月

夜の隣人 『第二』第七号 昭和四年九月六日

私窩子 『至上律』第十二号 昭和四年十月

屋上語録（石川善助と松屋屋上にて）『第二』第九号 昭和四年十一月

肋 尾崎喜八氏に捧ぐる詩 浅草三部曲（水族館 casino folies 屋上）

『潤葉樹』 昭和五年二月

山中呪文―鴉、萩原朔太郎氏に『ニヒル』第一巻第一号 昭和五年二月
人生は絶えず前方へ『世界の動き』四月号 昭和五年四月
人生は絶えず前方へ『潤葉樹』四月号 昭和五年四月
石灰質以上の話『文学時代』第二巻第五号 昭和五年五月
不死再生の話『祖國』 昭和五年六月
第九百十三号一族『祖國』 昭和五年八月
卑近な英雄『祖國』 昭和五年十月
虚無 ヴァリエテ 見開かれぬ自然『詩神』第六卷十一号 昭和五年十一月

西伯利亜の第一日『詩人時代』第二巻第四号 昭和七年四月
鯉職『文学時代』第四巻第五号 昭和七年五月
スポーツ癡癡『若草』 昭和七年五月
わがシルビア『若草』 昭和七年八月
花冠『愛称』第八卷第八号 昭和八年十月
火花『愛称』第八卷第十号 昭和八年八月
海の非常(大洗岬にて)『若草』第九卷第十号 昭和八年十月
クリスマ・スツリー『愛称』第八卷第十二号 昭和八年十二月
抒情詩草 雲後『愛称』第九卷第一号 昭和九年一月
真弓子『日本詩壇』第二巻第三号 昭和九年四月
毒麥『詩人時代』第四巻第九号 昭和九年九月
酒狂『詩人時代』第四巻第十号 昭和九年十月
シニツク『詩人時代』第二巻第十一号 昭和九年十一月

野鴨『詩人時代』第五巻第一号 昭和十年一月

白菊の家『むらさき』第三巻第十号 昭和十年十月
冬枯れの野にて『むらさき』第三巻第十二号 昭和十年十二月
木ッ葉天狗『日本詩壇』第四巻第二号 昭和十年二月
故郷『キング』第十二巻六号 昭和十一年六月
母の小包『キング』第十二巻第十一号 昭和十一年十一月
落鮎 鳩『中央公論』 昭和十一年十一月
風塵の日『日本詩壇』 昭和十一年十二月
風塵の日 愛と董「凉枝」なる店に寄せる『榮養の日本』第六巻第一号 昭和十二年一月

みどり兒『キング』第十三巻第二号 昭和十二年二月
雛祭 櫻肉 みどり兒『榮養の日本』第六巻第三号 昭和十二年三月
雛祭『むらさき』第四巻第三号 昭和十二年三月
祈禱歌『むらさき』第四巻第六号 昭和十二年六月
我子は歩む『キング』第十三巻第十一号 昭和十二年九月
秋扇『むらさき』臨時増刊 少女文藝号 昭和十二年十月
悲劇の女王―マリア・アントソネット―『むらさき』第四巻第十二号 昭和十二年十二月
天使の寝顔『キング』第十四巻第二号 昭和十三年二月
わが馬は二歳『雄弁』 昭和十三年三月
抒情歌『若草』第十四巻第四号 昭和十三年四月
掌玉集 (母と子 入浴 子疾む 動物繪本 子を失ひし友に 楽しい食卓 我が子の顔)

宣撫班の歌	『キング』第十四卷第六号	昭和十三年五月
紫陽花	『雄弁』	昭和十三年六月
銃後の母	『むらさき』第五卷第八号	昭和十三年八月
秋雨の唄	『キング』第十四卷第十一号	昭和十三年九月
上海號	『令女界』	昭和十三年十一月
山上湖の秋	『キング』第十四卷 第十四号	昭和十三年十一月
しにつく	『むらさき』第五卷第十一号	昭和十三年十一月
倦怠の海	『知性』第二卷第四号	昭和十四年四月
波に遊ぶ子	『むらさき』第六卷第七号	昭和十四年六月
乳絞る乙女	『キング』第十五卷第十一号	昭和十四年九月
幸福	『令女界』	昭和十四年十二月
植物園拾遺	『現代』	昭和十五年二月
勤勞の歌	『むらさき』第七卷七号	昭和十五年七月
膽の苦きも共に嘗めて	『キング』第十六卷九号	昭和十五年八月
秋風新しく	『むらさき』第七卷第十号	昭和十五年九月
傷兵われ	『現代』	昭和十五年十月
聖戰	『現代』	昭和十五年十一月
櫻花の歌	『詩と美術』第三卷第三号	昭和十六年一月
風景に題す	『詩と美術』第三卷第四号	昭和十六年四月
花火	『詩と美術』第三卷第五号	昭和十六年六月
十坪の畑	『令女界』	昭和十六年八月
鍊成の歌	『キング』第十七卷九号	昭和十六年九月

山野行	『むらさき』第八卷第九号	昭和十六年九月
習俗	『むらさき』第九卷第二号	昭和十七年二月
胃腑撩亂	『むらさき』第九卷第四号	昭和十七年四月
東京起ち、戦ふ	『むらさき』第九卷第六号	昭和十七年六月
壮大な海	『むらさき』第九卷第八号	昭和十七年八月
冬の朝	『むらさき』第九卷第十号	昭和十七年十一月
梅花通信	『むらさき』第十卷第三号	昭和十八年三月
海の雄獅子	『辻詩集』日本文学報告会	昭和十八年十月
膝をつかず	『むらさき』第十卷第十号	昭和十八年十月
いのちの證	『詩集 大東亜』日本文学報告会編	昭和十九年十月
虚淡三篇	『至上律』第一輯	昭和二十二年七月
Ⅱ、その他の詩作品等に関する著作について		
鶏肋	『至上律』第六号	昭和三年十二月
第二鶏肋	『至上律』第十二号	昭和四年十月
詩に於ける技巧―岡本潤兄その他へ	『第二』	昭和四年十一月
科学と感情―岡本、小野両君へ	『彈道』第一卷第一号	昭和五年三月
「学校詩集」独語	『詩神』第六卷第三号	昭和五年三月号
詩への懷疑	『彈道』第一卷第二号	昭和五年四月
黄瀛君新著「星影」について	『詩神』第六卷第八号	昭和五年八月
高村光太郎	『詩人時代』第二卷第五号	昭和七年五月
断れた時間	『新詩論』第一輯	昭和七年十月
三十七のランボオ	『新詩論』第二輯	昭和八年二月

ウオントンの寢床 『若草』第九卷第四号 昭和八年四月

アトラスより 『宮澤賢治追悼』次郎社 昭和九年一月

兄横瀬夜雨の死 『報知新聞』 昭和九年二月十七日

疲労 『愛誦』第九卷第二号 昭和九年二月

飢渴以上 『生理』第四冊 昭和九年五月

十八億五千二百萬年 同

夜雨の髭（看護日記その他）『詩精神』第一卷第三号 昭和九年四月

シルエット 若き日の横瀬夜雨など『日本詩壇』第二卷第五号昭和九年

六月

大利根ぶり 『セルパン』 昭和九年十一月

「主として酒」 『詩人時代』第三卷第十二号 昭和九年十二月

珍優有死―石川善助君いろいろ『詩人時代』第五卷第二号 昭和十年二月

詩集『氷巖』（京坂喜美子）を小森盛が装幀 昭和十年三月二十日

夜雨の詩と乙女 『令女界』 昭和十年四月

獣人的文章 金子光晴を主役として

『日本詩壇』第二卷第十号 昭和十年十月

高村光太郎氏と私 『日本詩壇』第四卷第一号 昭和十一年一月

文人の絵・画人の文 『若草』第十四卷第八号 昭和十三年八月

独歩・死後滿三十年 『若草』第十五卷第七号 昭和十四年七月

戦争美術について 『若草』第十五卷第十号 昭和十四年十月

半古と薄氷女史 『若草』第十五卷第十二号 昭和十四年十二月

靖国の椎 『キング』第十六卷第九号 昭和十五年九月

新体制下の美術界 『若草』第十六卷第十一号 昭和十五年十一月

後記断章 『横瀬夜雨詩集 野に山ありき』 昭和二十二年五月

あとがき 『大手拓次詩集』創元選書 昭和二十三年二月

彼なほ死す『歷程』復刻第五号（逸見猶吉追悼号）昭和二十三年七月

夜雨と暮鳥と重吉 『至上律』第十輯 昭和二十七年一月

石川善助 『氷河』第五号 昭和二十七年七月

生死一断面 『美術新聞』第八三一号 昭和三十三年一月三十日

高村さんのエスキス 高村光太郎と智恵子

昭和三十四年四月二十五日 筑摩書房

東西南北欄 詩と絵画について 新聞紙名不明 昭和三十九年九月

完璧主義者 太田丙子郎追想録 昭和四十二年十二月二十日

老いというもの 『新日本美術』二四〇号 昭和四十五年十月三十日

常磐線柏駅―八木重吉のこと 『八木重吉未発表遺稿と回想』

壺井氏の論難―戦時中の高村さんに就いて『高村光太郎資料第六集』 麥書房 昭和四十七年一月

文治堂書店 昭和五十二年二月

暗愚小伝を読む『高村光太郎資料第六集』文治堂書店 昭和五十二年二月

石川善助 『石川善助・作品集』―別刷資料（再録）

人豪 大観 発表誌等不明

駒込書房 昭和五十五年

Ⅲ、単行本に収録された詩作品について

飢渴地帯 飯と水とその他 日本現代詩集（九）

昭和二十八年三月一日 創元社

飢渴地帯 日本プロレタリア文学大系 第四卷

昭和二十九年十二月二十五日 三一書房

飢渴地帯 日本現代詩大系 第八卷

昭和五十年四月三十日 河出書房新社

飢渴地帯 飯と水とその他 新訂 学校詩集

昭和五十六年十二月二十日 麦書房

飢渴地帯 日本プロレタリア文学集

昭和六十二年 六月三十日 新日本出版社

飢渴地帯 モダン都市文学 都市の詩集 平成三年四月十八日 平凡社

飢渴地帯 茨城近代文学選集 V 昭和五十三年二月十日 常陽新聞社

Ⅳ、参考文献

『高村光太郎全集』第十四卷（書簡一五八（昭和三年六月二十日）その他）

昭和三十三年六月

『禪と文学』高橋新吉

昭和四十五年 宝文館出版

『ダダと禪』高橋新吉

昭和四十六年 宝文館出版

逆流の中の歌 詩的アナキズムの回想

伊藤信吉

昭和五十二年十月一日 秦流社

青春の原野 更級源藏

昭和六十年九月二十五日 北海タイムス社

小森盛と大坪白夢 高橋新吉 『老壮の友』十月号 昭和六十年十月

おわりに

『モダン都市文学 都市の詩集』（平成三年四月十八日 平凡社）の「飢渴地帯」の二百二十四ページと二百二十五ページの間に、紙片がはさまれており、これは小森盛の晩年の筆跡によるもので、「高村先生が近くまで送って行って貧民街だから はちをか、せないための思いやりで僕はこれと言って引き返された」と書かれている。恐らく晩年「飢渴地帯」の制作背景について質問に答えたものであると思われる。

小森盛についての逸話等の資料としては、稲田稔の「詩壇諸先生 小森先生猫問答」（『詩人時代』第五卷第十一号 昭和十年十一月）で「ペン一本で生活を辛うじて支えている負けず屋小森先生」とある。高橋新吉の「逸見猶吉の断面」（『歷程』昭和三十三年九月）で「逸見は、小森盛と二人で、本郷の弥生ハウスに住んでいたが、」とある。

以上で資料の紹介を一先ず終わることにしたい。今後も資料の発見の可能性は十分にあることとされますのでお気づきの点等ありましたら、ご教示をいただければ幸いです。そして今後は、これらの資料の公開を考えております。『小森盛詩文集抄』のような形にまとめられればと考えています。

再度ではありますが、小森盛に関してご存知の方がおられましたら、お気づきの点等宜しくご示教いただようお願い申し上げます。

【研究ノート】

三島由紀夫「火山の休暇」について

（「菊田次郎物」序章に代えて）

小林 和子

一、

三島由紀夫に〈菊田次郎物〉とも称すべき、菊田次郎という作者によく似た主人公が旅先での出来事や思索を語る三作品がある。「火山の休暇」（「改造文芸」昭24・11）「死の島」（「改造」昭26・4）「旅の墓碑銘」（「新潮」昭28・6）である。三島が特定の主人公を繰り返し書いたのはこの一連の〈菊田次郎物〉以外には、実際のモデルがいたビート族を描いた風俗短編小説「月」（昭37・8）と「葡萄パン」（昭38・1）しかない。

この〈菊田次郎物〉については、青山健氏（注一）や小埜裕二氏（注二）による論考があるが、本稿では〈菊田次郎物〉について考えていく序章に代えて、今まで「火山の休暇」という作品が単独で論じられたことが無いので、この作品について少し気になったことを書きとめておきたいと思う。

二、

まず、菊田次郎という主人公の名前であるが、当時大評判となっていたラジオドラマ「鐘の鳴る丘」（昭22・7・5～25・12・29）の原作者で、のちに「君の名は」で一世を風靡することになる菊田一夫から着想した

のではなからうかと思われる。主題歌「とんがり帽子」も大ヒットとなり、戦後のこの時代を象徴する放送作家であった。芸術家表明ともいべき難解な内的告白がされていく主人公に、当時の大衆的人気を博した作家をもじった命名をするとともに、三島の戦後社会への諧謔を見ることが出来る。ただし、当初は「火山の休暇」という作品だけで終わる予定であったのかもしれないが、安易に付けられたネーミングかもしれないが、菊田次郎は青年期の三島の代弁者というような使命を与えられることになるのであった。

戦争中の昭和十九年十月に初の短編集『花ざかりの森』（七丈書院）を刊行した、早熟な文学青年・三島由紀夫は二十歳で終戦を迎え、昭和二十一年六月に短編「煙草」などの原稿を携えて鎌倉の川端康成の家を訪ね、川端の紹介で二月に雑誌「人間」に「煙草」が掲載されたことをきっかけに、小説家の第一歩を歩み出した。一方、昭和二十二年十一月末に東京大学法学部を卒業後、父の希望をいれて高等文官試験を受験し合格、十二月末には大蔵省銀行局に就職した。

しかし、文学への夢を続けた三島は十二月に、初の長編小説となる「盗賊」の第二章を「自殺企図者」と題して雑誌「文学会議」に連載

開始し、大蔵省勤務の傍ら「サーカス」(「進路」昭23・1)などの短編も次々に発表し、八月末に河出書房の坂本一亀氏から初の書き下ろし長編の依頼を受けたのを機に九月末に大蔵省を退職した。

十一月二十五日(注三)を起筆とした「仮面の告白」は翌二十四年四月二十七日に脱稿され、七月に出版された。この「仮面の告白」によって三島は一躍文壇の寵児となり、作家としての地位を確立したことは周知のことである。私小説的手法を取りながらホモセクシユアルである事を自覚していく主人公「私」の生い立ちからの半生を冷静に分析していくこの作品は、以後三島由紀夫の代表作ともなっていくのであった。

三、

「火山の休暇」は全集にして二十頁足らずの小品で、主人公の菊田次郎は次のように最初に提示される。

彼は廿五歳だった。浮動的な上機嫌、肉欲に苛まれてゐるし、目の底がほのかに疲労の赤らみを帯びてゐるさま、傲岸で子供っぽい眼差、やゝ不均整で瘦せて色艶の榮えない顔だち、肌理のこまかい皮膚、それでゐて粗い剃りあと、かうしたものが彼の顔の目じるしである。影法師にいどみかかる酔った剣士のやうなありさまで、彼は野心にあふれ、人生を快刀乱麻に裁断しようとする欲望に憑かれてゐた。

主人公・菊田次郎をそのまま作者三島自身と重ねていいかどうかは難しい問題ではあるが、青年期という「峠」にさしかかった三島が、優等

生として生きてきた平岡公威を捨てて、親の希望するエリート道を捨てて、敢えて職業作家に挑戦するにあたって自らの半生を大胆な手法で描いたのが「仮面の告白」だと言えるとしたら、それは「影法師にいどみかかる酔った剣士のやうなありさまで、彼は野心にあふれ、人生を快刀乱麻に裁断しようとする欲望に憑かれてゐた」から生まれた作品であったと言えるであろう。そして、「仮面の告白」を書いた後にも残った悩みが、「芸術と生活との、一種のいひしれぬ乖離」という問題であり、「表現といふことは生に対する一つの特権であると共に生に於ける一つの放棄に他ならぬこと、言葉を持つことは生にたいする負目のあらわれであり同時に生への復讐でもありうること、肉体の美しさに対して精神の本質的な醜さは言葉の美のみがこれを償ひうること、言葉は精神の肉体への郷愁であること、肉体の美のうつろひやすさについてか言葉の美の永遠性が打ち克たうとする欲望こそ表現の欲望であること」という感慨の中で、「肉体を鍛えるやうに言葉を鍛へ」て「文体に意を須^{もち}ひ、それが希臘彫刻の的確な線に似ることを念願した」と語る。

三島は、この「火山の休暇」について、「美しい風景からの詩的体験を緯^{よこいと}にして書かれた、わがままな詩的散文」であり、「海や美しい壮大な風景」から得られる創作への欲望をむりに「理論づけようとして失敗してゐるさまざまな屁理屈は、作品にとってはまったく重要ではない」(「あとがき」『三島由紀夫短編全集3』昭40・5、講談社)と述べ、この作品で『』で括って語られてくる次郎の思索を後にバツサリ切り捨てている。

しかし、この作品が書かれたのは「あとがき」の冒頭で述べているよ

うに、「青年期の不安と孤独感がいよいよ甚だしくなつて」きた時期であり、そのころの三島の「不安と孤独感」がどのようなものであったかを尋ねるには、この作品の「屁理屈」の中身を確認する必要があるであろう。

ここで、まずこの小品のあらすじを紹介しておきたい。

馬の蹄の音で目を覚ました次郎は、観光用の馬を借りて島の散策に出かける。風早崎の灯台で馬を繋いで次郎は灯台から相模湾を眺める。大島のO港からS港へ向かう定期船が視界を横切つて進んでいくが、その時その船の甲板の拡声器から流れていると思われるワルツの音楽を突然耳にする。「信じがたいほどの距離を貫いてくる音楽の軌跡を思ふと、次郎は感動し」、また、音楽は「われわれが生と呼ぶものの本質に近い存在」であり、「芸術家自身が生なのだ」と思いながら、しかし一方、船上で「擦り切れたレコードを掛けかへてゐる船員」の「現実」は「生」ではない、という思いにもかられるのであった。ホテルへの帰り道馬上で次郎は、昨夜船上で事務長から聞いた、何不足ないからこそ希望を失つて船上から投身自殺をした老人の話を思い出す。ホテルへ帰つた次郎はボオイやフロントや食堂附の女の子も皆不思議な微笑で接してくれるのに気づき、この「無言の親愛」に「疲労と渴望の熱っぽい倦怠」を共有する「同類を見つけ出したような安心感からくるもののかしらん」と思つたりする。夕方海峡が臨まれる乳ヶ崎に落日を見に出かけて帰つてきた次郎は、例のボオイが心配して探していたということを知つて、ようやく彼らの微笑の意味は、次郎が自殺志願者なのではないかと心配した結果だったことを知る。そして、次郎は次のような感慨を抱く。

それにしても、火山は休んでゐるのに、次々と自殺者が船に乗つて、はるばる東京からこの島まで来て、噴火口に身を投ずるのは何故であらう。火山は休業中だ。地獄へ行つても休業中といふ札が貼つてあるかもしれない。地獄の大通りを歩いて行つても、酒屋も理髪店もホテルも八百屋も魚屋も公会堂も劇場も、ことごとく休業中といふ札を戸口に貼つてゐるかもしれない。死んだ人間は、休業中の火山へとびこんで、休業中の地獄へ行つて、休業中の大通りを歩いて、結局どこまで行つても泊めてまらふことができないかもしれない。さて、それから先、どこへ行けばよいのであらう。……それにもかかはらず、空虚な火口へ身を投ずるために、次々と、人は船に乗つてこの島を訪れるのである。

結局、地獄はなくなつたのではなからうか。現代の地獄は、地獄が存在しないことではあるまいか。現代の怖ろしい特質はここにあるのではなからうか。さもないければあれほど人々が地獄を呼び求め、ありもせぬ地獄を堯望する気持ちが次郎にはわからない。

四、

三島文学にとつて〈海〉が最も重要なテーマ（注四）であつたことは有名であるが、三島と実際の海との出会いは実は幼いころからのものではない。

よく知られているように、お祖母さんの病室で隔離されるように育つた虚弱体質の三島は、九歳のころの学習院初等科恒例の沼津の合宿にも祖母の反対で参加していない。彼にとつて〈海〉というテーマを最も端

的に掲げた初期作品「岬にての物語」（「群像」昭21・11）の舞台になった房総半島鵜原に、十二歳の夏、家族と滞在したのが三島にとって海と向き合った初めての経験だった。しかし、それから戦争、忙しい大蔵省時代を経て、三島が初めて船に乗り海を渡り、自分を見つめるための時間を得たのが、「仮面の告白」の完成直前の昭和二十四年三月の二度の大島旅行（注五）であった。この二度目の大島旅行での体験が、三島の初期戯曲「灯台」（「文学界」昭和24・5）として成立している。

その後、この「火山の休暇」が発表された直前の昭和二十四年十月、昭和二十五年四月から五月に大島観光ホテルに滞在して「愛の渇き」や「青の時代」なども執筆している。

「火山の休暇」のもととなった二十四年初春の二度の大島旅行は、一人だけで創作や思索のための自由な時間を持つことができた三島にとって初めての旅であり、文学者としての自分を見つめるための旅、眷恋の〈海〉との出会いの旅であった。そして、「仮面の告白」という決意の作品を完成させるためにどうしても三島にとっては必要な旅であったのかもしれない。

しかし、そもそも三島は初めての自由旅行になぜ伊豆大島を選んだのであろうか。それには、作品の中でも自殺者と間違われるエピソードが書かれているが、それはこの大島が自殺の名所であったことが関係すると思われる。

伊豆大島は古くは保元の乱で源為朝（注六）が流され最期を遂げた島であり、流刑の地として、活火山三原山の歴史とともに生きてきた島である。

伊豆大島が観光の島に本格的になったのは明治四十年の東京湾汽船の就航（注七）に始まる。そして、大島からやってきた旅芸人の一家との邂逅を描いた川端康成の名作「伊豆の踊子」が刊行されたのは昭和二年三月の事であった。大島が観光地として発展していくのは、昭和三年のことで、橘丸（392トン）が東京―大島―下田に就航し、御神火茶屋も創業した。特に大島観光のブームはこの年の「波浮の港」（野口雨情作詞、中山晋平作曲、佐藤千夜子歌）の大ヒットにより始まる。ちなみに三原山火口への投身自殺（和田滝蔵）が報道された最初もこの年だった。

しかし、三原山の自殺が世間に知られるようになったきっかけは昭和八年二月に起こった俗にいう〈三原山心中〉である。

当時は昭和七年五月に起こった「天国に結ぶ恋」（注八）と話題になった、慶応義塾大学の男子学生と素封家の娘との心中事件、〈坂田山心中〉の翌年であり、新聞に自殺や心中事件が大きく取り上げられる時代でもあった。事件の経緯は次のようなものである。

事件の一報が伝えられたのは「東京朝日新聞」の二月十四日付の社会面で、「三原山噴火口で女学生同性心中」という見出しで「十二日朝元村に入港した東京湾汽船菊丸から上陸した女学生風美人二人はすぐその足で白煙上る三原山への登山路をたどって行つたが十二日昼頃になつてその内の一人の女学生は突如噴火口に飛び込み自殺を遂げた同行の女学生風の娘は警戒中の人々に助けられ目下元村で保護中である」として、自殺したのは実践高等女学校専門部女子学生国文科二年松本貴代子（二二）で彼女の顔写真も載せている。助かったのは実践高女専門部の同級生の富田昌子（二二）である。そのあと貴代子に関して「非常な文

学好き 淑徳高女出の秀才」とタイトルして父親や教師の談が載せられている。翌十五日付の紙面では扱いはより大きくなり、貴代子が自ら撮っていたという遺影と辞世の歌を書いた色紙を大きく写真で掲げ、「火を噴く三原山山頂 親友・死の立会ひ『自殺幫助も覚悟の上』約束通り最期を見届く」や□で囲んで「女学生の獵奇自殺」や「耽美主義者で結婚も否認」とタイトルして「三原山の煙を見たら私の位牌と思つてください」という貴代子の遺言も紹介され、大衆の興味をそそるような記事が続いている。

一方「読売新聞」は十五日付で「学友噴火口の投身を 奇怪！二度も道案内 実践女学校専門部生の怪行動 三原山に『死を誘う女』」という見出しで、助けられた富田昌子が「去月九日にも学友を同噴火口に案内自殺せしめたことがあり今度で二度目の『死出の案内』を勤めたことが判明した」と報じた。翌十六日付でその続報として同校三年宇恵喜三枝子から頼まれ大島の三原山まで案内し三枝子の望みで彼女を火口に残したまま下山したという内容を伝えた。そして「同性愛なぞではない（傍点原文）」として教師談を載せている。十六日付では、「『死の案内』全貌判然す『死んでいった二人はさぞ喜んでいよう』昌子の『異常神経』」というタイトルで続報を伝えている。この時代の新聞の取材競争が伺える展開である。

「東京朝日新聞」二月十六日付では、「女学生が投げたふたつの渦巻 三原山の自殺と乱酔事件を世人はどう見るか」という特集記事を組み、菊池寛と吉屋信子の見解を載せている。十七日には続いて起こった民政党代議士桜内辰郎嬢の自殺記事の下に、三原山で心中を試みる者の記

事が載り、二十三日付では「文学青年三名 三原山心中未遂」の記事の他にも「有難くない御繁昌 三原山番人の憂鬱」として御神火茶屋の主人の写真入りの囲み記事で、自殺者が相次いでいることを書いている。三月になると三日付で「三原山患者激増に 大島署からSOS 警視庁へ増員を申請」という記事が載り、「三原山患者」という呼び方や「大島病」という呼び方まで出て、自殺者の激増が伝えられている。

これ以降も〈三原山心中〉事件については、新聞から婦人雑誌や大衆誌（注九）に報道の中心が移り、「三原山心中の真相」などの雑誌の見出しが飾られることになる。〈坂田山心中〉が令嬢の遺体の紛失という事件を派生しその獵奇性が大衆の興味をそそったように、〈三原山心中〉の場合は、「同性愛心中」から「死の案内人」という展開が大衆の興味をそそったのであろう。「読売新聞」は、この事件の後日談を作るべく、三原山火口にゴンドラを設置して撮影するなどということまで行っている。

ちなみに、三原山における心中や自殺は昭和八年一年間で二百数十名、未遂者は六百名以上に上った。

そしてここで何より気になるのは、三島由紀夫の「火山の休暇」には、この〈三原山心中〉に関することが全く触れられていないことである。この心中事件が起こった時に三島はまだ八歳であったが、伊豆大島と言えはこの事件を思い出すのが普通ではなかろうか。

菊田次郎は自殺の名所である三原山にまるで敢えて背を向けるかのようには大島北岸の海を臨む断崖ばかり訪ねて思索にふける。この作品には一切三原山自体が描かれない。付け加えれば、海の向こうに雄姿を見せ

ているはずの富士山すらなぜか描かれない。

三島は自己や自分の作品に対して非常に多弁で饒舌な作家である。だからこそ、「仮面の告白」完成時の三島の心境を託されていると思われる次郎が、この島と密接に結びついている自殺の名所を敢えて避けていることはかえって気になるのである。

三島が「仮面の告白」という「内部の怪物を何とか征服したやうな小説」（私の遍歴時代）昭38・1・10～5・23「東京新聞」週一回連載）を書いたあと、「二十四歳の私の心には、二つの相反する志向がはつきりと生まれた。一つは、何としても、生きなければならぬ、といふ思ひであり、もう一つは、明確な、理知的な、明るい古典主義への傾斜であつた」という。そして、少年時代に心惹かれていた詩に対して、「認識こそ詩の実体だと考へるにいた」り、「感覚からは絶対に決別しやうと決心した」と書いている。

この「火山の休暇」は、自殺者に勘違いされたエピソードではあるが、三島の大島行は実は決死の旅、一種の死出の旅であつたのではなからうか。実際に自殺を試みるために訪れたというのではなく、大事な何かを葬るための旅だつたのではなからうかと思うのである。だからこそ、皆が死に場所とする三原山には敢えて背を向け、〈海〉と向き合うことで、「何としても、生きなければならぬ」という決意を固めなくてはならなかつたのではないか。

〈三原山心中〉事件に絡めて言えば、貴代子ではなく、死を見つめる証人としての昌子として生きていくことが、芸術家の宿命であると言っているかのようである。

五、

三島は「仮面の告白」の初版に付けられていた「『仮面の告白』ノート」に次のように書いている。

この本は私が今までそこに住んでいた死の領域へ遣さうとする遺書だ。この本を書くことは私にとつて裏返しに自殺だ。飛び込み自殺を映画にとつてフィルムを逆にまはすと、猛烈な速度で谷底から崖の上へ自殺者が飛び上がつて生き返る。この本を書くことによって私が試みたのは、さういふ生の回復術である。

（中略）

多くの作家が、それぞれ彼自身の「若き日の芸術家の自画像」を書いた。私がこの小説を書かうとしたのは、その反対の欲求からである。この小説では「書く人」としての私が完全に捨象される。作家は作中に登場しない。しかしここに書かれたやうな生活は、芸術家の支柱がなかつたら、またたくまに崩壊する性質のものである。従つてこの小説の中の凡が事実にもとづいてゐるとしても、芸術家としての生活が書かれてゐない以上、すべては完全な仮構であり、存在しえないものである。私は完全な告白のフィクションを創ろうと考へた。「仮面の告白」といふ題にはさういふ意味も含めてある。

「火山の休暇」の中の「小ざかしくも次郎は『書く人』の立場に身を置いた」という感慨は、まさにこの「『仮面の告白』ノート」の括弧付きの「書く人」の記述とそっくり対応している。「仮面の告白」を「完

全な告白のフィクション」たらしめるために、『書く人』としての私が完全に捨象された」というエキスキューズを付けざる得なかった三島は、『仮面の告白』完成後もう一度「菊田次郎」という分身に「書く人」としての苦悩を語らせずにはいられなかったということかもしれない。

この「火山の休暇」という今までほとんど論究されてこなかったこの作品は、実は「仮面の告白」を完成し、作家としての方向性を確立した三島の決意表明と見ることができるとはなからうか。

死が身近にあり、「一億玉碎が必至」と思われ、非日常が常態化した戦時中こそ、「自分といふものを負担に感じなかった」三島にとって、「不幸は、終戦と共に、突然私を襲ってきた」（私の遍歴時代）。

「現代の地獄は、地獄が存在しないこと」と考える三島は、緩慢で俗悪な戦後の日常という名の「生」を忌避し、しかし、芸術家としてこの戦後の日本を生きていこうと決意した。そのような三島の内的告白が「火山の休暇」という小品には見つけられる。

「火山の休暇」の中で自殺の名所・三原山を背に、乳ヶ崎から海に沈む太陽を眺めながら、菊田次郎は「古代人が奇蹟の顕現の前にひれふした気持はかうしたものではなからうか」と思うほど「刹那の落日」に感動して、次のように心中を語る。

『われわれの生も・・・』と次郎は考へた。『われわれが考へるよりはもつと壮大であり、想像と思索と行動が及ぶかぎりをこえて壮麗なものであるにちがひない。さればこそそれは現実ではないんだ。さればこそそれは表現を要求するんだ。この廻りくどい緩慢な行為を要求

するんだ。表現によつて、われわれは生に還つてゆく。芸術家が死のあとまでも生きのこるのはそのためだ。しかも表現といふ行為は、芸術家の生活は、何といふ緩慢な死だらう。精神が肉体を模倣し、肉体が自然を模倣する、つまり、死を模倣する。自然は死だ。そのとき芸術家は死の限りなく近くに、言いかへれば、表現された生の限りなく近くにゐるのだなあ。芸術家にとつては、だから絶望は無意味だ。絶望する暇があつたら、表現しなければならぬ。なぜかといつて、どんな絶望も、生を前にして表現を感じなければならぬこの自己の無力感、おのれの非力を隅々まで感じるこの壮麗な歓喜と比べれば何ほどのことがあらう。・・・』

これは、三島の「海と夕焼け」（群像）昭和30・1）の主人公・安里の輓晦にそのまま受け継がれている。文久九年晩夏、羊飼いの少年安里は啓示を受けて、十字軍に参加するためマルセイユに着いたが、奇蹟は起こらず、人買いに騙されてインドで中国の禪師に助けられ、日本の鎌倉の建長寺の寺男になっていた。彼は遠くの海に沈む夕日を見るために少年を連れて山上にやってくる。そして、世界を彷徨するうちにいつの日か信仰を失ったが、「ただ、今もありありと思ひ出すのは、いくら祈つても分かれなかった夕映えの海の不思議である」と語る。

三島は、この「海と夕焼け」という小品に対して、「三島由紀夫短篇全集5・あとがき」で、この作品は「芸術家小説の変形」で、『詩を書く少年』の絵解きとも見るべき作品で、つひに海が分かれるのを見ることになかった少年の絶望は、自分が詩人でないことを発見した少年の絶

望と同じである」と述べ、「もつとも自分の好きな短編」の一つであると述べている。また、「新潮文庫・解説」（昭43・7）では、「奇蹟自体よりもさらにふしぎな不思議という主題を、凝縮して示そうと思ったものである。この主題はおそらく私の一生を貫く主題になるものだ」とも述べている。

三島が、戦争中の〈詩を書く少年〉から、戦後の現実の中で「仮面の告白」によって小説家として出発していく苦渋の決意を、大島の海に沈む落日の前で菊田次郎に語らせたこの感慨は「海と夕焼け」の〈不思議〉と呼応している。

三島は「仮面の告白」の中で、「アウグステイヌス風な予定説の線を外れることがたえてなかつた」と書き、人生の「献立表」を「最初から私はそれを見ていた」と書いている。

この次郎の思索は、昭和二十六年の年末から五カ月に及ぶ世界一周旅行におけるギリシャとの出会いを経て、その旅行記である『アポロの杯』（朝日新聞社、昭27・10）や〈菊田次郎物〉の第三作「旅の墓碑銘」、そして、「自己改造の試み」（『文学界』昭31・8）などを経て、最終的に自らの宿命を語った「太陽と鉄」（『批評』昭40・11・43・6）まで一直線に繋がり、三島の鮮烈な最期をも予言する。

六、

次郎が感動的な落日を見た乳ヶ崎は、風早崎の大島灯台のすぐ西にあつて、海峡に突き出した断崖である。そこからは多くの人が身を投げた三原山が一望でき、真正面に富士山も一望できる。

この「火山の休暇」の中で〈三原山心中〉事件と同様に全く触れていないが、次郎が「自然は死だ」と夕日の中で感慨した断崖で、三島が初めて大島を訪れた三年半前に一つの事件があつた。この乳ヶ崎で夕日を眺めながら二十七歳で自決した青年将校がいたのである。大島守備の第三二一師団の最高責任者で師団参謀であつた福井寛少佐は、師団の全将校を復員させ、武器弾薬のアメリカ軍への引き渡しが完了した昭和二十年十一月七日に自裁したのであつた。三島の自決後の昭和五十七年、この地に有志の手により「福井参謀の碑」が建てられた。

三島はこの事件を島の人から聞いていたかもしれないし、全く知らずにこの乳ヶ崎を選んだのかもしれない。三島が、この乳ヶ崎の海に沈む夕日を見ながら次郎に「表現によつて、われわれは生に還つてゆく」と語らせていることは不思議な偶然である。

三島は終戦を境に書き継いだ小説「岬にての物語」の中で、青年と美しい少女と三人で岬の上でかくれんぼをしていて、急に彼らが消えた断崖から海を覗き込んだ時、「私の目にはたゞ、不思議なほど沈静な渚がみえたのだ。私はふと神の笑ひに似たものの意味を考えた」（傍点原文）と書いた。

戦争中に結局神風は吹かなかつたが、三島にとって、〈海〉はそのような「奇蹟よりもふしぎな不思議」を見せてくれるものであり、その〈海〉は、海に飛び込んで消えた、若く美しい男女の死がそうであるように、三島が言葉によつて追い求め、芸術家としてそれを見届ける決意をした〈死〉に他ならないことを三島は初めから予感していた。

そのことを「火山の休暇」という作品でも確認できる。〈海〉の不思議

議をこそ描くためには、「休業中」の火山も壮大な富士山も必要なかったのかもしれない。《海》と向き合うことで次郎がたどり着いた「自然は死だ」という答えは、三島にとつては「自然」＝「海」であり、《海は死だ》ということに他ならないのであるから。

芸術は自然を模倣し、自然が芸術を模倣する。

ワイルドを引き合いに出すまでもなく、ロマン主義者であることを秘めながら冷徹なニヒリストとして生きていく決意表明を「火山の休暇」にも見出せるのである。

三島がこの時期、あえて大島を選び、乳ヶ崎で海に沈む夕日に芸術家としての決意を菊田次郎に語らせたのには、必然があった。

七、

そのほか、この「火山の休暇」の中に他にも気になる場面がある。それは、次郎が大島に渡ってきた船の中のシーンで「おーい、菊田次郎、お前の青い檣灯がついてゐないぞお」と内心叫ぶ後に、船室に戻った次郎が二つの寝台のうちの自分の「寝台の毛布は男根を象り、むかうの毛布は女陰を象つて畳まれてゐる」のに気づき、「居辛くなつて船室を出て、サロンに行つて」、「精神を否定するのはいい、しかしそこからどこへ向かつて歩き出すか」と煩悶するうちに、船から飛び降りた老紳士の話を聞くことになるのであった。

ここには、「仮面の告白」によつて自らの性のアイデンティティーを告白することに躊躇していた作者三島の姿が入り込んでいるのではなからうか。あまりにも唐突なシーンに当時の三島の混乱が見え隠れしてい

る。

自己にも作品に対しても常に必要以上に饒舌である三島が、「火山の休暇」で書かなかったこと。思わず書いてしまったこと。決して完成度が高いとは言えない「火山の休暇」であるからこそ、「仮面の告白」執筆の秘密やその後の三島の方向性へのヒントが隠されているように思ふのである。

八、

三島は「火山は休業中だ」と書いたが、三島の四度目の訪問の二か月後の昭和二十五年七月に三原山は噴火し、それは二十六年まで続いた。三島は噴火後二度と大島を訪れることが無かった。しかし、晩年毎夏避暑に訪れていた下田から毎日のように大島を眺めたはずである。三島は対岸の大島を、三原山の煙をどのような気持ちでながめていたのであるうか。

三島の死の十六年後の昭和六十一年に三原山は大噴火を起こし全島避難になった。そして平成二十五年十月台風26号によつて大きな被害を受けたことは記憶に新しい。

私は「椿祭り」開催のニュースを聞いてこの二月十四日に初めて伊豆大島へ日帰りで訪れた。復興は進み、観光客で賑わっていたが、三島が滞在していた大島観光ホテルは現存しない。

「火山の休暇」の中では触れていないが、三島も見たであろう富士山が青い海の下に白い雪を頂いて美しい姿を見せていた。そして、次郎が「壮麗な歓喜」と呼んだ、大島の《海》に沈む真っ赤な太陽はゆっ

くりと姿を消した。

(注一) 「菊田次郎もの」をめぐって」(「江古田文学」昭60・4)

(注二) 「ある三島由紀夫像―菊田次郎もの」をめぐって」(「日本語と日本文学」昭63・9)

(注三) 三島由紀夫は坂本一亀宛て書簡の中で「起筆は十一月二十五日とし」と書いているが、これは二十二年後の三島事件の日と重なる。用意周到に準備された決行の日付が「仮面の告白」の起筆日であることは重要である。

(注四) 三島の処女作「花さかりの森」や「岬にての物語」などの初期のものから、ほとんどの作品の主題に〈海〉があることは周知のことであり、三島の遺作「豊饒の海」(水の無い月の海)はもちろんである。三島文学＝海であることは自他ともに認めるところである。

(注五) 「作者の言葉(燈台)」(「関西実験劇場プログラム」昭24・11)

(注六) 三島は最後の歌舞伎脚本である「椿説弓張月」(「海」昭44・11)を発表し、同月国立劇場で三島自身演出で上演している。曲亭馬琴原作のこの作品でも大島の場面を大きく取り上げて「悲劇の告誡」と称している。

(注七) 以下「大島町史・通史編」(2000年)による。

(注八) 三島由紀夫に「天国に結ぶ恋」(「オール読物」昭24・6)があるが、天国に選ばれて上ったパンパンの女と神様との恋を描いた寓話的な小品で、「坂田山心中」などとは直接的な関係は無い。

(注九)

ただ、この時期に三島は戦前の「天国に結ぶ恋」と言われた心中ブームに興味を持っていたことは確認できるであろう。今防人「観光地と自殺―昭和八年、伊豆大島・三原山における投身自殺の流行を中心に―」(「流通問題研究」23号、1994・5)

【研究論文】

北原白秋『邪宗門』における象徴詩法

—〈生きた詩〉の創造のために—

本 庄 あかね

一、〈生きた詩〉

西欧象徴詩の先駆的な紹介者である上田敏は、日本の文壇に象徴詩とは何たるかを説明するなかで、西欧の象徴詩論を参考にして次のように述べている。

象徴の用は、之が助を藉りて詩人の観想に類似したる一の心状を讀者に与ふるに在りて、必らずしも同一の概念を伝えむと勉むるにあらず。されば靜に象徴詩を味ふ者は、自己の感興に應じて、詩人も未だ説き及ぼさざる言語道断の妙趣を玩賞し得可し。故に一篇の詩に対する解釈は人各或は見を異にすべく、要は只類似の心状を喚起するに在りとする。（上田敏『海潮音』明治38・10 本郷書院）

象徴詩とは、言葉に表しにくい事象や心象に対して、それを想起させる具体的な事物や感覚的な言葉で置き換えて表す詩篇のことを言う。象徴詩を先ず定義づけるとすれば上述の如くとなる。しかし、引用文中で敏が述べているのは、象徴詩の別の側面についてである。一人ひとりの

読者によって、作品の解釈が個別に創り出されるものであること。それ故に、多様な読みが成立すること。これらは、何も象徴詩に限らず、読む行為全般に当てはまる事態の筈だが、作品の多様な解釈を前提とし、その解釈の幅を詩法の本質に据えているという意味合いにおいて、象徴詩の特質と言えるのだろう。

また、同様に、明治象徴詩の実作者でもあった木下杢太郎は、文学上の同伴者たる北原白秋の象徴詩集『邪宗門』（明治42・3 易風社）を論評するにあたって、

作者は自然から其好む元素を選び来つて、詩章に織つて読者の前に開展した。而してそれ以上何等の説明を為やうとは欲しない。唯臆げなるものを暗示するのみである。故に読者は各自の連想作用を此織物に結び付けなくてはならぬ。故に此詩は靜的でなくて動的である。（木下杢太郎「詩集『邪宗門』を評す」『スバル』明治42・5）

と、象徴詩の解釈が自由なかたちで読者に委ねられていると述べている。

象徴詩において意味内容は、固定してあるのではなく、個々の読者の読みの推移の中に生滅する動的なものだとされる。読者の想像力こそが、『邪宗門』から生きた詩を作り出すのだ、と。

明治期の象徴詩人らにとって、このような〈生きた詩〉を獲得するに至るまで、多くの困難が伴ったであろうことは容易に推測される。なぜなら、一般に表現とは、意味内容を正確に、受け手に伝えるところにこそ目的があると考えられるためである。確かな伝達ということを図すれば、意味内容を固定、明示して受け手に差し出す必要が当然ながら出てくる。ところが象徴詩は、〈色彩よりも陰影を〉と歌われ、象徴派の信条となったヴェルレーヌ「詩法」(一八七四年)にある如く、意味内容を暗示し量かすところに奥義があるとされる。

曖昧であり、無数の解釈を許容しながら、かつ、読者の心深くに一定の像を結ばせる表現とは、一体どのようなものなのだろうか。白秋は、読者の想像力のなかに〈生きた詩〉を創造させるべく、どのような創意工夫を施したのか。本稿ではこうした問題意識のもと、白秋の象徴詩を分析し、『邪宗門』の象徴詩法的一端を照らし出すことを目的としたい。

二、「謀叛」

日本の文壇に西欧象徴詩が本格的に移入されたのは、明治三十年代である。前述した通り、先駆的に象徴詩を紹介し、日本文学の発展に大きな貢献をはたしたのが上田敏であった。敏による象徴詩の紹介ならびに翻訳を経て、薄田泣菫や蒲原有明らが象徴詩の実作に乗り出し、白秋は、

彼らの後続として創作活動にいそしんだ。日本において象徴詩の創作が行われてまだ日が浅く蓄積が十分ではない中、白秋は象徴詩という新分野に挑んだことになる。その成果は、明治四十二年に上梓された象徴詩集『邪宗門』にまとめられている。

以下で、日本の象徴詩の創成期における白秋の試みを、詩篇の分析を通して明らかにしていく。具体的に述べると、集中から「謀叛」の一篇を選び、考察を加えていくこととする。ここで「謀叛」を分析の対象に選ぶのは、次のような理由による。

これまで『明星』を舞台に活躍していた白秋が、明治四十一年一月、新詩社脱退という文壇における大事件を起こしたことはよく知られている。この事件以後、初めて発表された詩篇が、「謀叛」である。そのような意味で本作は、白秋が文学的な自立をはたした、一つの画期を成していると言えよう。作風の面からみても、本作を契機に『邪宗門』象徴詩の詩体が確立されてくるのであり、「謀叛」は、白秋象徴詩の独創性の萌芽した詩篇と位置づけられる。従って、「謀叛」を分析することによって、『邪宗門』における象徴詩法の特徴が、原初的な形で見えてくるのではないかと考えるのである。ここで改めて、「謀叛」の一篇を載せておこう。次のような作品である。

ひと日、わが精舎の庭に、
晩秋の静かなる落日のなかに、
あはれ、また、薄黄なる噴水の吐息のなかに、
いとほのにギオロンの、その弦の、

その夢の、哀愁の、いとほのにうれひ泣く。

蠟の火と懺悔のくゆり

ほのぼのと、廊いづる白き衣は

夕暮に言もなき修道女の長き一列。

さあれ、いま、ギオロンの、くるしみの、

刺すがごと火の酒の、その弦のいたみ泣く。

またあれば落日の色に、

夢燃ゆる噴水の吐息のなかに、

さらになほ歌もなき白鳥の愁のもとに、

いと強き硝薬の、黒き火の、

地の底の導火燵き、ギオロンぞ狂ひ泣く。

跳り来る車輻の響、

毒の弾丸、血の煙、閃めく刃、

あはれ、驚破、火とならむ、噴水も、精舎も、空も。

紅の、戦慄の、その極の

瞬間の叫喚燵き、ギオロンぞ言ひたる。

(初出は『新思潮』明治41・1)

傍線を引いたように、四連構成の詩篇のなかで、『バイオリンが泣く』という主題が、全連の後半二行において規則的に繰り返されていること

が分かる。まず、この主題について、順を追ってみていきたい。

一連では、バイオリンの響きが実にかすかな悲愁のすすり泣きのようなであると提示される。バイオリンの音色にもの悲しさや愁いを誘われる感性は、多くの人に共有されるものであろう。それ故、バイオリンが悲愁にすすり泣くとする擬人法は、理解しやすい喻である。続く二連では、蒸留酒が喉をひりひりと刺激する如き痛烈な刺激に、苦しみ泣いているかの如き音色へと、響きが変化する。三連から四連へと至り、バイオリンは一層狂おしく奏でられており、その激しさは極限に達する。絶頂へ至る過程は、じりじりと導火線を伝った火薬がついに爆発するというイメージによって表現される。

白秋は、交友のあつた河井醉茗に宛てた書簡(注1)の中で、「謀叛」について次のように言及している。

象徴の力はこれらの云ふべくして云ひがたく、描くべくして描きがたき、最も複雑に最も深く相錯綜したる所謂言語道断の心境をうつし出すにあり

とし、「謀叛」で描いたのは、

沈静の心境よりきざしそめたる謀叛の情緒の漸次に強烈になりゆきつつ、遂に大叫喚の心境に至る内部精神の反乱に御座候

と。また、「謀叛」における〈ウキオロンの響はこれ情緒〉であり、〈内

部精神の情緒」を「あるものを藉りて最も音楽的に奏で」ようとしたとも、述べられている。

即ち、言葉で言い表せない心情を、人間に知覚され得るバイオリンの音色によって連想させるところに、この詩篇の趣旨があるとされているのである。本作についての白秋の自作解説は、読み手としても十分に領かれるものではなからうか。悲愁に覆われた沈静の心情から、次第に高揚し、激しく狂乱する心情へと移っていくという情緒の流動を、読み手は自然と感受することができる。このように、楽器の音色によって一連の情緒を表現するという音楽的象徴がこの詩篇の表現内容だとするならば、続いて頭を擡げてくるのは、以下のような疑問であろう。一体、バイオリンの音色以外に、修道院の庭の風景などの描写が作中に含まれてきていることの意味はどこにあるのだろうか、と。

ここまでの考察では、『バイオリンが泣く』という主題が全連の後半二行において規則的に繰り返されている点に注目して論じてきた。ここからは、述べたような疑問について考えるため、全連の前半三行に夕暮れの修道院の風景が持続して描かれているという、本作のもう一方の面に、視点を移してみていきたい。全連を通して、前半三行に、修道院の庭の風景は、どのように描かれているのであろうか。解釈を以下にまとめておこう。

〔二連の前半三行〕

ある日の、修道院の庭では、／晩秋の静かな夕暮れのなか、／ああ、噴水の水が、（夕暮れの光を受けて）薄黄に色づき、吐息をもらすように滴っ

ている、

〔Z〕の記号は改行を表す・以下同様

〔二連の前半三行〕

修道院の（夕方のミサで）蠟燭の火が燃え、微かに煙を立てて、懺悔が行われる／（ミサが終わり）廊下へと白い衣を身につけて出てくるのは／黄昏に、無言で列をなす修道女たちだ。

〔三連の前半三行〕

またしばらくすると、落日が照り／（真つ赤な）落日の色に染まって噴き出ている噴水の水は、夢が燃え上がり思いが沸き立って、その苦痛に吐息をもらすかの如くに滴っている、／さらに、まだ、水に浮かぶ白鳥には歌がなく、愁いている。

〔四連の前半三行〕

戦車が音をたてて勢いよくやって来るようだ、／（夕焼け空から、戦場の幻影が浮かび上がってくる）弾丸が飛び交う、血煙があがる、刃が閃く、／ああ、ああ、噴水も、修道院も、空も、全て火となろう。

順に解釈をみていく。まず、晩秋の修道院の庭の噴水に、夕日が黄色く照りかえす、もの静かな風景が提示されている。続いて、修道院の内部から外に出てくる修道女たちの姿が捉えられる。（懺悔のくゆり）とあるように、修道院は、罪の贖いを願う神に仕える者たちの愁いが漂う空間として描かれているのだろう。本作が象徴詩である点を鑑みると、こ

うした晩秋の修道院の風景の描写は、自然描写というのではなく、具体的な風景に仮託して、愁いを含み沈静した心情を言い表そうとする、一種の心象風景と受け取れる。《夕暮れの修道院の風景》の主題をさらに追ってみよう。最初に提示された、夕日が噴水に照り返すという描写は、冒頭から転じて、色づいた水が沸き立つ夢が燃え上がるイメージとして描かれている。最終連で、修道院の風景は、赤い落日の空からの連想なのである。真つ赤に炎上した戦場へと変貌を遂げていく。このように、《夕暮れの修道院の風景》の主題を全連を通して解釈することで見えてくるのは、沈静の心情から動乱状態へと移行する、心模様の変化なのである。

ここまでの考察で、《夕暮れの修道院の風景》と《バイオリンが泣く》という二つの異なる主題がそれぞれ独立して進行するという「謀叛」の構造が明らかとなった。では、こうした二重構造はなぜ必要とされたのだろうか。このような形をとることで白秋は何を意図していたと考えられるのか。その意味については、本稿の結びにおいて詳述したいと思う。先ず、同時代の文壇において、詩の構造や形式にどれほど意識が向けられていたのかという点を、確認しておきたい。

三、二重構造

「謀叛」においてみられた二重構造について考える上で、次に引用する河井醉茗の文章は大きな示唆を与えてくれる。この文章は、上田敏『海潮音』に「薄暮の曲」と題され訳出された、ボードレール『悪の華』

(一八五七年)中の一篇に解説を加えたものである。白秋が敏を師と慕い、『海潮音』から多くを吸収して自らの象徴詩に活かしていったことはよく知られている。とりわけ「薄暮の曲」は、白秋が最も影響を受けた作品の一つとされており、白秋が、醉茗の「薄暮の曲」の解説に目を通していた可能性は、極めて高い。

『薄暮の曲』は夕暮の感じを極めて深く、濃く、描いたもので彼が常に好むで作詩に用ゆる臭覚は遺憾無く応用せられて居る。此の詩の形式は一見、普通の四節に分れた十六行の詩としか見えぬが、実は仏文学に Pantoun と称へる東洋の詩の形式を取つたものである。(中略) 此の Pantoun の形式の要件は一節が四行から成り立つて居て、第一節の第二行と第四行が、次節の第一行と第三行とに繰返され、一の詩に異りたる二題目が並行して進まなければならないと言ふ事と、他の一の要件は各節の第一行と第二行とで一の題目が歌はれ、第三行と第四行とで他の一の題目が歌はれる事である。『薄暮の曲』には、第一の要件は充たされて居るが、第二の要件は充たされて居ないから完全な Pantoun とは言ひ難い。

(河井醉茗「解釈『薄暮の曲』」『詩人』明治40・10)

ここでは、「薄暮の曲」がフランスの定型詩であるパントウム形式を一面のみで採用していると指摘されている。注目したいのは、パントウムという詩の形式に話が及んでいる点で、この形式の要件として、全連の前半二行に一つの主題が、後半二行にまた別の主題が歌われる、と述べ

られている。このように、同時代に既に、象徴詩の研究が行われ、西欧詩の形式や構造にも一定の見識が持たれていたことが分かる。

さて、パントウムについてだが、鈴木信太郎氏は『フランス詩法』（昭和29 白水社）において、次のように説明している。一連が四行で構成され、また、リフレインの箇所が厳密に規則化されているなど、この形式には複雑な約束事がある。中でも、パントウムの最も際立った特質は、へ一般に一つの詩篇は一つの詩考が展開されて行くものであるのに反して、パントウムに於いては、二つの思考が各々独立して存在し、各々独立に對等に並行して展開されて行くところにある、と。ここで、フランス詩におけるパントウム形式の元となった、マレー歌謡を載せておく。引用は、杉山正樹氏（注2）の翻訳による。

チヨウチヨウが翼にのつてあたりで遊んでいます。

彼らは、海のかた、岩に連なっている付近に飛んでゆく。

わたしの心は胸のなかで病んでいるように感じていた

初めの日々から現在にいたるまで

彼らは、海のかた、岩の連なっている近くに飛んでゆく・・・

ハゲタカもバンダン目指して飛んでゆく。

初めの日々から現在にいたるまで、

わたしはたくさんさんの若人たちを眺めてすばらしいと思っていた

ハゲタカもバンダン目指して飛んでゆく、

バタニーにさしかかったあたりでその羽のいくつかが抜け落ちてゆく。

私はたくさんさんの若い人たちを眺めてすばらしいと思っていたが、

わたしが選んだ人に較べられる人はひとりもない

バタニーでその羽のいくつかが抜け落ちてゆく・・・

若い二羽のハトのように落ちてゆく。

いかなる若者もわたしが選んだ人に較ぶべきもない。

彼が心に触れるのがたくみなほど、たくみな若者はひとりもない。

ここに挙げたように、一篇が四連で構成され、全連において、前半二行と、傍線を引いた後半二行は、異なる内容を持ちつつ同時に進行していることが分かる。前半二行では、次のような情景が展開されている。蝶々が飛んでいて、海の岩礁の方にひらひらと舞っていると、禿鷹も海の岩礁の上空に飛翔して、禿鷹の羽根が抜けてひらひらと落ちる。羽根が落ちていく様子は、まるで仲の良い二羽の鳩のようだ、と。

一方、傍線を引いた後半二行は、次のように、内的な感情が述べられている。私は若い時から胸の中にやるせない思いを抱いていて、多くの若者を敬服して眺めたが、私が選んだこの人に匹敵する若者は誰もいない。この人こそ私の心を捉えている、と。

一篇中に情景の描写と叙情とが巧みに組み合わせられることにより、このパントウムから、一組の睦ましい男女の姿が浮かび上がる。前掲の『フランス詩法』には、パントウムの二つの内容の統合について、へこの二つの意味の相互の間には直接な表面的な連絡があつてはならないが、間

接な言はば神秘的な連絡がなければならぬ」と述べられている。

ここで、論点を「謀叛」に戻そう。「謀叛」では、前半三行で《夕暮れの修道院の風景》の主題が、後半二行で《バイオリンが泣く》という主題が、それぞれ同時に進行していた。このような二重構造を、バントウムとの類似において捉えることは決して難しくない。既に確認したように、同時代の文壇に西欧の詩形への認識があつたのだとすれば、白秋が自らの詩作に西欧詩の複層性を取り入れようとしていたとする推論も、十分成立の余地があろう。

四、『邪宗門』の象徴詩法

象徴詩が情緒芸術の高潮であるとすれば、予等は北原氏の作に初めて象徴詩の成立を認め、近作『謀叛』、『こほろぎ』の如き佳汁あるを推称する

(よ、よ生「詩界の近状」『東京二六新聞』明治41・3・29)

このように、「謀叛」は発表後、高い評価を受けることになった。しかし、同時に、〈部分の美はあるも、全篇の連絡を欠き統一を破つて〉いるところ欠点がある、との批判も受ける。こうした作品の批判に対して白秋は、〈これらの情緒を最も音楽的に錯綜せんとせる〉(注3)とここにこそ力を尽くしたと、強く反論する。

「謀叛」が、異なる二つの主題をそれぞれ同時に進行させる二重構造を持つことは、既に述べた。詩篇全体の統一性が欠如していると「謀

叛」に向けられた批判は、この構造に由来すると考えられる。では、白秋の反論の根拠は、どこにあるのか。これを、「謀叛」の統合性に関する問題と言い換えてもよい。

既に述べたように、白秋は、「謀叛」において音楽的象徴を試みたと述べている。愁いに覆われた沈静の心情から、次第に高揚し、激しく狂乱する心情へと移っていくという情緒の流動が、変化するバイオリンの音色に託して表現されている点が、音楽的象徴と呼ばれているのである。また、確認したように、本作には、《バイオリンが泣く》という主題の片面において、《夕暮れの修道院の風景》という主題が同時に存在していた。《夕暮れの修道院の風景》の主題においては、沈静の心情から動乱状態へと移行する、心模様の変化が描かれていた。とするならば、この二つの主題は、同様の情緒の流れを表していることになる。

このように、ある流動する情緒を、二つの主題で表したのは、次のような意図があつたと考えられるのではなからうか。本稿の序章で言及した通り、象徴詩の解釈は、読者の連想に自由に委ねられ、ややもするととりとめがなくなる。しかし、一つの主題に、さらにもう一つの主題を加えることによって、解釈を限定させる効果が期待できるのではないかと。即ち、複数の類似する内容を重ねていくことで、意味を限定させ、詩篇の解釈の幅を狭める意図があつたと考えるのである。

例えば、映画の場合を考えてみるとよい。映画には、視覚的な映像に、同時に音楽が重ねられる場面がある。ムードのある音楽と映像とが組み合わされることによって、視聴者の気分は、より強く一定方向に導かれる。悲しみなら悲しみの情緒が、喜びなら喜びの情緒が、音楽と映像が

相俟って、視聴者に正確に伝えられる。「謀叛」においては、バイオリンの音色と、修道院の風景を映し出す映像とが入り交じり、一つの主題だけでは読者の多様な解釈を呼び寄せてしまうところを、特定の解釈へと収束させていく。このような創意にこそ、白秋が、これらの情緒を最も音楽的に錯綜せんとせる」と述べた本意があったのではないだろうか。

「謀叛」は、明治四十年十二月に創作されたが、本作以後に制作された『邪宗門』詩篇にも、「謀叛」と同様の二重構造が確認できる。例として、集中に収められた「濃霧」（明治41・10制作）や「曇日」（明治41・12制作）などが挙げられる。白秋は、「謀叛」で試みた方法を繰り返し用いており、これを、『邪宗門』象徴詩の詩法の一つと見てよいだろう。類似する二つの主題を重ね、その類似する二つの諧調Ⅱ陰影の中に、一つの情緒の流れを浮かび上がらせるという『邪宗門』の象徴詩法。そのさらなる展開については、稿を改めて論じたい。

*本文の引用は、『白秋全集 一卷』（昭和59・12 岩波書店）に拠る。ルビは省略した。また、引用文中における傍線は、すべて稿者による。

（注1） 北原白秋 河井醉茗宛書簡（明治41・4・26） 引用は『白秋全集 三十九卷』（昭和63・4 岩波書店）に拠る。

（注2） 杉山正樹『やさしいフランス詩法』（昭和56・2 白水社）

（注3） （注1）と同じ。

カイクの世界』。東京、岩田書院、2007、212p.、ISBN 978-4-87294-465-5.

- 7) 小松崎浩司. 茨城県北地域の風景印を訪ねて. 茨女国文：ことばの芸術. 2014, vol. 27, p. 26-33, ISSN 0915-468X.
- 8) 那珂市. “那珂市曲がり屋”. 観光. <http://www.city.naka.lg.jp/page/page000512.html>, (参照 2015-02-15)
- 9) 大録義行編. 那珂町の昔ばなし. 筑波書林, 1981. 2冊, (ふるさと文庫).
- 10) 大録義行編. 常陸のたっつあい噺. 筑波書林, 1981. 118p., (ふるさと文庫).
- 11) 大録義行編. 常陸のでっかく噺. 筑波書林, 1981. 90p., (ふるさと文庫).
- 12) 大録義行. いばらき歳時記：那珂町額田周辺の年中行事. 筑波書林, 1982. 87p., (ふるさと文庫).
- 13) 大録義行編. 那珂の世間噺. 筑波書林, 1983. 108p., (ふるさと文庫).
- 14) 大録義行編. 常陸のたっつあい噺. 筑波書林, 1983. 95p., (ふるさと文庫).
- 15) 大録義行編. 常陸のでっかく噺. 筑波書林, 1983. 92p., (ふるさと文庫).
- 16) 大録義行編. 那珂の伝説. 筑波書林, 1984. 2冊, (ふるさと文庫).
- 17) 楠見松男編. 瓜連町の昔ばなし. 筑波書林, 1980. 73p., (ふるさと文庫).
- 18) 宮田洋子語り, 解説. 日本の民話～茨城県：ラジオ深夜便 “民話を語ろうより”. NHK サービスセンター, 2005, (コンパクトディスク).
- 19) 常陸大宮市観光協会. “大宮地域の民話”. 学ぶ：常陸大宮市観光ガイド. http://www.city.hitachiomiya.ibaraki.jp/~kankokyokai/spot_guide/05manabu/shiseki/shiseki33/index.html, (参照 2015-02-15)
- 20) 常陸太田市フォonz・ネットワーク. 心がたがいにうおう世界：読み聞かせ 石月ひろこさん. 生涯学習情報誌フォonz. 2000, vol. 2, p. 4.
- 21) yosijima yasuhiko-c 秋元園芸. “宮田洋子さん・額田のたっつあい話 曲がり屋でお月見会 2013”. YouTube. 2013-09-26, https://www.youtube.com/playlist?list=PLtvz7JmV-dZaOmoovbDXD0ID8TaK3_G2P, (参照 2015-02-15)
- 22) 茨城いすゞ自動車. “いばらきの昔ばなし”. <http://www.ibaraki-isuzu.co.jp/mukashibanashi/>, (参照 2015-02-15)
- 23) 染谷万千子. ふるさとの昔ばなし. 茨城いすゞ自動車. 1990. 70p. (茨城の自然探訪シリーズ, No. 2).
- 24) 茨城いすゞ自動車. ふるさとの昔ばなしシリーズ. 朝日新聞. 毎月第4日曜日, 朝刊, 茨城版, 茨城面.
- 25) 那珂市商工会絵, 小松崎浩司訳. 四匹の狐の物語：那珂市に伝わる昔ばなし. pacchin'. 2014. vol. 1, p. 16-35.

3.2. 郷土民話

今年度は、風景印の他に地域に根付いた郷土民話の収集も開始した。状況としては専ら那珂市域の昔ばなし、民話のみである。この地域の民話の収集は、大録義行によってまとめられ、1981年から1984年にかけて旧那珂町域の昔ばなし、民話で8編10冊が発行されている。^{9) - 16)} また、旧瓜連町域は前述の静織の里であったこともあり、民話も豊富な地域で、楠見松男が1980年に「瓜連町の昔ばなし」としてまとめている。¹⁷⁾ 茨城県北地域に広げると宮田洋子による語りによる茨城の民話がCD化されており¹⁸⁾、茨城県北地域の民話として常陸大宮市西塩子に伝わる『機織り石』、常陸大宮市三美に伝わる『長者と牛石』¹⁹⁾、常陸太田市機初に伝わる『孝行娘と弘法泉』²⁰⁾ が収録されている。また宮田は語り部として精力的に活動しており、那珂市額田に伝わる『たつつあい嘶』という頓知嘶等を地域に伝わる民話を伝えている。²¹⁾

このほか、各市町村の教育委員会や図書館、商工会議所・商工会、地元の読み聞かせサークル、学校等を中心に郷土民話を収集しているようである。また、茨城いすゞでは、全社の取り組みとして茨城の昔ばなしの収集および普及を行っており、現在でも朝日新聞茨城面に毎月第4日曜日に「ふるさとの昔ばなしシリーズ」を記事下5段広告として連載を続けている。^{22) - 24)}

以上のように、茨城県北地域の郷土民話を収集している人や集団は多く存在することが把握できつつある。今後は更なる把握とそれらの所在の一覧化、その後実際のデータ収集を行っていききたい。

4. これからの方針

まずは、収集した風景印データのデジタル化とWeb上での公開を目指したい。その後、風景印に記されている名勝旧跡についての資料収集を進めていきたい。郷土民話については上述のように把握し切れていない資料の把握とそれらの所在の一覧化、Webデータベース化を進めていきたい。コンテンツがある程度揃った時点で、再利用されるデジタルアーカイブとしてどのようなかたちで提供していくかを検討していきたい。

併せて、茨城県北地域の郷土民話について理解してもらおう活動を行っていききたい。著者は昨年那珂市商工会の協力を得て、那珂市、常陸大宮市、ひたちなか市に伝わる「四匹のきつね」の少年向け現代語訳を行い、電子紙芝居および冊子で発行した。²⁵⁾ 今後電子紙芝居はWeb上で公開できるようにし、冊子や紙による紙芝居による提供も試み、他の民話についても制作を試みたい。

参考文献

- 1) 川口武彦, 常陸国那賀郡衙周辺寺院補修期の様相: 台渡里廃寺跡観音堂山地区出土の常陸国分寺系軒瓦の諸問題. 国史館考古. 2009, vol. 5, p. 53-70.
- 2) 茨城県教育委員会, “台渡里廃寺跡”, いばらきの文化財, <http://www.edu.pref.ibaraki.jp/board/bunkazai/kuni/shiseki/12-26/12-26.html>, (参照 2015-02-14).
- 3) 茨城県教育委員会, “石岡第一発電所施設: 3所、3基、3棟”, いばらきの文化財, <http://www.edu.pref.ibaraki.jp/board/bunkazai/kuni/kenzou/1-31/1-31.html>, (参照 2015-02-14).
- 4) 日立製作所, “製品・サービスのご紹介: モータ”, 企業情報: 環境への取り組み, <http://www.hitachi.co.jp/environment/showcase/solution/materials/motor.html>, (参照 2015-02-14)
- 5) 日立製作所, “沿革”, 企業情報: 日立グループについて, <http://www.hitachi.co.jp/about/corporate/history/>, (参照 2015-02-15)
- 6) 小川千代子, 阿部純, 大川内隆朗, 鈴木香織, 研谷紀夫, アーカイブを学ぶ: 東京大学大学院講義録「アー

なお、風景印収集と併せて、各郵便局の外観写真も収集済みである。



写真1: 那珂郵便局
那珂市の曲がり屋



写真2: 瓜連郵便局
静神社と古徳沼の白鳥と
静峰ふるさと運動公園の八重桜



写真3: 日立郵便局 桜形の変形印
桜と日立風流物と日立シビックセンター



写真4: 川尻郵便局
鵜の岬と海亀



写真5: 十王郵便局
国立天文台と茨城大学の
パラボラアンテナ



写真6: 天下野郵便局
竜神大吊橋と竜神峡鯉のぼりまつり

各郵便局の管轄内にある名勝旧跡等の図柄が入った風景印の一例

ため知名度はない。しかし、通常の郵便料金のままで捺印してもらえらるため、認知している利用者が旅先や地元から私信を投函する場合等に利用されている。もう一つは風景印を収集する趣味を持つ者たちがコレクションとして収集するケースが見受けられる。その場合の普通葉書の料金分以上の切手がないと捺印してくれないため、微々たるものではあるが日本郵便の収入源となっている。

風景印は、通常の消印普通日付印よりも大きい直径 36mm の円形が基本で、その範囲内で変形のものもある。例えば水戸市内の多くの郵便局の風景印は梅型をしており、笠間市笠間地区の多くの郵便局の風景印が壺型をしており、日立郵便局の風景印が桜形をしている等である。図柄も上述のように管轄内の名勝旧跡等が採用されるため、例えば那珂郵便局は「曲がり屋」（写真 1：一ノ関ため池親水公園内へ、町内に残る最後の茅葺屋根を解体保存し、移設復原した住居と馬小屋、物置が一体となった民家⁸⁾）、瓜連郵便局は「静神社」と「古徳沼の白鳥」と静峰ふるさと運動公園の「八重桜」（写真 2）、日立郵便局は市の花である「桜」と地元の祭りである「日立風流物」と文化の象徴の「日立シビックセンター」（写真 3）、川尻郵便局は「鵜の岬」と「海鵜」（写真 4）、十王郵便局は国立天文台と茨城大学の「パラボラアンテナ」（写真 5）、常陸太田市の天下野（けがの）郵便局は「竜神大吊橋」と「竜神峡鯉のぼりまつり」（写真 6）といったように馴染み深い風景がデザインされたものとなっている。

ところで、著者が最初に風景印に着目したのは、各々の地元の人たちが象徴的だと思っているもの、誇りと思えるものを特に郷土や庄屋の家系の人たちが就くことが多い、旧特定郵便局長自ら採用している場合が多いからである。実際に風景印の図柄について何人か旧特定郵便局長にインタビューを行ったところ、風景印採用当時の局長が地元の名勝旧跡を選んで地元のデザイナーにデザインをオーダーした、という意見が多く、地元を知り尽くした人が地元の象徴を選択し、収録し、未来に遺るものになっていることが感じられた。それ故に、それぞれの地に造詣が浅い著者のような者にとって、地域情報アーカイブの収集手法の第一選択として適していると考えたからである。また風景印の印影自体もデジタルアーカイブ化することが可能であるので、今後スキニングし、デジタルデータ化を実施する予定である。なお平成 27 年 2 月現在茨城県北地域に配備されている風景印は著者自身全て収集済みであり、表 1 のとおりである。

表 1：平成 27 年 2 月現在茨城県北地域で風景印を備えている郵便局一覧

那珂市	那珂、那珂向山、瓜連
北茨城市	北茨城、北茨城華川、大塚、大津、平潟、大津西町
高萩市	高萩、高萩上手綱、高萩東本町、高萩島名、若栗
日立市	日立、日立宮田、川尻、十王、中里、多賀、日立河原子、久慈浜、日立土木内
常陸太田市	常陸太田、常陸太田栄町、町屋、常陸太田里野宮、久米、金砂、金郷、松平、水府、里美、大中、天下野、高倉
久慈郡大子町	大子、大子袋田、上小川、町付
常陸大宮市	野口、御前山、大宮、大賀、大宮上町、緒川、檜沢、美和、山方
東茨城郡城里町	石塚、岩船、阿波山、塩子
那珂郡東海村	原研前
ひたちなか市	ひたちなか、湊本町、那珂湊相金、馬渡

2. デジタルアーカイブとは

アーカイブ (archive) とは、情報を「収集」し、「整理」し、活用できるように「加工」し、「提供」を行うものの、「保存」することで未来に伝承していくものを指すことばである。

世の中で何かしらの事象が発生すればその時点で情報も同時に発生する。例えば「電球に光が点った。」という事象に対しては、①「電球に光が点った。」という事象そのものの情報の他に、②「電球に電流が流れた。」というような物理学的な情報、③「電球が○月○日○時○分に光った。」というような日時等のデータ等も含むことができる。しかしこれらは情報が発生した時点で記録しておかないとそのまま世の中から消え去っていつてしまう。そこで一時的な記録を行い（収集）、その中で未来に伝承していくべきものと思える記録を選抜し（整理）、それらを活用可能な状態に修復や引き出しやすい状態にし（加工）、保存する。それを利用者が使いやすい（提供しやすい）かたちにすることで保存されたものが生きてくる。このように、情報が生きたかたちで保存されているものをアーカイブと呼ぶ。

一方、デジタルアーカイブ (digital archive) は、それらを従来から行われてきた紙と物理的な保管庫（書庫）によるアーカイブを電子データとして記録して使えるようにした「しくみ」である。インターネットの活用によって閲覧するための場所や時間の制約もなくなり、直接資料に触れないため資料の汚損・破損等劣化のリスクが減り、付加情報（メタデータ）を付け加えることで利用者に対して原情報だけでは得られない情報を提供することがやり易くなり、検索機能を付加することでアーカイブされた資料によりアクセスしやすい環境と提供できる可能性がある。もちろん資料に直接触れることで得られる情報もあるが、メリットが大きいことと、安価で構築することが可能になったこともあり、デジタルアーカイブ化されるコンテンツが増えてきている。

一方、アーカイブ全体の特徴として学術的な資料を載せたアーカイブは関係者に活用されているが、一般の人たちが使えるようなものや関心を示して恒常的に視きに来るようなものは、資料の性質的なものもあるが見かけられないのも事実であり、一般的に知られていない要因ともなっている。この点は今後の課題だろう。⁶⁾

3. これまでの試み

著者は、今年度風景印及び郷土民話の2件について資料収集を行った。次節以降でそれぞれについて述べていきたい。

3.1. 風景印

風景印とは、日本郵便の前身の逓信省が昭和6年に告示「名勝史蹟等二因メル図案ヲ挿入シタル通信日附印」として使用を始めた消印（日付印：「につぶいん」と読み、現在はこざとへんが付かず）のことであり、配備される郵便局の管轄内にある名勝史跡等の図柄が入った各局個性溢れる消印のことである。⁷⁾ なお現在の正式名称は風景入通信日付印である。また、集配業務を行う普通郵便局にはほぼ配備されているものの、旧特定郵便局には配備されている局と未配備の局とがあり、簡易郵便局においてはほぼ配備されていない模様である。

通常郵便物を投函すると、普通日付印という機械による消印を押されるが、風景印は風景印の配置されている郵便局の窓口で直接赴き、風景印を捺印してくれる依頼をすることで手押しされるものである。また観光地の郵便局でもない限り、日本郵便が特に知れ渡るような広報を行っていない

研究ノート

地域情報デジタルアーカイブ構築のための準備

ー 茨城県北地域を対象として ー

小松崎浩司

1. はじめに

本学が所在する茨城県北地域は、律令制の時代から平安初期の頃まで現在の水戸市渡里にある台渡里八幡神社界隈（台渡里廃寺跡）にあった那賀郡衙を中心に成り立っていた。^{1), 2)} また奈良時代に編纂された常陸国風土記の久慈郡の項には、那珂市瓜連地区、常陸大宮市大宮地区周辺は「静織（しどり）の里」として取り上げられ、その地では上代より機織りを行っていたと記されている。また常陸大宮市北富田、諸沢、玉川地区では中心に玉髄、瑪瑙が産出されたということも記されている。特に諸沢の瑪瑙は江戸期には「水戸火打」として江戸市中で重宝されたそうである。時代が下り、戦国時代には佐竹氏による大子町、常陸大宮市、常陸太田市、日立市といった阿武隈山地の山々で金銀銅山開発が進む等、歴史的に見ても国内の中でも技術の進んだ地域であった。そして近代以降は赤沢銅山をはじめとする日立鉱山が近代日本黎明期を支えた。日立鉱山は当時国内鉱業の動力源の多くが蒸気機関であったにも拘らず、電力を動力源として活用することにした。その電力を生み出すために水力発電所を建設することになり、明治41年に里川に中里発電所を、明治44年に大北川に石岡発電所（現石岡第一発電所）を自社で興した。当時工作課長だった小平浪平は、東京帝大電気工学科の後輩の高尾直三郎や馬場糸夫らとともに、日立鉱山の電気機械の修理工場として積み重ねた技術から日本初の5馬力誘導電動機を開発・販売するに至った。これが日立製作所の創業である。^{3) - 5)} そして日立市から北に延びる常磐炭田による火力エネルギー、東海村に代表される原子力エネルギーと我が国の時代を支えてきたエネルギーが生まれたのもこの地であるのは周知の事実である。他にもジョン・F・ケネディ暗殺事件を日本に衛星中継した茨城宇宙通信実験所（現国立天文台茨城観測局、茨城大学宇宙科学教育研究センター）も日立市（旧十王町）と高萩市にまたがったところにそびえたつ等、茨城県北地域は科学技術発展に寄与してきた土地である。それに加え、袋田の滝、龍神峡、花貫溪谷、五浦海岸、鵜の岬等々観光資源もあり、金砂磯出大祭礼（金砂田楽）や日立風流物、常陸大津の御船祭に代表される無形文化財にも富んだ地域である。また、常陸太田に代表される米やそば、奥久慈のこんにゃく、りんご、ひたちなか、那珂、東海一体で生産される干し芋（甘藷蒸切干）、太平洋のみならず那珂川・久慈川のような内水面でも活発な水産資源と数多くの資源を携えている。

著者は、これまで情報・資料のデジタル化に関心を抱いてきたが、本学に就いて間もなく2年を迎え、上述のように貴重な資源が豊富に揃い、本学の地元である茨城県北地域のデジタルアーカイブ化を今後行っていきたいと考え、そのためのノートとして本稿を記すことにした。

日にあった出来事、そして被災地の方々の話を知った私は怖くなった。小学校の児童達が避難しようとする途中に津波が児童を攫っていったのだ。目の前で、今私が踏み込んでいるこの場所で。一瞬にして津波にのまれ、その光景を目の当たりにした少数の児童の気持ちを考えると居た堪れない気持ちになった。とても息苦しくなった。現実の話だと思えなかったが目の前にある校舎が『現実だ』と、私の心に叩きつけるように教えた。黙祷をした石碑の側で手を合わせ微笑する地藏の表情が、とても優しく思えた。

バスの中で考えた。こんなに深刻な被害が起きていた事を私は知らなかったのだ。テレビの中でアナウンサーが淡々と話している僅かな情報しか、私は知らなかった。だが今回の訪問により石巻で起きた出来事を詳しく知ると共に、心にしっかり刻む事ができた。人の命の大切さ、残されたものの悲しみ。何もかも失ってしまった虚無感。そんな思いを抱える方々を少しでも助けたい。

訪問からしばらく日が経った。6月20日に見た景色は、今も鮮明に覚えている。

文集「東松島 2014 茨城女子短期大学保育科 1 年」より

- ・震災から3年3か月後、被災地を訪れた。石巻では、震災遺構はほとんどなくなり門脇小学校と大川小学校を残すだけとなった。門脇小学校は、平成24年11月に解体の方針が決まった。しかし、解体されず、平成25年の6月に全面をシートで被い、立ち入り禁止となった。大川小学校だけが北上川のほとりに今も廃墟として残っている。

V おわりに

「後悔から始まったボランティア」というJWAYのドキュメンタリー番組がある。その中で私は、阪神大震災の時に現地にいけなかったことを今でも後悔している。東日本大震災では同じ思いをしたくないと述べている。あれから20年が経った。三宮駅前に立っても、震災の爪痕はほとんどわからない。震災から4年が経とうとしている。石巻の街中は立派になった。しかし、海岸付近はかさ上げ工事が毎日行われている。仮設住宅もまだまだ建っている。復興予算はまだ60%が使われていない。9兆円も残っている。市営住宅建設の遅れが報道された。被災地の人たちは5年目の春を迎えようとしている。

常磐高速道路が3月1日に全面開通した。当初は4月下旬ごろと言われていた。2か月早く開通した。これで仙台まで30分以上早くなるだろう。しかし、放射能の心配がまだまだ残る。被災地が完全に復興するまでには時間がかかる。仮設住宅が消える日まで、ボランティア活動を続けたい。

作品2 共有するという生き方

平成25年6月20日(木) 東松島仮設住宅訪問 I. M

高速道路を降りてすぐにわたしの目に映ったのは、きれいな建物の数々。

なぜ?ここは、被災地である。こんなにもきれいなわけがない。ーいや、ちがう。

わたしは、その驚くべき復興のスピードを痛いほど思い知った。これはわたしの憶測ではあるが、こんなにもきれいな建物ばかりなのだからきっと元の東松島の町並みとは違うだろう。そんなことを考えながらわたしはバスの中から窓の外を見ていた。それがわたしのはじめて見た宮城だった。

わたしたちは仮設住宅を訪問し、歌やダンスを通し現地の人たちとの交流を持ち心のリハビリと言う名のボランティアを行うことを目的にこの地を訪れた。しかしわたしの中には1つの不安があった。明るく復興に向かっていっているように見えるこの街の人も、メディアからは伝えることのできない根っこにある黒いものがあるのではないか。わたしたちの行く励ましが逆にその根っこを刺激することにはならないかと。

歌を歌う皆の目には大粒の涙が流れていた。もちろんわたしの目にも。しかしわたしの今まで予想していた涙とは違うものだった。これは悲しみの涙ではなく、感動の涙だった。この中には今までの練習に対しての達成感や、前向きな現地の人たちへの尊敬。そしてもしかしたら、あの日のことを思い出した人もいるだろう。そしてもう悲しいものではないと。被災地は、わたしたちは確実に前に進んでいた。

人は言葉なくとも「共有」するということで安心してしまふ。それは世界で一番単純なことなのかもしれない。どんなに苦しくてつらいことが起こっても、共有し、共感することで世界一幸せ者になった気分になれる。わたしたちはそんな生き物なのかもしれない。

文集「東松島2013 茨城女子短期大学保育科1年」より

・震災から2年3か月後、被災地を訪れた。現地の集会所で短大生たちは、合唱、ダンス、読み聞かせなどを披露する。なかでも、合唱は住民、学生がともに涙する。その様子はYouTubeで茨城女子短期大学「その夢が僕を強くする」で検索すると集会所で様子を見ることができる。歌が心に届くということであろうか、毎回目にする光景である。



大川小の前で黙祷

作品3 大川小学校見学

平成26年6月19日(木) 東松島仮設住宅訪問 S. K

私は大川小学校を目の前で見た時、とても強い衝撃を受けた。校舎を覆っているはずの厚い壁が無い、机や椅子も見当たらずガラんと静まり返っていた。普段私たちが見かける小学校は秩序正しい活気のあるものを記憶している。しかし、震災後の大川小学校には独特の雰囲気が漂っていた。一步一步足を進めるが、土に足が着くたびに黒く大きい波が私達を襲ってくる様に思えた。3月11

している。書き方、見本を示しメールで送るように指示する。メールで送ってもらうと後の処理がとても楽である。パソコンだけでなく、携帯電話からでも送れる。短大生の場合は、授業中に作文を書いた。できたのが、①「石巻 2012 茨城女子短期大学保育科 1 年」②「東松島 2012 日立第二高等学校・那珂高等学校」③「東北遠征 13 大成女子高吹奏楽部」④「東松島 2013 日立第二高等学校」⑤「東松島 2013 茨城女子短期大学保育科 1 年」⑥「東松島 2014 茨城女子短期大学保育科 1 年」である。今まで作った文集の中から、代表的な作品を紹介する。

作品 1 ボランティアに参加して

平成 24 年 6 月 18 日 (月) 石巻仮設住宅訪問 A. Y

私はボランティアに行く前、正直、行きたくありませんでした。がれき処理のボランティアなら被災地の人の役に立つと思えるが、歌を歌ってあげて被災者の力になれるとは思えなかったからです。歌やマッサージをやるだけで元気になってもらえるなんて思えなかったし、行っても邪魔なだけだと、仮設住宅に着いても思っていました。

しかし、集会所に着くと仮設住宅に住む方々が集まっていて、それを見て、中途半端な気持ちではできないなと思い、元気よく歌を歌いました。すると集まってくれた方の目から涙が出ていたのです。私は嬉しくなりました。手話も真似しながら一緒にやっている人がいたので嬉しかったです。踊りを踊っている時の見てくれている方の顔が笑顔だったので、ここに来てよかったなと思うことができました。そしてマッサージ。マッサージをやってあげて「気持ちいい。気持ちいい。」と言ってくれて、マッサージ初心者でも人のためになっているのだと思い、改めて来てよかったなと思いました。

被災者との会話は何を話してよいのかわからず、自分からは話を出せませんでした。現地の方が 3 人でお話をしていたので、そのお話を聞いていました。その方々はお孫さんや娘さんをあの津波によって亡くしたそうです。その様子などをいろいろ話していて、最後に携帯電話の待ち受け画面を見せてくれました。そこに写っていたのは、笑顔で写る 3 人の小さな子どもでした。「かわいいですね。」という、「うちの孫なの。」と寂しそうにいました。そのお孫さんは 3 人とも津波によって亡くなったそうです。思わず涙が溢れました。テレビで津波によって家族を失った人々をたくさん見てきました。その家族を失った人の 1 人が私の目の前にいるということで、あの日の大津波は現実なのだと改めて実感しました。

ボランティアが終わって、自分のことを考えました。私は幸せなのだと思います。家族もいるし、友達もいます。簡単に弱音なんて吐けないなと思いました。そして、最初に行きたくなかったボランティア。参加してよかったなと思いました。

文集「石巻 2012 茨城女子短期大学保育科 1 年」より

- ・震災から 1 年 3 か月後、被災地を訪れた。ボランティアに行くことに不安を感じている様子が文章からよく分かる。また、被災者の携帯画面に映る子どもたちの姿に涙する学生の姿は一生忘れることができない。「来てよかった」「参加してよかった」と気持ちが大きく変化したことがこの訪問の大きな効果と思われる。

(男子 B)

- ・自分のためではなく、人のために頑張ろうという姿勢がよいと思いました。その姿勢が最終的には自分のためにもなっているとおっしゃっていたので大事だなと思った。(男子 C)
- ・今回塙先生は、人との出会いによって自分が今何をするべきか自分の役割を探すことができるとおっしゃっていた。今回改めて人との出会いは大切だと思った。(女子 D)

3 回の録音を聞いて驚いたことがある。すべて同じ話はないということである。いままで、講演というと原稿が決まっていって読み上げているようなものが多かった。私は話の骨組みは決めてあとは、聴衆の雰囲気です話をしようと思った。

講演の最初にボランティア活動の DVD を 15 分間見せた。その間どれくらいの生徒が集中しているかを観察した。話を始める時、お互いにどんな人なのか注意深く見ている。生徒は、今までに多くの先生と出会い話を聞いてきた。どんな人間なのか、敏感に感じてしまう。どこにでもいる、身近な存在と感じさせるように努力し、話した。まず、話し手聞き手の共通点を探し、それを話題とした。日立一高の場合は、私が日立二高の教諭であったこと、また一高生とボランティアをしたことなどを話した。駒王中・助川中の話をし、親近感を持たせた。一方的な話の伝達ではなく、途中で、簡単な質問をした。話の導入部で 2 回行った。

塙「2011 年の 3 月 11 日に東日本大震災がありました。みなさんはその時中学生ですか？小学生ですか？」

「小学 6 年生。」(会場からの反応)

塙「私は日立二高にいて、震災時、体育館の天井が落ちてしました。それから学校に生徒と泊り、一晩中たき火をしていました。何を燃やしたか分かりますか？」

「分からない。」(会場からの反応)

展開部でも 2 回行った。

塙「石巻まで行くのにどのくらいかかると思いますか。」

「5 時間ぐらい」(会場からの反応)

塙「年寄りのほうが元気です。人間の強さとはなんでしょう。」

「何人か集まって、一緒にやると・・・」(会場からの反応)

まとめのところで 1 回行った。

塙「みなさん、競争は好きですか。」

「あんまり好きではない」(会場からの反応)

一方的な話ではなく、対話を心がけるようにした。反応により、聴衆の集中具合がよく分かった。高校 1 年生の 2 月という時期を意識し、2 年生への自覚を促すように話を展開した。生徒の感想を読むと話をよく理解していることが分かった。今後も機会を見つけて、講演活動を継続したいと考えている。

Ⅳ 文集の制作

これは、ボランティア活動後締め切りを決めて、文章を提出させるやり方である。帰りのバスの中で反省会を実施している。お互いの思いを共有し、自分の思いを文章化し文集にまとめることに

思う。

人生は「一期一会」という言葉通り、先生と遭って学習する。いいですね。私と遭って話を聞くのも最初で最後かもしれない。それでいい。自分の中で話が心に残ればそれでいい。人生の中での出会いはそんなところにある。あの時言われたことは、よく覚えている。1回しか会っていないけれどもずっと心に残ることがある。人生の中での出会いなのです。できるだけいい出会いをする。自分の中で成長の糧になることがあればいい。私はボランティアを始めて4年になります。12月に行つて、また3月にも行こうと思っています。6月には短大生約100人を連れていきます。その活動も最初は20人からでした。なぜこのように人が集まるのかなと思うこともあります。人を信じる。行こうよという、結構行きますね。行った人がまた次の人を誘う。誰かがやる気を出すと変わる。幸せになろうよと思っても、なかなかかなれない。嬉しくなることも、自分の中でのアクションから始めると嬉しくなれる。「幸せなら手をたたこう」という歌がありました。手をたたいたくらいで幸せになりますか。しかし、やることによって、気持ちが高揚してくる。気持ちを合わせるといことはどんなことでしょうか。みんなで一つのことをやれば良い。「手をたたく。」気持ちがあつたよね。それでいい。先人の工夫はいろいろある。一瞬だけ合う。普段私たちの気持ちはばらばらである。何かやろうよというそれでまとまる。それだけで、幸せだ。200人が気持ちを合わせた。それだけで幸せだ。みんなでなんかやろうよということで同じ方向に行くと、それだけで幸せだ。リーダーとなってみんなをリードする。この学校は文化祭・クラスマッチが盛り上がる。みんなの生きる楽しみができる。部活でも勉強でもそうです。誰かがやろうよと言わないとできないのです。みんながやろうよと言うことです。先生が言ってはいけません。そうすると楽しくなくなるのです。もうすぐ1年生が終わります。そして2年生になります。新入生、後輩が入ってきます。みなさんは高校の中で真ん中となり、活躍できる場面が増えてくる。みなさんのこれからの活躍を期待します。(計32分6秒)

お礼の言葉 S. Aさん

本日はお忙しい中、私たちのためにお越しいただきありがとうございました。震災から4年が経とうとしていますが、まだ未だに被災地では仮設住宅で生活をしている人がいるということが分かりました。そして私たちは震災があったという事実を忘れないで次の代へと伝えていかなければならない。またボランティアを通して、住んでいるところも、年齢も違うお互いに元気を与えあっているというところがすごく感動しました。私もこれから、いろいろな地域でいろいろな年代の人と出会って自分がすべきことを探していきたいと思いました。本日はありがとうございました。

生徒の感想

- ・茨城県の身近な高校で東日本大震災のボランティアを行っていたことを初めて知りました。被災したお年寄りが高校生ボランティアをととても喜んでいるのが印象に残りました。私もこのようなボランティアの機会があったら参加して、新しい発見や、いろいろな経験をしてみたいと思いました。今回の講演では人と人のつながりを学ぶよい機会となりました。(女子A)
- ・この講演を聞いて、被災地ボランティアの素晴らしさを感じました。「継続は力なり」という言葉を聞いたとき、ボランティアや勉強など継続することは難しいと同時に素晴らしいことだと思った。

るし、それなりに財産もある。そこで弱さが出てしまう。あの人たちから学ぶことは、「最後は、人間は体一つで、気力だよ。」それを被災者から学びました。行くと共に思いますよ。すごいな、この人たちは、そうしなければ生きられない。ぎりぎりの線を見てきたからなのでしょう。

まとめ (13分51秒)

日本は70年間平和です。いいなと思う時もある。大変だなと思う時もある。私も戦後生まれですから、戦争は知りません。今までに100年間平和が続くことはあまりありません。そんなことを考えて生きていると、自分は今何をしなければならないのかが分かってくる。今何をすべきなのかが見えてくる。私はあと30年間生きていない。みんなは、まだ生きている。今後30年間で大きな変化はあるでしょう。震災があった。小学6年生の時に何を考えましたか。こんなことはもう2度とあってほしくない。またあるかもしれない。だがそれを語り伝えることはできる。今度いつ起こるかどうかわからない状況の中で、生きている。平和もわからない。自分の先を考えたときにどうやって生きていくのでしょうか。

横並びでずーと生きていると、競争がありますね。みなさん、競争は好きですか。

「あんまり好きではない」(会場からの反応)

勝てばうれしいですよ。負ければ悔しいですね。毎日競争を繰り返していると横しか見えない。もう少し考えてください。縦を見ないと先が見えない。私はボランティアの活動の中で、いま縦のつながりを考えなければ駄目だと思いました。つまり若い人は若い人の役割がある。ひとりひとりの役目があって、それぞれ役割がある。みんなが就職して、会社組織に入ると同期の人はこんなにいません。全国組織ならいるかもしれません。同じお店に入ったらこんなにいない。同期の人は2、3人。あとはすべて年上ばかりです。その中で役割がある。社会は60代70代の人もある。10代20代の人もある。それぞれの中で役割があってみんな大事な人である。一生懸命に勉強しそれを何に生かすか。しかし、何に生かしていいかわからない。いろいろな人に出会うと変わる。

例えば、被災地に高校生が行って、いろいろな話を聞く。そこで目覚めた子がカウンセラーになりたい。看護師になりたい。介護士になりたい。医者になりたいと話してくる。被災者たちとの出会いにより、自分には何ができるのだろうと考える。自分の役割が見えてくる。人は何を喜んでくれるのかなということが分かる。そこで初めて本当に勉強する意欲が湧く。違いますか。大学に入りたい。今までは高校に入ろうという目標でしたが、今度は違う。それぞれが違う進路を目指すので、100人いれば100あるし200人いれば200あります。自分の方向性を見つけるのが今なのです。ボランティア活動をしながら縦のつながりを感じながら、いろいろなことを学んでいく。おじいちゃんおばあちゃんはこんな生き方をしてきた、わたしたちはどんな生き方ができるだろうと考えるようになる。学校での勉強は効率的にできる。しかし、一人一人に合っているかわからない。自分にはない環境の中に飛び込み、人と接する。その中で自分のことを考えてみる。5時間かけて、ボランティア活動するのもどうなのかなと思うこともある。もう少し、近いところでやることも可能なのではないかと。となりの年配者、近隣の老人ホームでやればいいのかと思えることもある。だが、ある程度離れていることが大事なのかもしれない。離れていると、たまにしか会わないから、親切にできる。人間の一番いいところが出る。ボランティアは続ける人もいるし、一回しか行かない人もいる。しかし、1回しか行かなくても、いつまでも覚えている。あのときに会った人のことを忘れない。その人は、あるきっかけをつかんで思いを募らせればいいのかと

回もやり直しをしました。すごいですね。5時間の中で変わる。なぜでしょうか。歌や紙芝居絵を見せる。自分たちを待っている人がいる。それが分かるからです。人間というのは自分を待っている人がいる。ということが分かると強くなる。おじいちゃん、おばあちゃんが待っている。そうなのだ。私たちを待っている人がいる。そのような気持ちがあるとやる気が出る。実際に行って会った瞬間に、じゅわーときてしまう。今日だって私は日立一高生に会えるということで、昨晚から楽しみにしていました。

おじいちゃん、おばあちゃんが歌を聞いてくれる。聞いている人たちが涙を流している。このような歌で・・・違うよ。若い子が歌ってくれることが嬉しいのです。涙が自然に出て来てしまう。こんなことがあるのでしょうか。なぜでしょう。人と人が出会って、お互いの気持ちが触れ合って、じゅわーと来るのがふつうあるのだろうか。普段はあまりない。毎日学校で会って涙流して「こんにちは」など言わない。

それは自分の中に5時間かかった。その思いがあって会えたということがある。あまり便利だと気持ちが上がらない。例えば、好きな人のことを思う。今頃何をしているのかなと思う。明日になればわかるよ。遠く離れているから分からないよ。君たちはどうしますか。携帯でしょ。「今何をしている。」「寝ているよ。」「何をしている。」「テレビ見ているよ。ふーん」で終わりです。具合が悪いのかなと思っていたら、「元気だった」と一行で終わってしまう。すると気持ちが上がらない。今付き合っているけどすぐ別れてしまうのは、そういうことが原因なのではないのでしょうか。あまり便利すぎで心配する前に心が高まる前に、なんだったそうだったと思ってしまう。そういうところは、古典を勉強すると分かります。こんなに人のことを心配しているのだ。今は心配事が無くなってしまう。気持ちが高まらない。しかし、おじいちゃん、おばあちゃんに会うと気持ちが高まる。他人なのに不思議ですね。行って思うことは、高校生たちが被災者を元気にしてあげる。と思っていますが、逆ですね。話をしているうちに、「頑張りなさいよ。」と励まされて、「はい」と答えて、逆に元気を貰って帰ってくる。なぜでしょう。



みんなで楽しく

年寄りのほうが元気です。人間の強さとはなんでしょう。

「何人が集まって、一緒にやると・・・」(会場からの反応)

そうですね、それも正解です。人間は何もないと強い。たくさんあると弱くなる。財産をたくさん持っているとな弱気になる。無くなったらどうしようと思えるからかな。何もないと、何もない。おれたちは、体だけだよ、気持ちだけだよという、開き直ってしまう。被災者はなぜそのようなことが言えたのでしょうか。まず財産が無くなった、なかには家族もなくなった人もいます。それでも生きている。そこからスタートしている。いま生きなければならぬ。すると今あることを大事にしようとして今あることの積み重ねだよということで生き方が変わっていく。だから強いですよ。人と人のつながりを大事にする。その中で私たちが持っていないものを持っている。私たちは家族もい

それから1週間ほどたってから、今からどうしようかという時に、学校もないし、部活もないし、自宅待機をしていました。やることもなく、学校の近所の生徒に電話をしました。「避難所に一緒に行かないか」と誘いの電話をしました。助川中学校の格技場、駒王中学校の格技場に日立市内の海岸付近に住んでいた人が避難していました。日立一高、水戸一高、日立二高、日立工業高校の生徒が5、6人集まりました。助川中学校の卒業生です。その生徒たちと一緒に、避難所訪問をしました。被災者の肩もみや、話を聞いてあげました。それから久慈中学校の体育館にも訪問しました。3月下旬に鳩が丘の体育館に福島原発の人たちが避難しているのを聞きました。そこに二高生を連れてマッサージやお話を聞きに行きました。何がいいのかなというと、若い人を連れていくだけでよかったのです。最初は私一人で行ったのです。すると、不審者が来たように思われました。しかし、女子高校生たちを連れていくと、対応が変わりました。若い人の力は凄いと思いました。年寄りも若い子が近くに来るだけでそれだけで嬉しい。その活動も4月9日までに終わってしまいました。

茨城では4月上旬にはライフラインも復旧し普通の生活が戻りました。しかし、東北のほうはどうでしょうか。6月ごろ職場の同僚と東北を見に行ってきました。瓦礫の山の高さ、仮設住宅の多さに大変驚きました。これは大変だ。ということで、9月からボランティアを始めました。最初は日立二高生と一緒に行きました。他校の生徒さんも行きたいという話がありました。那珂高校、多賀高、太田一高、水海道一高などです。先日は太田二高、結城二高生が行きました。いろいろな近隣の高校の先生と行くようになりました。行って分かることはなんでしょうか。

展開部 (10分45秒)

実際に行って分かること。一緒に行って分かること。新聞やテレビで伝えていますが、そこでは伝えられないことがたくさんあります。例えば「後悔から始まったボランティア」という番組です。何回も見っていますが、自分でもすごいなと思ってしまうのです。あんな人がいるのだな。自分の姿を見るたびに、しっかりしなければと思ってしまう。なぜだかわかりますか。番組の中で少し格好いいことを言ってしまったのです。私は普段、何もやっていない。そこで、やらねばと思うのです。私は、まずやりますと言ってしまった。言っていることとやっていることが、違うのではないかと他の人から言われなくない。やっているうちはしっかりしなければいけないと思っています。自分の中でボランティアはなんのためにやっているのかと思うことがあります。それは、自分のためにやっているということが強いです。テレビの番組は、見てわかると思うのですが本当にいいところだけ流れるのです。放送時間は15分です。石巻まで行くのにどのくらいかかると思いますか。

「5時間ぐらい」(会場からの反応)

5時間です。これは日帰りです。朝7時に出発し12時に到着する。ボランティアをして4時に出発して9時に帰る。10時間バスに乗っているわけです。10時間も飛行機に乗ればオーストラリアに到着する。フランスだってもう少しです。ずっとバスの中にいる。長いですね。普通だったらいやだと思う。だが、5時間は長くない。行くときに練習をします。歌の練習をしたり、読み聞かせの練習をしたりします。紙芝居の練習をしたりします。最初は嫌になるほど下手なのです。大丈夫かなとおもいました。君たちは練習したの？大丈夫と言ったら、高校生は頑張ってやります。一生懸命練習します。私が用意をした伴奏CDではなく携帯のカラオケでやりました。一生懸命にやってKiroroの「未来へ」を上手に歌っていました。最初は人に聞かせることができませんでした。が、いつの間にか上手になっている。読み聞かせの紙芝居もあまり練習していなかったのに、何

この住宅にボランティアに行くのです。今年でもう3回目になりますね。」

P「また東松島の方々は心待ちに、あと2か月よとかあと何日よとか指折り数えて待ってくださるのかもしれないね。」

埴「はい。あと7月とか8月にもまた。」

P「なるほどね。それもまたチラシで知らせてあげてください。冷蔵庫にまたマグネットで止めて楽しみにしてらっしゃるのではないのかな。是非引き続きまた頑張っていただきたいと思います。」

埴先生、ありがとうございました。」

埴「はい。ありがとうございます。」

P「今日のこの時間は東日本大震災後茨城の学生たちとともに宮城県で継続的にボランティアに取り組まれているという紹介でおなじみの茨城女子短期大学の埴雅文先生に今月の15日に行われた東松島での活動についてスタジオでお話をお伺いしました。ありがとうございました。」

Ⅲ 「道徳」に係る講演会

「被災地の現状理解とボランティアについて」

平成27年2月9日(月) 日立一高 体育館多目的室

1年生対象

内容

1. 15分ドキュメンタリー番組を見る。

「後悔から始まったボランティア」 JWAY 制作 DVD

平成25年12月23日那珂高校・多賀高校・太田一高・日立二高 OG・一般市民合わせて35名が東松島仮設住宅を訪問した。そのことを JWAY がドキュメンタリー番組として制作した。

2. 約30分の講演をする。

導入部(7分30秒)

こんにちは。寒い中、本当に大変だなと思います。東北はこれ以上に寒いです。体育館の中にたくさん人がいますよね。たくさんいてもこれは50分ぐらいです。避難所は毎日ですよ。ずーと1か月2か月3か月と毎日ここで生活するのです。ここで寝るのです。隣の人がすぐ脇にいるのです。そういう生活をやっていました。2011年の3月11日に東日本大震災がありました。みなさんはその時中学生ですか？小学生ですか？

「小学6年生。」(会場からの反応)

小学6年生の3月に被災して4月から中学校へ行きましたね。私は日立二高にいて、震災時、体育館の天井が落ちてしまいました。それから学校に生徒と泊り、一晩中たき火をしていました。何を燃やしたか分かりますか？

「分からない。」(会場からの反応)

体育館の天井の材料がたくさんありました。無くなると、体育館へ行って、燃料となる薪を持ってきました。それを一晩中燃やしていました。次の日に家に帰ろうとしても、信号も止まっていて大変でした。生徒たちの食糧確保も大変でした。近所のスーパーに行って、買う。電気も止まっていましたので、お店の人も、ローソクをともし電卓で計算して売ってくれました。そして食料を買ってきて、それをみんなで分けて食べました。

P「例えばどういうところに、感銘を受けたのでしょうか。」

塙「やはり向こうの人たちの逞しさというか。実際に津波に遭って、財産を失くした。その中でも前向きに元気を出して生きているという所ですね。」

P「僕らが行って元気にしてあげると言っていた。行ったらやはり声が出なかったと。交流を続ける中でだんだん声が出て、最後はどういう感じになったのですか。」

塙「また最後にふるさとを歌ったのです。その時は大きい声で、出来ましたね。」

P「そうですか。向こうの方、東松島の方はどんな感じだったのでしょうか。」

塙「仮設住宅を今度 40 名の方が出ることになっています。」

P「新しい被災者住宅などができたとか。」

塙「市営住宅が完成したので、この住宅を出ますと言っていました。その後どうなりますかと聞くと、またすぐ埋まってしまうと言ったのですね。すぐ人が入るということです。」

P「市営住宅に移った人の、その家にすぐまた入っていらっしゃる。ということはまだ住宅事情も良くなってないということですか。」

塙「それは仮設住宅といっても、便利なところにある住宅と不便なところにある住宅があります。今私たちが行っているのは町中にある住宅ですから、人気が高いのです。」

P「なるほど。出来るだけ町に近い便利なところに住みたいということですね。連続した東松島の 3 枚の写真をお持ち下さりました。これは 3 月 15 日にお撮りになった写真ですね。」

塙「そうです。」

P「大震災で 3 年たった現地なのですが、ほとんど復旧の行われてないような気がします。」

塙「ええ、まあ復旧というのは瓦礫撤去とか。そういうことはだいたい終わったのです。あとは地上げ、地面のかさ上げっていうのでしょうか、その工事をやっています。それもだいたい終わりに近づいてきました。」

P「更地になったところで少し白く見えるのは土砂を盛って、1 メートルくらいでしょうかかさ上げたところですね。ただこれ更地がまだずっと広がっていますね。」

塙「そうです。そこをこれからどうするのですかと聞いたのですが、やはりそこは危険地



かさ上げ盛土工事

帯ですからかさ上げしても、家は建てられないと言っていました。」

P「そうですね。1 メートルくらいのかさ上げではまた津波が来たらまてしまう危険性がありますよね。どうなのですか先生、よくもう 3 年という言い方をするのですが、まだここまでかという思いが強いのですが、現地を訪問した塙先生はいかがですか。」

塙「やはり、まだまだの状況ですね。その中で私たちが行って感じることは、復旧の遅さです。あとは人々の家がまだまだ足りないということを実感しますね。」

P「そうですね。塙先生、今回また次の約束をされていたのですか。」

塙「はい、次は 6 月に茨城女子短期大学の保育科 1 年生全員で行きます。それは大型バス 2 台でそ

P「絵本を読み聞かせしているような写真をお持ち下さったのですが、その後読み聞かせを行ったのですか。」

埴「はい。読み聞かせ、紙芝居。これもやはり事前にいつもこんなことをやっているのですと紹介し、練習しました。あとは高校生が自分たちで絵本を選び、紙芝居を選んで当日やってくれました。」

P「こちらに、集まってそれを聞いている被災地の方々の写真があります。ずいぶんたくさんいらしてますね。」

埴「そうですね。驚いたのですが、やはり被災地の方は私たちが来るのをとても楽しみにしているということですね。」

P「先生が12月に行ったときまた3月に来ますよという約束をされたのですか。」

埴「またおいでという言葉もありましたので、その時のノリもあったのですが、また3月に来ますよと最後に挨拶をしてしまいました。」

P「その約束を果たすために今月の15日に東松島にいらっしゃったのですか。これは事前にビラなどで多少宣伝されたのですか。」

埴「はい1週間くらい前にビラを作成しまして、向こうの仮設住宅の自治会長さんをお願いしました。ビラは100枚しか作らなかったのですが、それを配布していただいて、みなさんに来ていただければいいなという思いでした。」

P「先生がビラをお作りになって15日行きますよという案内を、向こうの自治会長さんに送ってそれを皆さんに配っていただいたのですか。」

埴「はい。何人来るかと心配はありました。結果的には60名ほど来ましたので、驚きました。中にはそのビラを大切にしていた方もいました。その話を聞いたとき本当に一枚のビラの効果がそんなにあるのかなと思いました。今までそんなことを感じたこともなかったものですから、驚きました。」

P「そのビラを大切にされていたということですが。」

埴「ええ。もらったら冷蔵庫の扉の所に張っておいて、あと何日たったら高校生が来るのかなと楽しみにしていたと言われました。」

P「やはり向こうの方も心待ちにされていたのですね。100枚のビラ、まあ1枚のビラを何人かがご覧になると思うのですが、60人くらいお集まりになるというのはすごいですよね。」

埴「びっくりしましたね。」

P「まず、その高校生たち、中にはボランティアが初めてだという方も多いようです。みなさんどんな感想をお持ちになったのでしょうか。」

埴「やはり高校生たちは最初、不安感が多いです。気負っていますので、僕たちが元気にしてやる、元気にしてあげると言っていました。結果的には向こうの方たちに元気をもらったというか向こうの方の生き方に感銘してびっくりしてしまったというのが多いですね。」



高校生による紙芝居

- ② 7月4日（金）11：30～12：30 日立二高 小体育館
- ③ 11月10日（月）13：20～14：10 友部高校 社会科室
- ④ 1月26日（月）14：25～15：15 取手二高 体育館
- ⑤ 2月9日（月）15：45～16：40 日立一高 体育館多目的室
- ⑥ 2月19日（木）13：45～15：35 大洗高校 体育館

4回目より、毎回録音をして講演を振り返ることにした。

Ⅱ ラジオ番組出演

トーク番組に出演すると、自分の意見をまとめることができる。26年はIBS茨城放送のいっセイのSAY！「ほっとボイス」という番組に1度出演した。毎日17：15から17：25までの10分間という短い番組だ。3月のボランティア活動終了後に出演した。

3月24日（月）いっセイのSAY！「ほっとボイス」17：15～17：25 IBS茨城放送

司 会 さとう一声（P）

出席者 茨城女子短期大学 塙 雅文

P「今日のこの時間は、東日本大震災後茨城の学生たちとともに宮城県で継続的にボランティアに取り組まれているという紹介でおなじみの、茨城女子短期大学の塙雅文先生に今月15日に行われた東松島での活動についてスタジオでお話を伺います。塙先生よろしくお願いします。」

塙「よろしくお願いします。」

P「さて、今月の15日またボランティアで東松島にいらしたのですが、この15日というのはちょうど3年目の3月11日ですから、その3年後経ってさらに3日後ということですよね。」

塙「そうですね。」

P「今回、これまで継続的にいらした学生たちのほかに初めて参加する学生さんたちも、多かったということをお伺いしたのですが。」

塙「はい、前回12月に行ったのですが、そのときにまた3月に来ますよということをお話しました。その時に参加していた県内の高校の先生がいました。水海道一高、太田一高の先生です。自分たちの高校の生徒を、ぜひこの次に連れて行きたいということになりました。3月は私が募集したのではなく、その先生方が募集し自分の学校の生徒さんを引率したという形です。」

P「ということは今回、大学生ではなく高校生が主体だったということですか。」

塙「はい。高校生主体、特に水海道一高と太田一高の弁論部という部活動の子たちが多かったです。さらに学校の卒業生に呼びかけて20名で行きました。やはり皆よくやってくれました。」

P「高校生たちは、被災地のボランティアに行くのは初めての方が多かったのでしょうか。」

塙「そうですね。初めてということで事前に私がその学校に出向いて講習会をしました。」

P「なるほどね、実際高校生たちは現地に行ってどんな活動をしたのでしょうか。」

塙「いつもやっているメニューを紹介して、マッサージの練習をし、読み聞かせの練習を行ったのですが、初めてだったので不安感がとても多くて……。最初に歌を歌ったのですがなかなか声が出なくて。バスの中でも練習したのですが、やはり気恥ずかしさがあるのでしょうか、最初は声が出ませんでした。」

報 告

若い世代への伝言 —— 震災ボランティアを通して

塙 雅文

I はじめに

昨年度の紀要「メディアを活用した表現力育成」の中でも述べた通り、東日本大震災以降、宮城県の仮設住宅を高校生・短大生・大学生と一緒にボランティア訪問することが重なった。平成26年は次の①～④のように4回実施した。

- ①平成26年3月15日（土）に水海道一高弁論部9名 OB3名太田一高弁論部3名教員5名計20名が東松島仮設住宅を訪問した。（マイクロバス使用）
- ②平成26年6月19日（木）に茨城女子短期大学保育科1年約80名が東松島仮設住宅を訪問した。
- ③平成26年7月24日（木）に茨城女子短期大学公開講座で一般市民21名が東松島仮設住宅を訪問した。（中型バス）
- ④平成26年12月23日（火）に太田二高演劇部・詩吟8名結城二高3名教員7名大学生1名計19名が石巻仮設住宅を訪問した。（マイクロバス）

昨年より訪問回数が減少した大きな理由はバス賃の値上げである。平成26年4月1日から国土交通省の指導によりバス運賃が改定になった。この影響で大型バス予約することが困難になった。約2倍の値段になり、参加者の負担が大きくなったためである。①④のようにマイクロバスで行くのがやっとの状態である。

また本年度、県内の高校で道德の時間に「被災地ボランティア」の講演をすることができたことは、被災地の現状を伝えるのに役立った。

P「さて、来年2014年ですが この活動をどのように活動を展開していきたいと思っていますでしょうか？」

塙「はい 今後活動の輪をもっと県内全域に広げたいというのが私の夢です。来年は道德の時間に中学校や高校へ出前講座という形で行って、活動の輪が広がれば嬉しいです。」

P「なるほど この活動の体験を、その出前授業みたいなかたちで皆さんに広めていく。浸透させていきたいという…。」

塙「そして また、参加者を募って一緒に行きたいと思いますね。」（2013. 12. 30放送）

茨城県では、高校1年生対象に週1時間道德の時間を設定している。これは平成19年度から実施しているものだ。各校でその指導を工夫している。ゲストティチャー講話という学校職員以外の人に話してもらう機会がある。12月30日のラジオ番組で発言したとおり、平成26年度は東日本大震災大震災のボランティア活動を高校への出前講座として浸透させたいと思っていた。4月より1学年主任に講演の案内を送り、その結果次の6校で実施することができた。

- ①6月16日（月）14：25～15：15 那珂高校 多目的教室

音楽は発達段階や身体状況、年齢、性別等が異なっても誰にでも自然に受け入れられる媒体であることから、障害をもつ子どもの保護者にとって、他児や他児の保護者と共に共感しながら、子どもの成長を楽しみながら見守り、そして保護者自身も活動に参加できるため、充実感につながると考えられる。子ども自身も、音の出るものに非常に興味を示しやすく、提示した楽器には手を伸ばし触れたくなる衝動にかられ、主体的な取り組みが期待できる。また、音や触感に対し敏感であり好きな音と苦手な音などを聞き分けるようになる。個別支援からは「パラバルーン」に対する極度の拒絶が見受けられた。極度の拒絶などが就学前に明確になることで、就学後に向けた支援についても考えるきっかけとなるのではないだろうか。

また、幼稚園での A 児の様子からは、A 児が自分の中に音楽やリズムを獲得していることがわかり、音楽を保育に取り入れることが、他児とのかかわりの広がりへのきっかけになると考えられる。加えて、これまでの「こども音楽療育 WS」への参加の様子を担当保育者に伝えることが、保育室内の環境作りにも影響し、エピソード 3 から 4 の期間に繋がっていったことを考えると、療育を行う機関と園の共通認識を行うことの有効性がうかがえる。しかしながら、本事例では園内にある楽器を並べるだけに留まり、保育者が中に入って A 児と他児を繋げる役割を果たすなどの姿は見受けられなかったため、活動の広がりが見受けられなかった。音楽を用いた活動に保育者がどのように介入し、対人関係を築くことにつまずきのある子どもに対する支援を行っていくのか、保育コンサルテーションを開催する必要性が考えられる。

4. 今後の課題

今後の課題として、毎回のコースが終了すると、保護者の 100% が継続を望んだ。学生が参加するワークショップであるため、今後も、日程や時間を調整し、親子が無理なく参加できるように、回数や定員人数を検討していきたい。また、これらの研究を基に、保育現場に取り込むことができる「こども音楽療育」のプログラム作りの検討を要する。健常児も障害児も、それぞれが音楽のもつ効果を共有し、普段の生活にも様々な作用を与える「こども音楽療育」のプログラム開発を行うことが必要である。

引用・参考文献

- 神永 直美・馬立 明美. (2013). 「こども音楽療育実習の授業展開～初年度の取り組み～」. 茨城女子短期大学紀要, 40, 53-60.
- 廣部 朋美・神永 直美・馬立 明美. (2014). 「こども音楽療育ワークショップの取り組み—保護者アンケートから 2 年目を振り返る—」. 茨城女子短期大学紀要, 41, 60 - 68.
- 廣部 朋美. (2015). 「発達障害児を対象とした音楽療育の指標開発に関する研究——ワークショップを通じた調査から——」. 家庭教育研究紀要, 36,
- 全国実務教育協会. (2011). 「こども音楽療育士教育課程ガイドライン」
<http://www.jauch.gr.jp/kanri/upload/guideline/pdf/000044.pdf>
- 全国実務教育協会. (2011). 「こども音楽療育士資格認定に関する規定」
<http://www.jauch.gr.jp/kanri/upload/guideline/pdf/000043.pdf>

付記 本稿 2 (1) は日本保育学会第 67 回大会において発表した内容を、(2) は全国保育士養成協議会第 53 回研究大会において発表した内容を再構成し掲載した。

た。A 児は他児に関して、あまり関心がなかったようで、ここでも他児との交流は認められなかった。

③集団活動の中で

週に 1 度、外国人講師を招いて約 30 分の英語

◆エピソード5 （5月9日 曇り）

フラッシュカードを用いて、色を問われると、一番に「パープル！」と答える。次のカードを見て、すぐに「イエロー」と答える。「アップ、アップ、ダウン…、ダウン、ダウン、アップ」等の言葉がけに合わせて、跳んだり、しゃがんだりを笑顔で繰り返している。

A 児の記憶力に誰もが驚いた瞬間であった。英語の時間はとても楽しみにしていると担任保育者から話を聞いた。絵の中の色、そしてリズム感のある英語が A 児の中で一つとなり、記憶が深く刻まれたのかもしれない。また、他の言葉も身体表現と一緒にいるため、A 児はとても取り組みやすく楽しめたのだと考えられる。聴覚刺激に視覚的なアプローチや身体表現アプローチが加わったことで、A 児の理解が深まったと言えよう。保育現場では、楽器がなくともリズムや声の高低で音楽活動に繋げることができると考えられる。

3. 総合考察

「こども音楽療育士」資格の導入にあたり、学生の実習の場としての役割から始まった「こども音楽療育 WS」であったが、これまで見てきた通り、学生の学びの場としてはもちろん、その他に保護者支援（子育て支援）や発達障害児に対する個別支援の観点からもその重要性を確認することができた。

障害をもつ子どもの保護者は子どもの発達に関して心配や不安を抱くことは言うまでもないことであるが、「こども音楽療育 WS を通した子育ての援助の成果」（図 3）を見出すことができた。

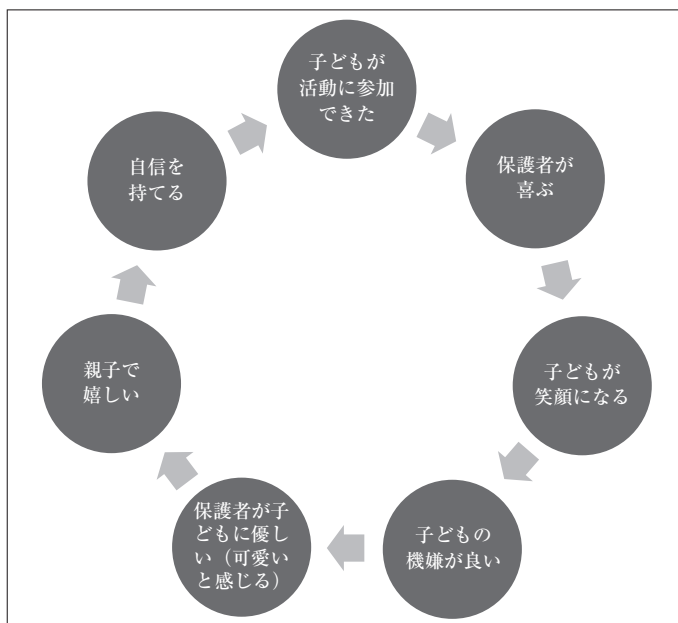


図 3 音楽療育 WS を通した子育ての援助の成果

◆エピソード2 (4月11日 晴れ)

身支度を終えると、滑り台に向かう。周りに子どもが多くなってくると、少し避けるように滑り台から遠ざかる。近くに居たA児の姉がシーソーのところで「ぎっこん、ぱったん」と言っており、シーソーで遊び始めると、A児も姉に引き寄せられるようにシーソーに近づき、「ぎっこん、ぱったん、ぎっこん、ぱったん」とリズムを刻みながら声を出してシーソーを揺らしている。

自由遊びの中で自然とリズムや歌が出てきた場面である。小さな声ではあるが、歌詞もしっかりと覚えており、歌による対話的なやりとりが広がった。また、エピソード1では、歌が契機となり、他児と同じ空間を共有するに至った。明確な言語のやりとりが無くとも、歌を歌うことで、同じ目的をもってその場にいることが共有されていったと考えられる。A児は姉に比べ周りの人の感情に共感しやすい。エピソード1・2の時期は入園の時期と重なり、3歳児クラスは連日保護者と別れたくない子どもたちの泣き声が響いていた。大きな声で泣いている子どもがいたり、A児は硬直し、その後声を出さずに静かに泣いていることが多々見受けられた。このA児の感受性の豊かさを支える音楽の在り方を模索していきたい。エピソード1で見受けられたように、他児が来ることにに対して嫌がる様子は見られなかったが、多くの子どもが自分の周りに集まることは苦手としており、これから仲間関係を広げていくことが課題だと考えられる。

②保育の環境に音楽を取り入れる

◆エピソード3 (5月9日 曇り)

保育室中央の製作テーブルに、すず、タンバリン、カスタネット、トライアングルなどが置いてある。保育室内ではCDプレーヤーを使用し、人気アニメソングが流れている。製作テーブルの前には、高さ7センチ程度の巧技台が4つほど並べられている。A児は楽器を手にとると、巧技台に上がり、音楽を聴きながら楽器を鳴らし始める。A児は徐々に楽器を変えるが、隣に並んで楽器を鳴らしていた女兒2～3名もA児を見て、楽器を取り換えて遊んでいる。

◆エピソード4 (5月22日 晴れ)

保育室の中央には、高さ7センチ程度の巧技台が4つほど並べられている。この日は、保育室の隅の棚の楽器スペースに楽器が置かれていた。ここ数日と同じように、保育室内では、人気アニメソングが流れている。A児は身支度を終えると、楽器スペースに行き、すずを取り出す。2小節ごとに楽器を取り換えに棚に向かう。この様子を見ていた他児もA児の動きを見て、楽器を交換しに棚に向かう。

担任保育者はA児が音楽に興味・関心があることから、保育室内に音楽活動ができる環境づくりを行った。A児は演奏者ということを意識し、巧技台の上に前を向いて立っている。内的なリズム感を表現するように、2小節ごとの区切りで楽器を交換しようとしていた。CDを使用していたため、テンポも一定であり、リズム感を取りやすかったのではないかと考えられる。また、拍を感じて演奏している場面も見受けられた。具体的には、四分音符と四分休符を繰り返し表現していた。このA児の様子に引き寄せられるかのように、他児も楽器を交換して音楽に合わせて楽しんでい

手続き X + 1 年 4 月から 7 月までの幼稚園における平均週 2 回の参与観察を行った。参与観察は、A 児が通う幼稚園にて基本的には登園から自由遊びの間、約 1 時間行った。筆者は保育に対し積極的なかわりは設けず、必要に応じて保育に参加する補助的な保育者として保育を行った。園生活の 1 日の流れを図 2 に示す。

8:40	10:30	11:30	12:30	13:30	14:00
登園	自由遊び	一斉活動	昼食	自由遊び(室内)	帰りの集い 降園

図 2 A 児が通う幼稚園の 1 日の主な流れ

(b) 結果と考察

本来、「こども音楽療育 WS」は、「こども音楽療育士」の資格取得にかかる授業の一環として始まった。そのため、A 児の日々の姿や集団生活における困難な場面、音楽を用いる視点などについて知見を得て深めるため、幼稚園での参与観察を行うに至った。幼稚園における参与観察は、朝の登園場面から始まり、幼稚園生活におけるルーティン活動（登園→保育者と挨拶を交わし、保護者と離れる→靴を履き替える→保育室に入る→シール帳にシールを貼る→自分のロッカーで身支度を整えるなど）を補助した後、自由遊びにおける様子の中で、音や音楽に関するエピソードを抽出した。A 児には特定の仲良しの友達はおらず、一人で遊んでいることが多かった。園庭で遊ぶことがほとんどで、滑り台やブランコが遊びの中心であり、1 つの遊具で 10 分以上遊ぶことも少なくなかった。A 児にとって保育の中で流れる音楽は、他児や他者と繋がりを感じることができるものであったり、自己発揮の 1 つであったりしていることが伺えた。以下では、3 つの場面における A 児と音楽の関係性を見ていくこととする。

①自由遊びの中で

◆エピソード 1 （4 月 9 日 晴れ）

いつも通り、8 時 40 分頃、母親と姉と登園してくる。担任の保育者や T と朝の挨拶を交わすと、まだ新しいクラスに慣れないためか、隣の 3 歳児クラスを覗いている。そと T の手を取り、身支度を始める。朝の身支度を終えると、帽子を被って園庭に出る。遊びに行く際も T の手を引っ張ったままである。普段通り、滑り台やブランコを一通り楽しむと、園庭の隅にある花壇に向かった。そこにはチューリップが咲いていたため、T が「咲いた～、咲いた～」と歌い始めると、A 児も続きを歌い始めた。1 番を歌い終えると、A 児は「もう 1 回」と再び歌うことを T に促してきた。しばらくすると、A 児はアリを見つけ「ありさんとありさんが」と歌い始めたので、T も一緒に歌うと、T の顔を見ながら周りを歩き大きな声で歌うようになった。

しばらくすると、同じクラスの男児 1 名と女児 1 名が近くに来てアリを探し始めた。T が 3 名に対し、「アリさんいるかな？」と言って歌うと、それぞれに声を出しながらアリを探し始めた。

⑤では、2年間で3科目履修したことについて問うた質問であるが、「とても大変だった」「や大変だった」を合計すると64.6%となり、かなりの学生が負担を感じながら履修していたと推察できる。しかし、⑥の「後輩に勧めたいか」という質問では、98.5%の学生が後輩に勧めたいと回答しており、「大変だけどやってよかった」「大変だけどその価値はある」と学習成果を感じていると考えられる。

⑦「こども音楽療育」関連科目の感想（自由記述）

- ・実際に障害のある子どもと多くかかわれて、今後に役立つと思った。
- ・実習を通して実際に障害のある子どもに触れ、音楽の楽しさやプログラム作りの大切さを学んだ。
- ・実習がたくさんあって大変だったが、障害児と接する貴重な体験ができた。
- ・必修科目の他に3科目取るのはすごく大変だったが、ピアノに自信がついた。
- ・様々な実習先（施設）に行けたのがよかった。
- ・WSを経験するうちに、障害のある子どもたちが音楽を楽しんでいる姿に触れ、他の実習ではできないことを経験できた。
- ・保護者とのやりとりやの表情からもたくさんの学びがあった。
- ・「こども音楽WS」をもっと経験したかった。回数を増やしてほしい。（複数）
- ・録画して反省に生かしたかった。
- ・練習、リハーサル時間が足りなかった。
- ・実際に接する前に、DVDなどで実際の様子を見るとイメージがつかめるのではないかと思った。
- ・経験したことを就職先で活かせるようになりたいと思った。

学生は3科目の「こども音楽療育」関連の授業を通して、音楽の可能性を感じると共に音楽を共に楽しむことが有意義であることを実感し、障害児の実態やかかわり方を学んでいることが分かる。また、保護者の思いにも触れ、障害児を育てるということについても思いをはせることができた。さらに、障害児保育に限らず様々な保育の場面に活かせる活動としての期待も大きいことも読み取れる。

授業改善に対する意見も寄せられているので、今後、WSの回数や実施方法を検討すると共に、「こども音楽療育」の授業の充実をめざしていきたい。

(3) 幼稚園における参与観察の事例から

(a) 方法

対象児 本事例の対象児（以下、A児）は、地域の私立幼稚園に在籍する女児で、「こども音楽療育WS」参加開始時の年齢は3歳11か月であった。A児には双生児の姉がおり、2人とも第2期の「こども音楽療育WS」参加後に療育手帳を取得している。幼稚園ではA児とA児の姉の2人に対し加配の教員を1名配置している。また、週に1回幼稚園登園前に、在住している市が運営することも発達センターが行う個別相談支援（指導員と親子の1対1で行う遊びの教室）に通っている。

ができると感じる」等の記述があり、保育士資格や幼稚園教諭免許に付加価値を付与するという面での成果が得られたと考えられる。しかし、「障害のある子どもは年々増えているので、現場ではクラスに一人はいるという状況であるので、とても役に立った。しかし、その反面、資格の認知度が低いので履歴書に書いても『この資格は何?』と言われてがっかりした」という記述も見られ、前述したように現場での資格の認知度を高めていく努力をしていく必要性を感じる。

○あまり得られなかったと回答した学生

音楽の観点	ピアノが苦手なのに音楽療育の資格をもってよいのか不安
-------	----------------------------

④こども音楽療育実習（「こども音楽療育 WS」）でよかったこと

音楽を用いた療育について理解できた	69.2%
障害児に実際に接することができた	64.6%
いろいろな楽器の名前や演奏の仕方を学べた	58.5%
音楽を用いた活動のプログラムが立てられるようになった	49.2%
教材の作り方や活用の仕方がわかった	47.7%
障害児について詳しく学習することができた	41.5%
音楽を用いた活動への自信がもてた	33.8%
ピアノに自信がついた	12.3%
その他(保護者の悩みに触れることができた)	3.1%

(複数回答可)

3科目を通しての授業目標の達成度を問うた質問であるが、「音楽を用いた療育について理解できた」が69.2%、「障害児に実際に接することができた」が64.6%で概ね達成できたと言える。しかし、過半数に達していない項目もあり、「ピアノに自信がついた」はわずか12.3%であることを考えると、今後さらに授業方法等を検討して行く必要がある。

⑤2年間で3科目履修したことについて

とても大変だった	13.8%
やや大変だった	50.8%
あまり大変ではなかった	29.2%
大変ではなかった	6.2%

⑥後輩に履修を勧めたいか

ぜひ勧めたい	73.9%
やや勧めたい	24.6%
あまり勧めたくない	1.5%
全く勧めたくない	0.0%

③そう感じたのはどんなことからか（自由記述）

○「期待通りに得られた」「やや得られた」と回答した学生

音楽の観点	音楽の力で育ちを促すことができると学べた
	音楽がもっている可能性はすごいことが分かった
	音楽の楽しさが実感出来た
	たくさんの楽器に触れ、楽器の使い方がわかった
	ピアノに自信がついた
障害児とのかかわりの観点	障害のある子どもの支援についてわかった
	音楽を通して健常児、障害児関係なくかかわれることがわかった
	障害についての考えが変わった
WSの観点	とてもやりがいのある実習だった
	WSで色々な楽器に触れ音楽の楽しさを感じることができた
	他の実習では学べないことを学ぶことができた
	施設での観察実習がとても勉強になった
	音楽を通してのかかわり方が分かった
	子どもに実際にかかわり療育の意味と大切さがわかった
	プログラム作成について学ぶことができた
	子どもたちの成長(変化)の様子を見ることができた
	保護者とかかわりでも学びがあった
就職の観点	就職の面接の際、この資格に興味をもってくれた
	就職先で実際に使うことができると感じる

自由記述での回答は、主に「音楽の観点」「障害児とのかかわりの観点」「WSの観点」「就職の観点」から記述されていた。音楽の観点では、「音楽の力」「音楽のもっている可能性」「音楽の楽しさ」を感じたということや「たくさんの楽器に触れることができた」「ピアノに自信がもてた」との回答があった。「今まで気づかなかった音の素晴らしさに気づくことができた」「子どもが音楽を楽しむことのよさを実感した」という記述もあり、「こども音楽療育」科目の導入に当たり様々な種類の楽器を整備したり環境を整えたりしたことが成果となったと考える。今後さらに学生が音楽を楽しむことができるような環境を整えていきたい。

また、「障害児とのかかわりの観点」からの回答も多く見られた。実際に障害児と接してみても「考えが変わった」「イメージが変わった」や「支援の方法がわかった」など、実際に接した実感からの回答が多かった。保育実習で施設実習はあるものの、障害児施設で実習を行う学生は非常に少ないので、「こども音楽療育」の授業を通して「はじめて接した」という学生が多く貴重な経験であったことがうかがえる。

「WSの観点」では、実際に楽器に触れそれを応用してプログラムを立て、実習を行ったという経験からの記述が多く見られた。「とてもやりがいのある実習だった」「他の実習では学べないことを学ぶことができた」など、満足感を感じていることがわかる。1年次での観察実習、2年次での実習と同じ子どもを継続して観察できたことにより、「子どもたちの成長(変化)の様子を見られた」や「保護者とかかわりでも学びがあった」などの成果を得られたものと思われる。

「就職の観点」では、「面接の際、資格に興味をもってもらえた」や「就職先で実際に使うこと

果が得られたかどうか ③その理由（自由記述） ④こども音楽療育実習（「こども音楽療育 WS」）でよかったこと ⑤2年間で3科目履修したことについて ⑥後輩に勧めたいか ⑦「こども音楽療育」関連科目の感想（自由記述）とした。

以下に、その結果と考察を記す。

①こども音楽療育士資格を取得しようと思った理由

就職に有利だ(役立つ)と思った	50.8%
障害のある子どもに関心があった	41.5%
音楽を用いた療育に興味があった	36.9%
ここでしかとれない資格だから	29.5%
家族の勧めがあった	20.0%
その他	1.5%

(複数回答可)

「就職に有利だ（役立つ）と思った」を選択している学生が、50.8%と半数以上であった。資格取得を就職活動に結び付けて考える学生が多いことがわかる。「こども音楽療育士」資格について、現場（就職先）への周知に努め現実的にも就職に有利になるようにしていく必要がある。また、「ここ（本学本科）でしかとれない資格だから」という理由を選択した学生も29.5%おり、他短大との差別化につながっている（入学時のアンケートによると、本学本科を選んだ理由の上位に「こども音楽療育の資格がとれるから」がある）と考えられる。また、「家族の勧めがあった」が20%いることも興味深い。資格はできるだけ取っておいた方が将来に役立つのではと考えてのことで推察される。オープンキャンパスや入学時の保護者説明時に、本資格の内容や取得の意義を丁寧に説明する必要性があることが分かる。

②期待していた結果が得られたかどうか

期待通りに得られた	43.1%
やや得られた	55.4%
あまり得られなかった	1.5%
全く得られなかった	0.0%

1人を除くほとんどの学生が、期待していた結果が概ね得られたと感じていることが分かる。その理由に、「ピアノが苦手なのに音楽療育の資格をもってよいのか不安」（③での回答）との記述があり、ピアノ実技が期待していたように成果が得られなかったという思いが読み取れる。前述のように、本学本科は入学試験にピアノ実技を課しておらず、経験の差が大きい。そのことに対応しようと、「レベル別少人数グループレッスン制」を導入しレベルアップに力を入れているが、さらに検討し学生一人一人が自信をつけて卒業できるような学習環境や内容を検討していく必要がある。また、「こども音楽療育」の授業を通して、ピアノだけではなく様々な楽器を用いることによっても豊かな音楽療育の方法があることも強調し示していかなければならない事項であることを感じる。

- ・家でも歌ったり踊ったりするようになった
- ・身体を動かしストレス解消になった
- ・順番を待てるようになった
- ・子どもが心から音楽を楽しんでいるように感じ自分も嬉しい
- ・音楽活動が子どもの成長に大きく影響した
- ・子どもの表情が豊かになった
- ・好きな楽器や苦手なことが分ようになった
- ・ママから離れ椅子に座れるようになった

音楽は発達段階や身体状況、年齢、性別等が異なっても誰にでも自然に受け入れられる媒体である。更に親子での参加であったため、リズムや音の振動を、共有し、一緒に感じ、楽しめたのではないかと考える。また、単発での開催ではなく同じ親子が4回から6回、多い子どもでは10回以上連続で参加することとしたため、子どもの社会性、積極性の成長が顕著に表れていた。音楽療育の保護者支援における主な成果から、親子参加は有効であると考えられる。

「こども音楽療育 WS」の保護者支援における主な成果

親子での音楽の共有はとても有意義であり心の安定を図る
 子どもの楽しい顔は親にとって一番の喜びであり子育てに非常に影響を与える。
 小学校に入るための準備としても音楽活動は有効である。
 他者を意識し音やリズムで表現できる。

(2) 学生の学びを視点に

(a) 方法

前述の「こども音楽療育士」資格に必要な単位を取得し、平成24年度には卒業生77人中21人(27.3%)、25年度には卒業生65人中29人(44.6%)、26年度には卒業生87人中36人(41.4%)が資格認定を受け卒業した。

3年を経たところで、これまで行ってきた学生アンケート(平成25年度、平成26年度に実施)の結果を分析し、学生の学びを視点に「こども音楽療育 WS」について考察し、成果と今後の課題を整理したいと考える。

○ アンケート対象 「こども音楽療育士」資格取得のための授業を履修した学生

平成25年度・2年生	29人	
平成26年度・2年生	36人	計65人

○ アンケートの時期 12月

(b) 結果と考察

アンケートの内容は、①こども音楽療育士資格を取得しようと思った理由 ②期待していた結

表3 期待される効果

動作	効果
きれいな音を聴く	リラックス効果
音の振動を共有する	心の安定を図る
歌を歌う、話す	発散し、楽しむ、他者を認識する
楽器を鳴らす（たたく等）	集中力を促す
歌や楽器を合わせる	協調性が芽生える
グループで活動する	社会性が必須

(b) 結果と考察

平成24年度の最初のコースでは7組の参加希望があった。活動前に保護者から、年齢、性別、好きな歌やテレビ番組、得意なこと、苦手な音や行動、症状等を聞き取りアセスメントを行った。1回目は、子どもも保護者も緊張し、聴く、見る等、様子をうかがっていた。中には笑顔が少ない子どももいた。2回目からはリラックスしたのか、WS中寝ころぶ子どももいた。4回目では、プログラムを理解し、歌う、身体を動かす、楽器を鳴らす、聴くことが楽しめるようになり、親子の笑顔や笑い声が増えた。終了後、継続を望む声が多く、秋からのコースに繋がった。人数も大幅に増え、5回～8回では、他者を認識し順番を待つ、自ら楽器を選ぶ、声が出る、模倣ができるなど、積極的に参加する姿が見られた。また、保護者も子どもが楽器を楽しむ姿を見て、嬉しそうに仲間と話す場面も増えてきた。自閉症のTは、初めのうちは全く笑顔がみられなかったが、8回目が終わる頃には表情が柔らかくなり、親から離れて、自ら進んで楽器を取りに立ち上がったたり、ダンスで身体を動かしたりと楽しそうに参加するようになり行動に変化が生じてきた。通園している幼稚園でも声を出し仲間と関われるようになったという。何より保護者の表情が穏やかになった。

平成25年度も同じ方法で募集し、17組が参加した。慣れている子どももいたため、スムーズに行えた。初回から最後まで参加したYは発語が無く、人に気持ちを伝えるのが難しかったため、声を出すことを目標とし、パペット人形を使い「あ」や「お」等を歌に取り入れ行った。その結果、単語から2語文になり、2年目には幼稚園に入園したことも伴い、言葉の数が増え、現在では会話ができるようになり、友達と口げんかもするようになったという。

毎回WS後に、保護者のみで集まり、その日の感想や子どもの気になる行動、また、家庭での様子や言動の変化等を話し合う機会を持つようにした。様々な子育てについての話題を共有することで保護者の不安や心配が軽減され、子育て支援にも繋がったのではないと思われる。

〈保護者アンケート回答の一部〉

- ・色々なことに興味・関心を持つようになった。
- ・音楽あそびのあった日はその後ぐずることが無くよく寝た。
- ・見ていただけだったのが自然と体を動かしたので驚いた。
- ・発語や会話が増えた。音楽を楽しむ様子が見られた。
- ・家でも歌ったり踊ったりするようになった。
- ・子どもが音楽あそびを本当に楽しみにしていて、そんな姿を見て親の私もうれしかった。
- ・積極的に歌うようになった

園、児童福祉施設等において様々な育ちの子どもに対応していく保育者にとって意義深いことである」と考え、「こども音楽療育士」の資格認定に必要な「こども音楽療育概論」（講義2単位）、「こども音楽療育演習」（演習1単位）、「こども音楽療育実習」（実習1単位）の3科目を平成24年度から選択科目としてカリキュラムに組み入れてきた。

中でも「こども音楽療育実習」（以下、実習）の授業の展開については、どのような内容をいつどのように組み立てていくか熟慮を要するところである。保育士資格や幼稚園教諭免許のための実習を優先しなければならないので、長期休業や土日を利用して実習を行うことから、1年次後期から2年次後期までの期間を設けている。「こども音楽療育WS」は、1年生は観察実習（重症心身障害児通園施設や知的障害児通園施設等に訪問し音楽活動を観察したり部分的に参加したりたりする）の一部として、2年生は実習の最終段階として位置づけている。

平成24年度、25年度、26年度の「こども音楽療育WS」は以下の要領で実施した。

1. 場所 本学多目的演習室又は音楽室
2. 対象 地域の療育が必要な（必要と思われる）子ども（3歳～6歳）とその保護者
3. 実施時期・回数 平成24年度…8月に4回 11月～2月に4回
平成25年度…8月に6回 10月～1月に4回
平成26年度…6月からの年間コース8回^{注)}
8月に6回
4. 時間 10時～11時30分
5. 担当 2年生5、6人の学生が1グループとなりプログラム作成、教材準備、進行、伴奏等を分担して行う

^{注)} 新たな試みとして、地域貢献の点から定期的に開催（前年度からの要望から）

2. 方法と結果

(1) 保護者支援の視点から

(a) 方法

「こども音楽療育WS」は未就学児で療育が必要な子どもを対象に、学内の多目的演習室での開催とし参加者を募った。これまで（平成26年1月時点）に、平成24年度は夏休みを利用し8月に4回と、11月～2月の授業のない土曜日に4回、平成25年度は8月に6回と10月～1月に4回、4コースを実施した。基本的なプログラムの流れ（図1）と期待される効果（表3）を基に、親子で音楽を楽しみながら絆を深めると共に発達を促すことを目標とし、2年間で合計18回の「こども音楽療育WS」を行った。



図1 「こども音楽ワークショップ」の基本的なプログラムの流れ

表1 入学前アンケートによる学生のピアノ学習経験

設問1 ピアノはどのくらい弾けますか		
	H25 入学	H26 入学
全く弾けない	3%	11%
片手でメロディーを弾けるくらい	33%	35%
両手で弾ける	64%	54%
設問2 これまでにピアノを習ったことはありますか		
	H25 入学	H26 入学
ある	76%	52%
ない	24%	48%
設問3 設問2で「ある」と答えた人はどのくらい習っていますか (いましたか)。		
	H25 入学	H26 入学
1年未満	19%	18%
1年以上～3年以下	31%	11%
4年以上～6年以下	19%	33%
7年以上～10年未満	12%	19%
10年以上	18%	19%
未回答	1%	0%

表2 学生が入学前に取り組んでいた教本の内訳

	H25 入学	H26 入学
バイエル 10 番程度	0%	0%
バイエル 30 番程度	14%	27%
バイエル 60 番程度	11%	10%
バイエル 90 番程度	9%	7%
バイエル 修了程度	11%	7%
ブルグミュラー 初め	13%	10%
ブルグミュラー 半ば	13%	3%
ブルグミュラー 修了程度	2%	7%
ソナチネ	18%	13%
ソナタ	0%	3%
未記入	9%	13%

※表1 設問1のうち、両手で弾けると答えた学生のみ集計

財団家庭教育研究奨励金において採択）にて、「こども音楽療育ワークショップ」（以下、「こども音楽療育 WS」）における個別支援について論じた。それらを踏まえ、本稿では「こども音楽療育 WS」の在り方を再検討するとともに、「こども音楽療育 WS」に参加している子どもの幼稚園における参与観察の事例を報告し、本年度の総括および実践研究としてまとめることを目的とする。

＊「こども音楽療育士」資格科目と「こども音楽 WS」について

本学本科では、「音楽を用いての療育について、知識や技術を身に付けることは、保育所、幼稚

研究ノート

保育者養成校における「こども音楽療育ワークショップ」の意味

Consideration of the meaning of “Certified Child Music Habilitative Therapy workshop” in the Childminder training school

廣部 朋美・神永 直美・馬立 明美

1 問題と目的

平成 24 年度から一般財団法人全国実務教育協会の「こども音楽療育士」資格認定制度が開始され、茨城女子短期大学保育科（以下、本学本科）では、資格認定開始年度からカリキュラムを取り入れて、これまで毎年資格取得者を輩出している。「こども音楽療育士」資格の導入にあたり開催された、「こども音楽療育」に関する教科担当教員の説明研修会では、「保育音楽療育士の下位資格に位置づけられ、保育者としてピアノの実技レベルの向上だけに留まらず、様々な楽器を用いて音楽を楽しみながら療育活動を行うことができるようになること」が強調されていた。

本学本科では、入学試験にピアノ実技を課していないため、ピアノ学習経験の個人差が大きいのが実情である。入学前に実施しているピアノ学習経験についてのアンケート結果が表 1 である。入学までにピアノを習ったことがあると答えている学生が一定数はいるものの、既習曲について尋ねるとバイエル前半程度の学生が少なくない（表 2）。実際に授業を通して感じることは、音楽系実技科目に対する自己評価が適切に行えず、苦手意識をもっている学生が多いということである。そのため、音楽を楽しみながら実技レベルの向上を目指していく「こども音楽療育士」資格科目の導入は、本学本科において音楽系実技科目の内容や学習形態、評価方法等を検討し改善していくためにも適していると考えられた。

また、「こども音楽療育士」資格取得における教育目標として、「音楽を通して、心身に何らかの障害のあるこども達の発達的な援助を行うための音楽療育に関する基礎知識・専門知識に加え、それに必要とされる技術と実践能力とを養成すること」が挙げられている（こども音楽療育士教育課程ガイドライン, 2011）ことも、近年、保育の現場で障害のある子どもへの支援が広がっている状況を考えると、保育の現代的ニーズに対応していると言える。「こども音楽療育士」資格を取得するにあたり、障害児への具体的な支援についてさらに学びを深めることができることから、保育士資格や幼稚園教諭免許状に対する付加価値を担うという意味からも本資格が非常に有意義であることが伺える。

これまで、「こども音楽療育」にかかわる授業の環境整備や授業内容の検討を行ってきた過程を、本学の紀要に年間の取り組みの振返りとして掲載してきた（神永・馬立, 2013; 廣部・神永・馬立, 2014）。また、研究発表についても、日本保育学会第 67 回大会において「保護者支援（子育て支援）の視点」から、全国保育士養成協議会第 53 回研究大会において「学生の学びの視点」から、ポスター発表を行った。その他、家庭教育紀要第 36 号（平成 25 年度公益財団法人小平記念日立教育振興

腰痛を改善するために開発された。DVD や書籍の刊行により、2011 年以降各種メディアに注目された。

- v 「カーヴィーダンス」は、ボディメイクトレーナーの榎本裕美によって考案されたダンスとフィットネスを組み合わせたオリジナルメソッドのエクササイズである。楽しく踊るだけで女性らしいくびれのあるしなやかな体型をつくることができるとされている。DVD や書籍の刊行により、2010 年以降各種メディアに数多く取り上げられ注目された。
- vi 「コアリズム (Core Rhythms)」とは、ヤーナ・クニッツによって考案されたダンスをベースにしたエクササイズプログラム及び、そのエクササイズを収録した DVD 商品名である。2008 年にメディアで紹介され、爆発的な人気を集める。
- vii 「ロデオボーイ」は、大東電気工業が発売した痩身用フィットネスマシンである。乗馬をしている感覚で体幹を鍛えることができる。2005 年以降話題となり、フィットネスクラブ等でも採用されている。同様のマシンに 2000 年に発売された松下電器の「ジョーバ」がある。
- viii 「ビリーズブートキャンプ (Billy Blanks Boot Camp)」は、ビリー・ブランクスが考案した短期集中型エクササイズの総称及び、それを収録した映像ソフトウェアの題名である。米軍における新人向け基礎訓練である「ブートキャンプ」を基盤としている。通販番組で紹介されたところ、日本では 2007 年に一大ブームを引き起こした。
- ix 「ピラティス (Pilates)」は、ドイツの従軍看護師であったジョセフ・ピラティス氏によって考案されたエクササイズ法である。第 1 次世界大戦では、傷を負った兵士のリハビリテーションに役立てられた。胸式呼吸とともに、体幹の中心 (コア) への意識を高め深層筋 (インナーマッスル) を鍛えることで、強靱でしなやかな身体を目指していくものである。
- x 「モムチャンドダイエット」は、韓国のチョン・ダヨンが考案したダイエット方法である。「モムチャン」とは、韓国語で「鍛え上げられた美しい体」を意味する造語である。独自のエクササイズ「フィギュアロビクス」を基本とした全身エクササイズである。
- xi 「ボクササイズ」は、三迫将弘によって開発されたボクシングのトレーニング方法に基づいて行うエクササイズである。大幅な減量を求められるプロボクサーの手法を、ダイエットと体力増強を目的にアレンジしたものであり、シェイプアップに効果的であるとされている。
- xii 「ヤーナリズム」は、「コアリズム」の開発者でもあるヤーナ・クニッツによって 2011 年に考案されたエクササイズプログラム及び、そのエクササイズを収録した DVD 商品名である。腰を動かしながら踊ることにより、女性らしいくびれを目指すものである。
- xiii 「バンビウォーター」は、体の部分もしくは全身の痩身を目的として作られたスリミングジェルの一種である。

していく立場にある学生たちが、自身の適正な身体イメージを持ち、健康を維持するための正しい知識および実践力を得ることは必要不可欠である。

本研究は、昨年度に引き続き「女子短大生の瘦身意識と身体イメージに関する質問紙調査」を実施した 2014 年度入学生 81 名のデータに基づくものである。学生の適切な身体イメージの構築や健康の維持増進を促す指導を徹底するとともに、今後も更なるデータの蓄積と分析が必要である。

参考文献一覧

- 1) 「肥満症診断基準 2011」、日本肥満学会、2011
- 2) 「平成 23 年国民健康・栄養調査」、厚生労働省、2011
- 3) 馬場安希、菅原健介「女子青年における瘦身願望についての研究」、pp.267 - 274、教育心理学研究 48 (3)、2000
- 4) 諸井克英、小切間美保「女子青年におけるダイエット行動に及ぼす瘦身モデルの影響」、pp.58 - 67、総合文化研究所紀要 25、2008
- 5) 佐々木孝侍「ファッション誌と瘦身志向——モデルに対する憧憬と親近感及び読書傾向の視座からの実証的検討」、pp.231 - 248、マス・コミュニケーション研究 (80)、2012
- 6) 田仲由佳、上長然、則定百合子「青年期女性の体型認識に影響を及ぼす要因—瘦身者の検討—」、pp.57 - 61、神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要 6 (2)、2013
- 7) 森由紀、山本存、倉賀野妙子「女子大生のおしゃれ意識がもたらす瘦身願望と健康状況：食行動・運動習慣との関連において」、pp.309 - 318、日本家政学会誌 63 (6)、2012
- 8) 渡部基、田澤裕子「青年期女子における友人に抱く瘦身のメリット観とダイエット行動の関連」、pp.313 - 320、北海道教育大学紀要 61 (1)、2010
- 9) 福田理香、井口聖子、勝田史賀「女子大学生の体型とボディーイメージとの関係」、pp.31 - 37、活水論文集、健康生活学部編 53、2010
- 10) 藤沢政美「女子学生のボディーイメージとライフスタイル」、pp.53 - 63、園田学園女子大学論文集 45、2011
- 11) 平野和子「女子学生のボディーイメージダイエット行動について」、pp.1 - 12、神戸文化短期大学研究紀要 26、2002
- 12) 江田節子「大学生のボディーイメージと食習慣について」、pp.41 - 50、関東学院大学人間環境学会紀要 6、2006
- 13) 水村 (久埜) 真由美、橋本万記子「大学生のボディーイメージと健康に関する意識・行動にみられる性差」、pp.89 - 98、ジェンダー研究 5、2002
- 14) 千住真智子、日高弓雅、吉田康成「女子大学生の運動とダイエットに関する研究 (Ⅲ) —スポーツ・運動実践からみたダイエットに関連した行動の実態について—」、pp.103 - 116、大阪教育大学紀要 第四部門 教育科学 61 (1)、2012
- 15) 半藤保、川嶋友子「女子大学生の体型とやせ願望」、pp.54 - 59、新潟青陵学会誌 1 (1)、2009

脚注

- i 「基礎体育」は、保育士養成過程の改訂に伴い、2011 年度より「保育表現技術 (身体Ⅰ)」「保育表現技術 (身体Ⅱ)」に名称変更された。
- ii 「健康とスポーツ」については、保育科の学生の他に、ことばの芸術学科 (旧・国文科) の学生も受講することができる。ことばの芸術学科 (旧・国文科) の受講者数は、2009 年 2 名、2010 年 2 名、2011 年 1 名である、2012 年 0 名である。
- iii 「ヨガ (Yoga)」とは、古代インド発祥の修行法である。ヨガの古典文献の中で最も古いものが、パタンジャリによってまとめられた「ヨーガスートラ」である。そこでは、瞑想によって深く集中し、坐法を主とする静的なポーズにより悟りを目指すラージャヨガという方法が紹介されている。
- iv 「ロングプレスダイエット」は、俳優の美木良介が考案した深い腹式呼吸による独自のエクササイズである。

い」「骨ばった」「マッチョな」「なよなよ」「ガリガリ」「むっちり」「棒のような」「がっちり」「ぽっちゃり」「大きい」「骨太な」「薄い」「たくましい」「か弱い」「ふくよかな」「筋肉質な」「強い」「鍛えられた」「豊満な」「ぶにぶに」「かっこいい」「小さい」の24語であった。

この結果からは、女子学生が抱くジェンダー観を読み取ることができる。理想とされるのは、「きれいな」「女性らしい」「美しい」「やわらかい」「しなやかな」「ナイスバディ」といった「女性的魅力」を表現する際に用いられる言葉であり、「スラッとした」「スリムな」「痩せた」「モデル体型の」「細い」といった痩せ傾向を示す言葉も含まれていた。その一方で「かたい」「マッチョな」「がっちり」「大きい」「骨太な」「たくましい」「筋肉質な」「強い」「鍛えられた」といった「男性らしさ」を表現する際に用いられる言葉や、「折れそうな」「骨ばった」「なよなよ」「ガリガリ」「棒のような」「薄い」「か弱い」といった不健康なまでの「痩せ」の状態を表す言葉に対しては、理想的とはみなされていない傾向が伺えた。

最後に、女子学生が現在までに実践したことのあるダイエット方法を調査したところ、全体の20%以上の回答が得られたものは、食事系ダイエットにおいては「炭水化物抜きダイエット」「夕食抜きダイエット」「食べる順番ダイエット」「断食・プチ断食ダイエット」「ローカロリーダイエット」、運動系ダイエットでは「ジョギング・ランニング・マラソン」「ウォーキング」「筋力トレーニング」「ストレッチ」「なわとび」、その他のダイエットに関しては「半身浴」「リンパ・経絡マッサージ」「長風呂」という結果であった。

さらに、効果の認められたダイエット方法として、全体の10%以上の回答が得られたものは、食事系ダイエットにおいては「夕食抜きダイエット」、運動系ダイエットでは「ジョギング・ランニング・マラソン」であった。全体を通して、手軽に実践でき継続可能な方法が女子学生に支持されていることが示された。

しかしながら、中には「単食ダイエット」「断食・プチ断食ダイエット」「水分のみダイエット」「朝食抜きダイエット」「サプリメントダイエット」といった、安全が疑問視されるダイエット方法も少なからず実践されていた。身体的に成熟し、身体イメージが形成される青年期において、栄養バランスを著しく欠くような極端な食事制限を実施することは大きな危険性を孕んでおり、女子学生が正しい食と栄養の知識を身につける必要があることは言うまでもない。

さらに、運動系ダイエットにおいては、「ロングプレスダイエット」「カーヴィーダンス」「コアリズム」「ロデオボーイ」「ビリーズブートキャンプ」「モムチャンダイエット」「ヤーナリズム」といった、テレビやDVD等のデジタルメディアによって紹介され一時的に流行したダイエット方法も女子学生に支持されていることが明らかになった。メディアの情報が運動のきっかけとなっている点は評価できるが、一過性のブームにとどまらず、女子学生が生涯を通じて実践することのできる運動が望ましいと言えるだろう。

5. 今後の課題

筆者は、1年次の実技・講義科目「健康とスポーツ」、2年次の演習科目「保育内容演習（健康）」を担当しており、授業内で「食と栄養の基礎知識」「安全なダイエット方法」「運動が心身に与える効果」等についても取り扱っている。しかしながら、今回の調査結果は、必ずしも女子学生に正しい認識が浸透してはいない可能性を示している。将来、保育者として子どもたちの生活習慣を指導

結果によると、前者の結果は61.9%、後者は36.9%であり、今年度の調査結果とは異なり、「健康」よりも「ダイエット」という概念の方が女子学生の興味関心を強く惹きつけているという傾向を示していた。

また、食事量評価について、自身がよく食べる方かどうかについて「とてもそう思う」「まあまあ思う」と回答した者は全体の75.3%にも及んだ一方で、運動量評価について、自身がよく運動する方かどうかについて「とてもそう思う」「まあまあ思う」と回答した者は全体の29.7%にとどまった。多くの学生が、自身の運動量の少なさを自覚する一方で、自身の食事量が多いものと評価している。しかしながら、学生の83.5%が「普通体重」もしくは「低体重」に属している点を鑑みると、実際の食事量が多すぎるということは考え難い。ごく標準的な食事量であっても「食べ過ぎている」と認識してしまい、自身の食事量を過大評価する傾向が示された。

さらに、瘦身効果が運動へのモチベーションに与える影響を調査したところ、「痩せる」と聞くと運動へのモチベーションが上がるかどうかについて、「とてもそう思う」「まあまあ思う」と回答した者は69.2%にも上った。女子学生の瘦身願望が、運動の動機づけに結びついている可能性が高いことが分かった。

次に、自身の現在の「からだ」に満足しているかどうかについて、「とてもそう思う」「まあまあ思う」と回答した者は全体の僅か6.2%にとどまったのに対し、「あまり思わない」「まったく思わない」と回答した者は全体の77.8%にも及んだ。自身の身体に何らかの不満を抱いている者が多くを占めており、ひいてはその自己肯定感の低さ、自己不全感が必要以上の瘦身願望を誘発している可能性が示唆された。

一方で、自身の現在の「からだ」を健康だと思うかどうかについては、「ふつう」と回答した者の割合が全体の44.4%と最も多く、「とてもそう思う」「まあまあ思う」と回答した者は27.2%、「あまり思わない」「まったく思わない」と回答した者は28.4%であった。女子学生は自身の身体について、概ね健康であると評価していることが示された。

さらに、自身の体型への評価について、「とても痩せている」「やや痩せている」と回答した者は4.9%であるのに対し、「やや太っている」「とても太っている」と回答した者は71.6%にも上った。しかしながら、実際には学生の83.5%が「普通体重」もしくは「低体重」に属している点を鑑みると、女子学生は自身の身体が肥満傾向にあると誤った認識をする傾向にあることが示された。

現在よりも痩せたいと思うかどうかについては、「とてもそう思う」「まあまあ思う」と回答した者が94.0%にも及んだ一方で、現在よりも太りたいと思うかどうかについて、「とてもそう思う」「まあまあ思う」と回答した者は見られず、逆に「あまり思わない」「まったく思わない」と回答した者が93.8%にも及んだ。瘦身への憧れと肥満への嫌悪感が、女子学生の身体への認識を誤った方向に導いている可能性が示唆された。

次に、女子学生が抱く理想の身体イメージを可視化するために、自身が理想とする好ましい「からだ」のイメージに近いものを選択するよう求めたところ、選択者が過半数を超えた上位語は、「きれいな」「健康な」「女性らしい」「美しい」「やわらかい」「スラっとした」「スリムな」「しなやかな」「痩せた」「すっきり」「メリハリのある」「モデル体型の」「ナイスバディ」「細い」の14語であった。

一方で、自身の理想とは異なる好ましくない「からだ」のイメージに近いものを選択するよう求めたところ、選択者が過半数を超えた上位語は、回答者が多い順に「太った」「折れそうな」「かた

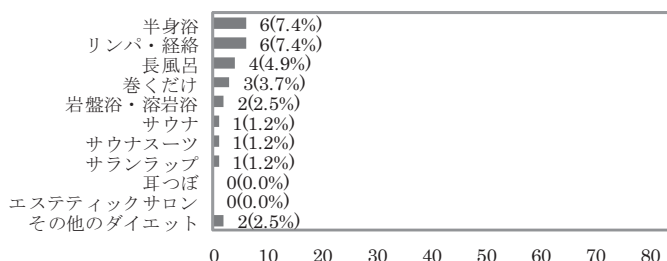


図 27 女子学生が効果を認めたその他のダイエット (2014 年度)

4. 考察

「女子学生の BMI 調査」および「女子学生の理想体重に関する調査」により、I 女子短期大学に所属する 1 学年の学生の 83.5%が「普通体重」もしくは「低体重」に属しているにも関わらず、89.5%の者が現在よりも体重を減らしたいと考えていることが明らかになり、女子学生が必要以上に強い瘦身願望を抱いている状況が示された。

また、これまで実際にダイエットを行った経験がある女子学生は、全体の 69.1%にも上った。「女子学生のダイエット経験に関する調査」からは、小学校低学年では 2.5%の者が、中学校では 14.8%の者が、高校では 63.0%の者がダイエットを経験しているものの、大学入学後にダイエットを実施した者は 22.2%にとどまったことから、思春期中期にダイエットを実施する者が増加し始め、思春期後期にその数はピークを迎え、やがて青年期に移行するに従ってダイエットを実践する者は減少していく傾向が示された。

ダイエットをする目的に関しては、83.9%の者が「痩せたいから」と回答しており、何らかの目的のために痩せるといよりも、痩せること自体が目的となっている傾向が伺えた。また、「体脂肪を落としたいから」と回答した者が 19.6%、「健康になりたいから」と回答した者が 14.3%にとどまったのに対し、「体重を落としたいから」と回答した者は 67.9%おり、体組織の根本的な改善よりも、数量化しやすい単なる減量に目が向いていることが示された。一方で、「きれいになりたいから」と回答した者は 33.9%、「周りに評価されたいから」と回答した者は 7.1%おり、外見や他者からの評価が瘦身願望に大いに影響していることが示唆された。

ダイエット経験がないと回答した 30.9%の学生に関しても、ダイエットをしない理由について 36.0%の者が「ダイエットしたい気持ちはあるがしない」と回答しており、ダイエットへの興味関心を抱いている状況が示された。

ダイエットの情報を得る手段に関しては、「テレビ」と回答した者が 69.1%、「インターネット」と回答した者が 46.9%、「SNS」と回答した者が 33.3%、「ブログ」と回答した者が 23.5%となったことから、デジタルメディアを通して得られる情報が、女子学生の瘦身意識に大きな影響を及ぼしていることが明らかになった。

雑誌やテレビ、インターネット等のメディアのダイエット情報を「とてもよく見る」「まあまあ見る」と回答した者は全体の 49.3%であったのに対し、健康情報を「とてもよく見る」「まあまあ見る」と回答した者は全体の 51.9%であり、メディアから得る情報については「ダイエット」と「健康」との間に大差が見られなかった。本研究による 2013 年度入学者を対象とした前年度の調査

一定の効果が認められた運動系ダイエットに関しては、全対象者 81 名中、選択者が多い順に、「ジョギング・ランニング・マラソン」12 名 (14.8%)、「ウォーキング」8 名 (9.9%)、「フラフープ」6 名 (7.4%)、「筋力トレーニング」6 名 (7.4%)、「スイミング」4 名 (4.9%)、「サイクリング」3 名 (3.7%)、「コアリズム」3 名 (3.7%)、「ロングプレスダイエット」3 名 (3.7%)、「スポーツジム」3 名 (3.7%)、「バレエエクササイズ」2 名 (2.5%)、「カーヴィーダンス」2 名 (2.5%)、「ストレッチ」1 名 (1.2%)、「ヨガ」1 名 (1.2%)、「ピラティス」1 名 (1.2%)、「エアロビクス」1 名 (1.2%)、「バランスボール」1 名 (1.2%)、「ベリーダンス」1 名 (1.2%)、「フラダンス」1 名 (1.2%)、「ヒップホップダンス」1 名 (1.2%)、「ボクササイズ」1 名 (1.2%)、「モムチャンダイエット」1 名 (1.2%)、「ヤーナリズム」1 名 (1.2%)、「ビリーズブートキャンプ」1 名 (1.2%)、「ロデオボーイ」1 名 (1.2%)、「加圧トレーニング」1 名 (1.2%) となった。「なわとび」を選択した者はいなかった。また、「その他の運動系ダイエット」を選択した 3 名については、「バスケットボール」と回答した者が 2 名、「腕を左右に振る」と回答した者が 1 名であった。

結果をまとめたものを図 26 に示す。

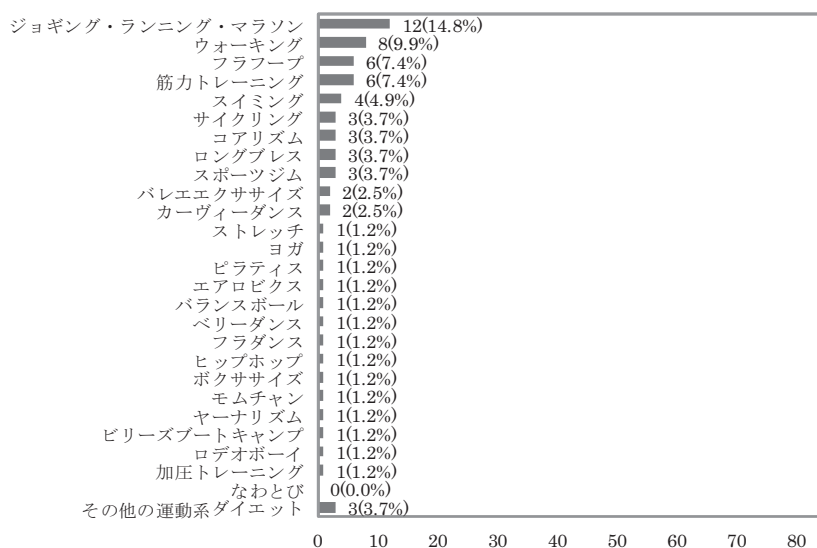


図 26 女子学生が効果を認めた運動系ダイエット (2014 年度)

一定の効果が認められたその他のダイエットに関しては、全対象者 81 名中、選択者が多い順に「半身浴」6 名 (7.4%)、「リンパ・経絡マッサージ」6 名 (7.4%)、「長風呂」4 名 (4.9%)、「巻くだけダイエット」3 名 (3.7%)、「岩盤浴・溶岩浴」2 名 (2.5%)、「サウナ」1 名 (1.2%)、「サウナスーツダイエット」1 名 (1.2%)、「サランラップダイエット」1 名 (1.2%) となった。「耳つばダイエット」、「エステティックサロン」を選択した者はいなかった。また、「その他のダイエット」を選択した 2 名については、「ホットジェル」、「太腿に塗るオイル」という回答であった。

結果をまとめたものを図 27 に示す。

その他のダイエットに関しては、全対象者 81 名中、選択者が多い順に「半身浴」34 名 (42.0%)、「リンパ・経絡マッサージ」20 名 (24.7%)、「長風呂」18 名 (22.2%)、「巻くだけダイエット」11 名 (13.6%)、「サウナ」8 名 (9.9%)、「岩盤浴・溶岩浴」6 名 (7.4%)、「サランラップダイエット」6 名 (7.4%)、「サウナスーツダイエット」5 名 (6.2%)、「耳つぼダイエット」2 名 (2.5%)、「エステティックサロン」1 名 (1.2%) であった。また、「その他のダイエット」を選択した 5 名については、「バンビウォーター[※]」と回答した者が 2 名、「毎日体重測定」「ホットジェル」「太腿に塗るオイル」と回答した者がそれぞれ 1 名ずつという回答であった。

結果をまとめたものを図 24 に示す。

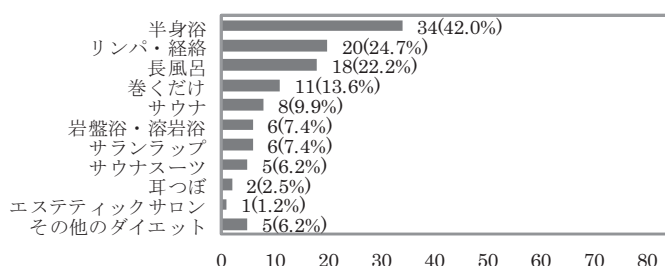


図 24 女子学生が実施したことのあるその他のダイエット (2014 年度)

②効果の認められたダイエット方法

さらに、女子学生が現在までに実践したことのあるダイエットの中で、一定の効果がみられたものについても選択するよう求めた。なお、この回答は複数選択可とした。

一定の効果が認められた食事系ダイエットに関しては、全対象者 81 名中、選択者が多い順に、「夕食抜きダイエット」15 名 (18.5%)、「ローカロリーダイエット」7 名 (8.6%)、「断食・プチ断食ダイエット」7 名 (8.6%)、「炭水化物抜きダイエット」7 名 (8.6%)、「食べる順番ダイエット」6 名 (7.4%)、「単食ダイエット」3 名 (3.7%)、「水分のみダイエット」3 名 (3.7%)、「朝食抜きダイエット」1 名 (1.2%)、「昼食抜きダイエット」1 名 (1.2%)、「置き換えダイエット」1 名 (1.2%)、「サプリメントダイエット」1 名 (1.2%) となった。「小分けダイエット」を選択した者はいなかった。また、「その他の食事系ダイエット」を選択した 1 名については、「スープダイエット」という回答であった。

結果をまとめたものを図 25 に示す。

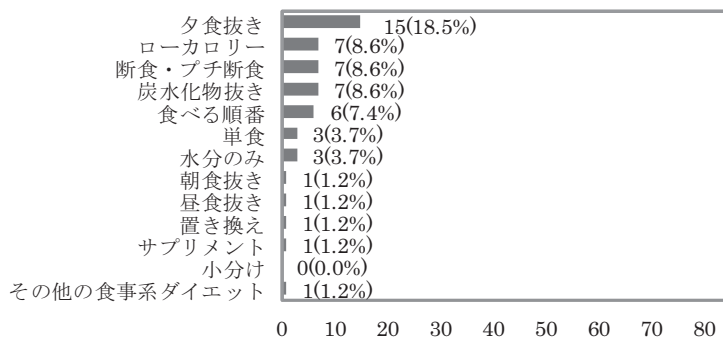


図 25 女子学生が効果を認めた食事系ダイエット (2014 年度)

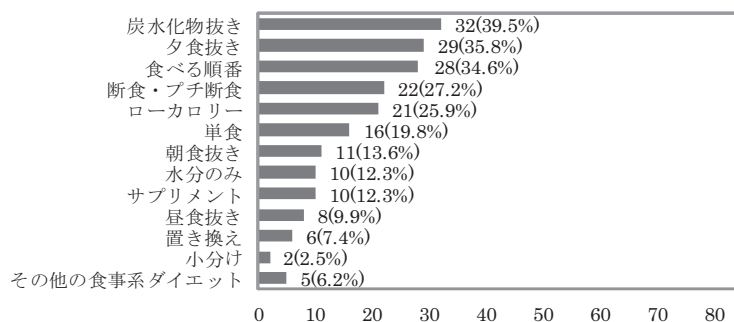


図 22 女子学生が実施したことのある食事系ダイエット (2014 年度)

運動系ダイエットに関しては、全対象者 81 名中、選択者が多い順に、「ジョギング・ランニング・マラソン」34 名 (42.0%)、「ウォーキング」32 名 (39.5%)、「筋力トレーニング」28 名 (34.6%)、「ストレッチ」24 名 (29.6%)、「なわとび」22 名 (27.2%)、「サイクリング」14 名 (17.3%)、「バランスボール」13 名 (16.0%)、「ヨガⁱⁱⁱ」11 名 (13.6%)、「フラフープ」10 名 (12.3%)、「ロングプレスダイエット^{iv}」10 名 (12.3%)、「カーヴィーダンス^v」9 名 (11.1%)、「スイミング」8 名 (9.9%)、「エアロビクス」6 名 (7.4%)、「コアリズム^{vi}」6 名 (7.4%)、「スポーツジム」6 名 (7.4%)、「ロデオボーイ^{vii}」5 名 (6.2%)、「ビリーズブートキャンプ^{viii}」4 名 (4.9%)、「ピラティス^{ix}」3 名 (3.7%)、「ベリーダンス」3 名 (3.7%)、「バレエエクササイズ」3 名 (3.7%)、「ヒップホップダンス」3 名 (3.7%)、「momチャンドダイエット^x」2 名 (2.5%)、「フラダンス」1 名 (1.2%)、「ボクササイズ^{xi}」1 名 (1.2%)、「ヤーナリズム^{xii}」1 名 (1.2%)、「加圧トレーニング」1 名 (1.2%)であった。また、「その他の運動系ダイエット」を選択した 7 名については、「バスケットボール」と回答した者が 3 名、「バレーボール」「バドミントン」「サッカー」「腕を左右に振る」と回答した者がそれぞれ 1 名ずつであった。

結果をまとめたものを図 23 に示す。

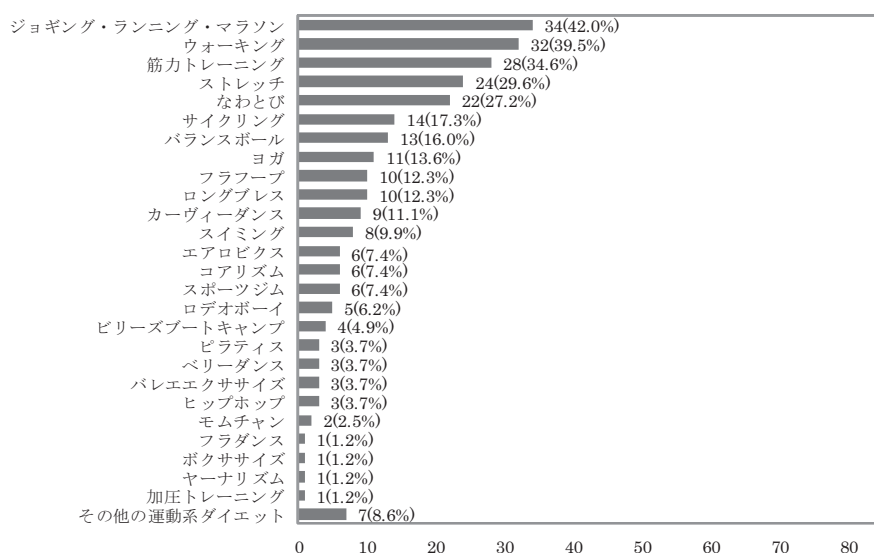


図 23 女子学生が実施したことのある運動系ダイエット (2014 年度)

結果をまとめたものを図 21 に示す。

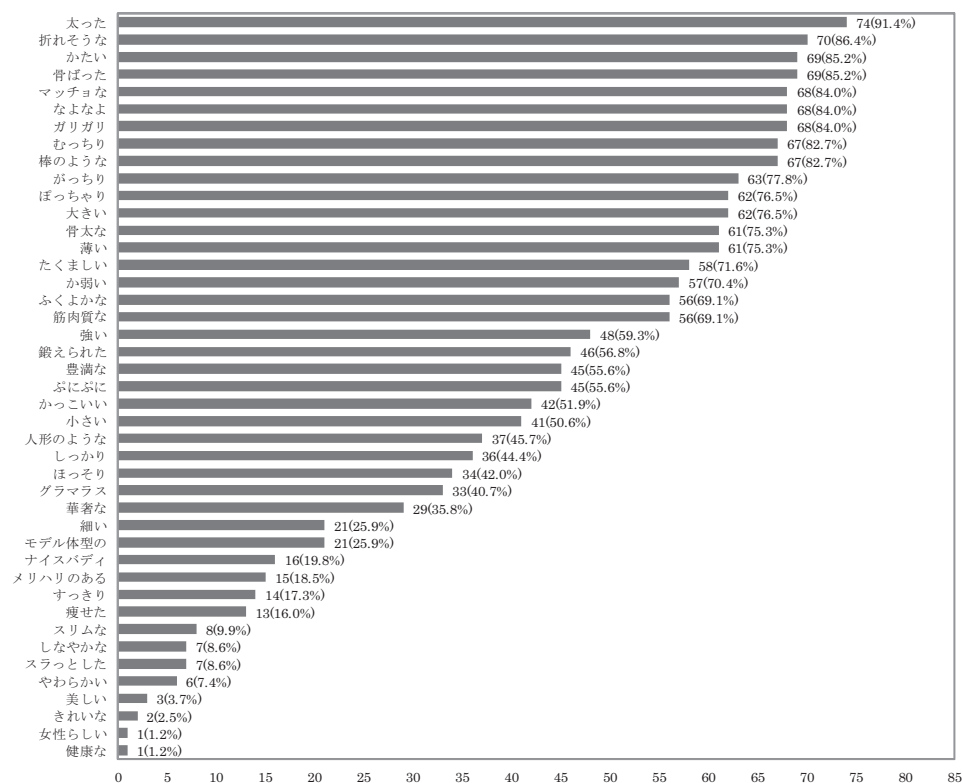


図 21 女子学生の理想としない身体イメージ (2014 年度)

(5) 女子学生のダイエット方法に関する調査

①実践したことのあるダイエット方法

最後に、女子学生が現在までに実践したことのあるダイエット方法を調査するために、これまでに一度でも試したことのあるダイエット方法を、12 種類の食事系ダイエット、26 種類の運動系ダイエット、10 種類のその他のダイエットの中から選択するよう求めた。なお、この回答は複数選択可とした。さらに、そのどれにも当てはまらないダイエットに関しては「その他の食事系ダイエット」、「その他の運動系ダイエット」、「その他のダイエット」の欄にそれぞれ自由記述を求めた。

食事系ダイエットに関しては、全対象者 81 名中、選択者が多い順に、「炭水化物抜きダイエット」32 名 (39.5%)、「夕食抜きダイエット」29 名 (35.8%)、「食べる順番ダイエット」28 名 (34.6%)、「断食・プチ断食ダイエット」22 名 (27.2%)、「ローカロリーダイエット」21 名 (25.9%)、「単食ダイエット」16 名 (19.8%)、「朝食抜きダイエット」11 名 (13.6%)、「水分のみダイエット」10 名 (12.3%)、「サプリメントダイエット」10 名 (12.3%)、「昼食抜きダイエット」8 名 (9.9%)、「置き換えダイエット」6 名 (7.4%)、「小分けダイエット」2 名 (2.5%) であった。また、「その他の食事系ダイエット」を選択した 5 名については、「朝バナナダイエット」と回答した者が 2 名、「間食抜きダイエット」「スーパードライエツト」「サラダダイエット」と回答した者がそれぞれ 1 名ずつであった。

結果をまとめたものを図 22 に示す。

「痩せた」60名(74.1%)、「すっきり」55名(67.9%)、「メリハリのある」54名(66.7%)、「モデル体型の」52名(64.2%)、「ナイスバディ」51名(77.4%)、「細い」50名(61.7%)の14語であった。

結果をまとめたものを図20に示す。

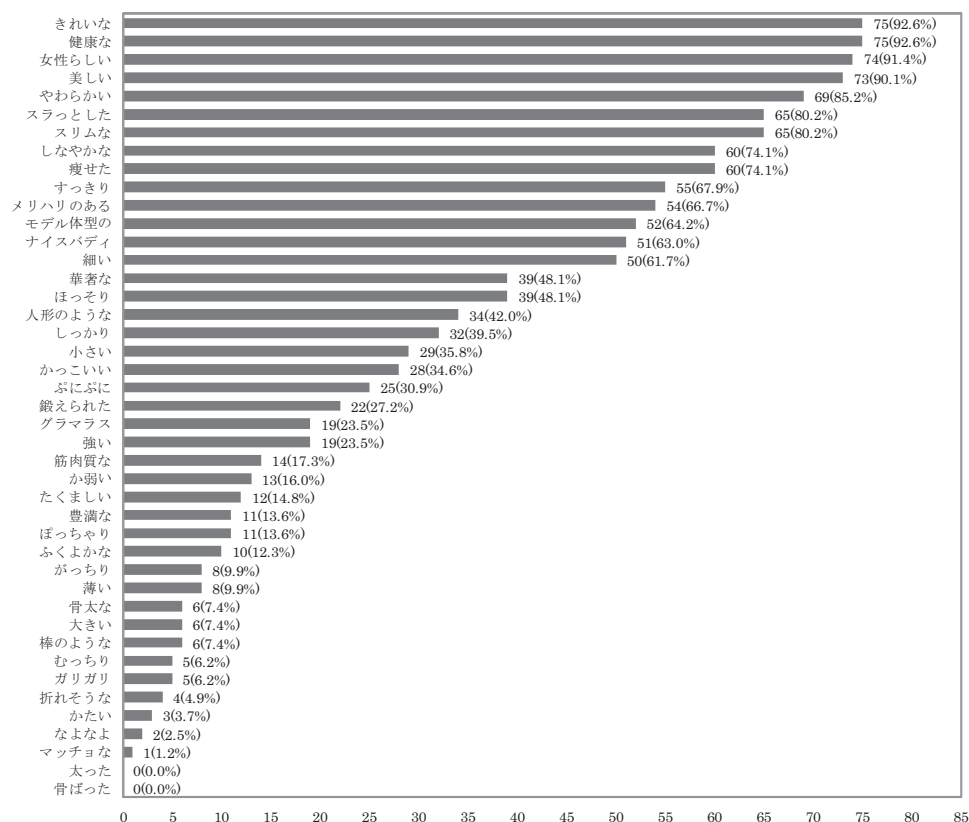


図20 女子学生の理想とする身体イメージ (2014年度)

②理想と異なる身体イメージ

反対に、女子学生が理想としない身体イメージを可視化するために、身体の様相を表す43の単語の中から、自身の理想とは異なる(好ましくない)「からだ」のイメージに近いものを選択するよう求めた。なお、この回答は複数選択可とした。

選択者が過半数を超えた上位語は、全対象者81名中、選択者が多い順に、「太った」74名(91.4%)、「折れそうな」70名(86.4%)、「かたい」69名(85.2%)、「骨ばった」69名(85.2%)、「マッチョな」68名(84.0%)、「なよなよ」68名(84.0%)、「ガリガリ」68名(84.0%)、「むっちり」67名(82.7%)、「棒のような」67名(82.7%)、「がっちり」63名(77.8%)、「ぽっちゃり」62名(76.5%)、「大きい」62名(76.5%)、「骨太な」61名(75.3%)、「薄い」61名(75.3%)、「たくましい」58名(71.6%)、「か弱い」57名(70.4%)、「ふくよかな」56名(69.1%)、「筋肉質な」56名(69.1%)、「強い」48名(59.3%)、「鍛えられた」46名(56.8%)、「豊満な」45名(55.6%)、「ぶにぶに」45名(55.6%)、「かっこいい」42名(51.9%)、「小さい」41名(50.6%)、の24語であった。

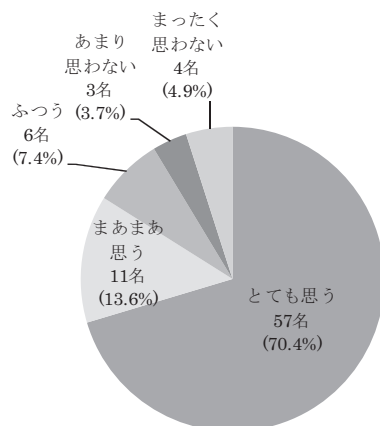


図 18 痩せることへの意識（現在よりも痩せたいと思うか）（2014 年度）

⑮「太る」ことへの意識

現在よりも太りたいと思うかどうかについて、5段階の中から選択するよう求めた。

その結果は、全対象者 81 名中、「とてもそう思う」0 名（0.0%）、「まあまあ思う」0 名（0.0%）、「ふつう」2 名（2.5%）、「あまり思わない」9 名（11.1%）、「まったく思わない」67 名（82.7%）であった。

結果をまとめたものを図 19 に示す。

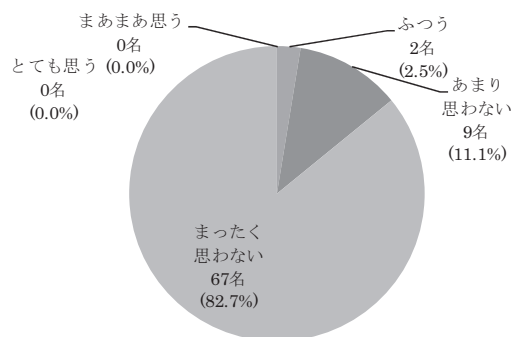


図 19 太ることへの意識（現在よりも太りたいと思うか）（2014 年度）

(4) 女子学生の身体イメージに関する調査

①理想とする身体イメージ

女子学生が抱く理想の身体イメージを可視化するために、身体の様相を表す 43 の単語の中から、自身が理想とする（好ましい）「からだ」のイメージに近いものを選択するよう求めた。なお、この回答は複数選択可とした。

選択者が過半数を超えた上位語は、全対象者 81 名中、選択者が多い順に「きれいな」75 名（92.6%）、「健康な」75 名（92.6%）、「女性らしい」74 名（91.4%）、「美しい」73 名（90.1%）、「やわらかい」69 名（85.2%）、「スラっとした」65 名（80.2%）、「スリムな」65 名（80.2%）、「しなやかな」60 名（74.1%）、

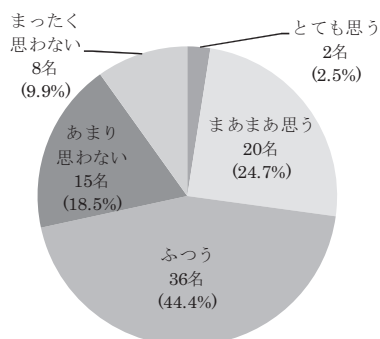


図 16 自身の「からだ」への健康度評価 (現在の「からだ」を健康だと思うか) (2014 年度)

⑬自身の体型への評価

自身の「からだ」(体型)をどのように考えているかについて、5段階の中から選択するよう求めた。

その結果は、全対象者 81 名中、「とても痩せている」0 名 (0.0%)、「やや痩せている」4 名 (4.9%)、「ふつう」18 名 (22.2%)、「やや太っている」36 名 (44.4%)、「とても太っている」22 名 (27.2%)であった。

結果をまとめたものを図 17 に示す。

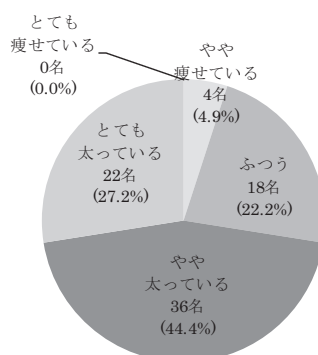


図 17 自身の体型への評価 (自身の体型をどのように考えているか) (2014 年度)

⑭「痩せる」ことへの意識

現在よりも痩せたいと思うかどうかについて、5段階の中から選択するよう求めた。

その結果は、全対象者 81 名中、「とてもそう思う」57 名 (70.4%)、「まあまあ思う」11 名 (13.6%)、「ふつう」6 名 (7.4%)、「あまり思わない」3 名 (3.7%)、「まったく思わない」4 名 (4.9%)であった。

結果をまとめたものを図 18 に示す。

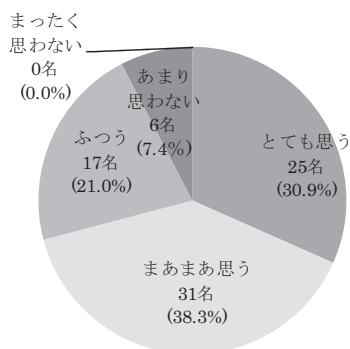


図 14 痩身効果が運動へのモチベーションに与える影響
 (「痩せる」と聞くと運動へのモチベーションが上がるか) (2014 年度)

⑪自身の「からだ」への満足度評価

自身の現在の「からだ」に満足しているかどうかについて、5段階の中から選択するよう求めた。その結果は、全対象者 81 名中、「とてもそう思う」0 名 (0.0%)、「まあまあ思う」5 名 (6.2%)、「ふつう」13 名 (16.0%)、「あまり思わない」32 名 (39.5%)、「まったく思わない」31 名 (38.3%) であった。結果をまとめたものを図 15 に示す。

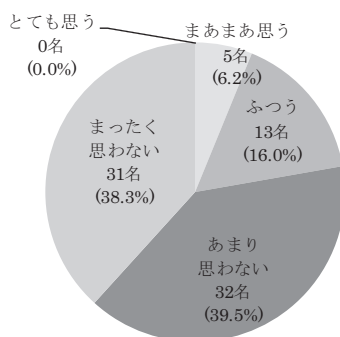


図 15 自身の「からだ」への満足度評価 (現在の「からだ」に満足しているか) (2014 年度)

⑫自身の「からだ」の健康度評価

自身の現在の「からだ」を健康だと思うかどうかについて、5段階の中から選択するよう求めた。その結果は、全対象者 81 名中、「とてもそう思う」2 名 (2.5%)、「まあまあ思う」20 名 (24.7%)、「ふつう」36 名 (44.4%)、「あまり思わない」15 名 (18.5%)、「まったく思わない」8 名 (9.9%) であった。結果をまとめたものを図 16 に示す。

「ふつう」18名(22.2%)、「あまり思わない」2名(2.5%)、「まったく思わない」0名(0.0%)であった。結果をまとめたものを図12に示す。

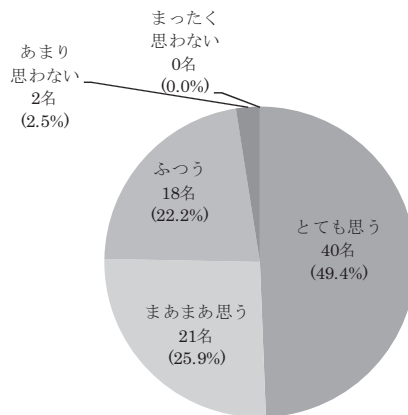


図12 女子学生の食事量評価（自身がよく食べる方だと思うか）（2014年度）

⑨運動量評価

自身がよく運動する方かどうかについて、5段階の中から選択するよう求めた。その結果は、全対象者81名中、「とてもそう思う」5名(6.2%)、「まあまあ思う」19名(23.5%)、「ふつう」30名(37.0%)、「あまり思わない」23名(28.4%)、「まったく思わない」4名(4.9%)であった。結果をまとめたものを図13に示す。

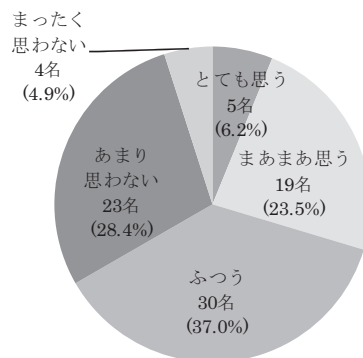


図13 女子学生の運動量評価（自身がよく運動する方だと思うか）（2014年度）

⑩瘦身効果が運動へのモチベーションに与える影響

「痩せる」と聞くと運動へのモチベーションが上がるかどうかについて、5段階の中から選択するよう求めた。

その結果は、全対象者81名中、「とてもそう思う」25名(30.9%)、「まあまあ思う」31名(38.3%)、「ふつう」17名(21.0%)、「あまり思わない」6名(7.4%)、「まったく思わない」0名(0.0%)であった。結果をまとめたものを図14に示す。

(8)

⑥メディアのダイエット情報を見る頻度

雑誌やテレビ、インターネット等のメディアのダイエット情報をよく見るかどうかを5段階の中から選択するよう求めた。

その結果は、全対象者81名中、「とてもよく見る」13名(16.0%)、「まあまあ見る」27名(33.3%)、「ふつう」21名(25.9%)、「あまり見ない」18名(22.2%)、「まったく見ない」2名(2.5%)であった。

結果をまとめたものを図10に示す。

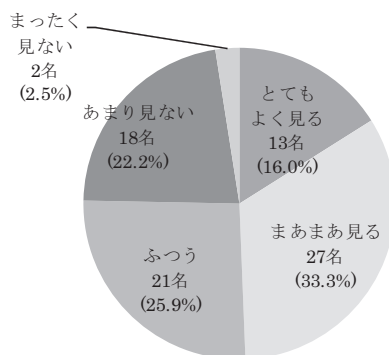


図10 女子学生がメディアのダイエット情報を見る頻度(2014年度)

⑦メディアの健康情報を見る頻度

雑誌やテレビ、インターネット等のメディアの健康情報をよく見るかどうかを5段階の中から選択するよう求めた。

その結果は、全対象者81名中、「とてもよく見る」8名(9.9%)、「まあまあ見る」34名(42.0%)、「ふつう」20名(24.7%)、「あまり見ない」18名(22.2%)、「まったく見ない」1名(1.2%)であった。

結果をまとめたものを図11に示す。

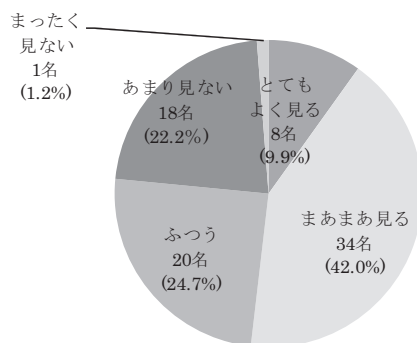


図11 女子学生がメディアの健康情報を見る頻度(2014年度)

⑧食事量評価

自身がよく食べる方かどうかについて、5段階の中から選択するよう求めた。

その結果は、全対象者81名中、「とてもそう思う」40名(49.4%)、「まあまあ思う」21名(25.9%)、

ることを我慢したくないから」11名(44.0%)、「ダイエットしたい気持ちはあるがしない」9名(36.0%)、「ダイエットよりは適度な運動と食事のバランスが必要だから」6名(24.0%)「ダイエットする必要があるから」3名(12.0%)、「体調を崩したくないから」3名(12.0%)、であり、「その他」1名(4.0%)であった。

「その他」と回答した1名の回答については「部活をやっていたためダイエットをする必要がなかったから」というものであった。

結果をまとめたものを図8に示す。

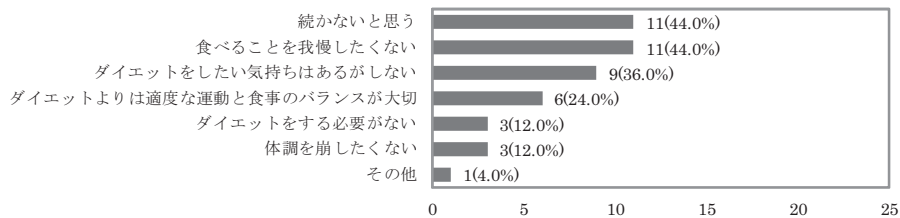


図8 女子学生のダイエットをしない理由 (2014年度)

⑤ダイエットに関する情報を得る手段

ダイエットに関する情報を得る手段について、想定される10の選択肢と「その他」の中から当てはまるものを選択するように求めた。なお、この回答は複数選択可とした。

その結果は、全対象者81名中、選択者が多い順に「テレビ」56名(69.1%)、「雑誌」40名(49.4%)、「インターネット」38名(46.9%)、「SNS」27名(33.3%)、「ブログ」19名(23.5%)、「口コミ」12名(14.8%)、「本」11名(13.6%)、「広告」3名(3.7%)、「情報は得ない」1名(1.2%)、「新聞」0名(0.0%)であり、「その他」は6名(7.4%)であった。

「その他」と回答した6名の回答については、「先生から」と回答した者が2名、「友人から」「親から」「母から」「独自で」と回答した者がそれぞれ1名ずつというものであった。

結果をまとめたものを図9に示す。

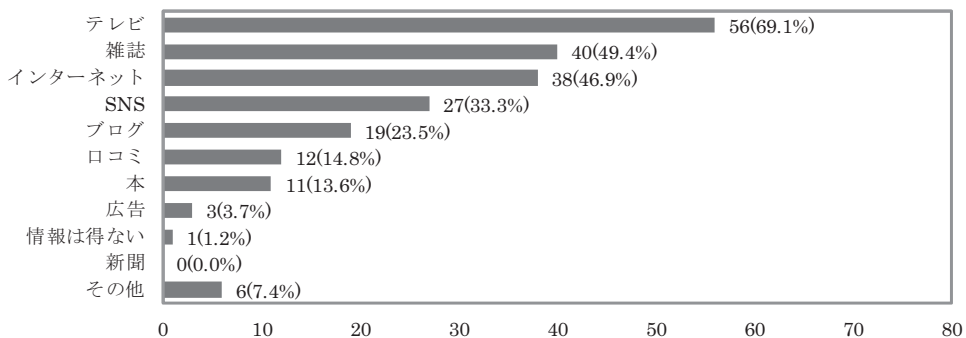


図9 女子学生がダイエットに関する情報を得る手段 (2014年度)

(6)

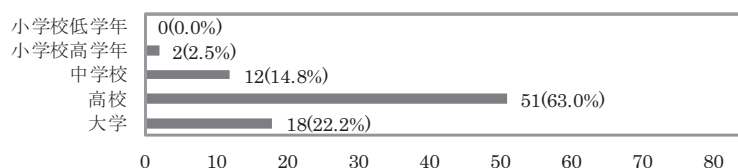


図 6 女子学生のダイエットを実施した時期（2014 年度）

③ダイエットをする目的

ダイエットをする目的について、想定される 12 の選択肢と「その他」の中から当てはまるものを選択するよう指示した。なお、この設問は①でダイエットをしたことがあると回答した 56 名を対象とし、複数回答可とした。

その結果は、回答者 56 名中、選択者が多い順に「痩せたいから」47 名（83.9%）、「体重を落としたいから」38 名（67.9%）、「見た目が細くなりたいから」33 名（58.9%）、「理想の体型に近づきたいから」27 名（48.2%）、「洋服を着こなしたいから」20 名（35.7%）、「きれいになりたいから」19 名（33.9%）、「部分痩せしたいから」15 名（26.8%）、「体脂肪を落としたいから」11 名（19.6%）、「健康になりたいから」8 名（14.3%）、「痩せていくのが楽しいから」4 名（7.1%）、「周りに評価されたいから」4 名（7.1%）、「みんなやっているから」0 名（0.0%）であり、「その他」は 2 名（3.6%）であった。

「その他」と答えた 2 名の回答については、「部活でやったから」「周りの友達がやっていたから」というものであった。

結果をまとめたものを図 7 に示す。

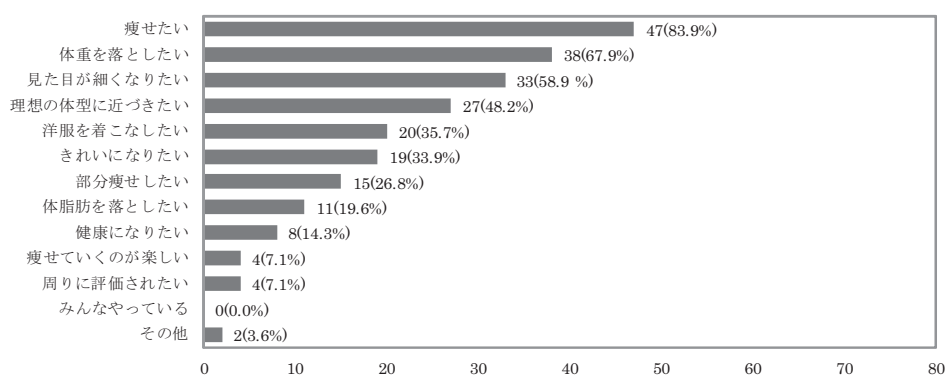


図 7 女子学生のダイエットをする目的（2014 年度）

④ダイエットをしない理由

①でダイエット経験がないと回答した学生に対し、ダイエットをしない理由について想定される 6 の選択肢と「その他」の中から当てはまるものを尋ねた。なお、この回答は複数選択可とし、回答者数は 25 名である。

その結果は、回答者 25 名中、選択者が多い順に「続かないと思うから」11 名（44.0%）、「食べ

(3) 女子学生のダイエット経験に関する調査

①ダイエット経験の有無

これまでに何らかのダイエットを行った経験があるかとの問いに対して、「ある」と回答した者は 56 名 (69.1%)、「ない」と回答した者は 25 名 (30.9%) であった。

69.1%の女子学生が、これまでにダイエット経験を有していることが明らかになった。

結果をまとめたものを図 4 に示す。

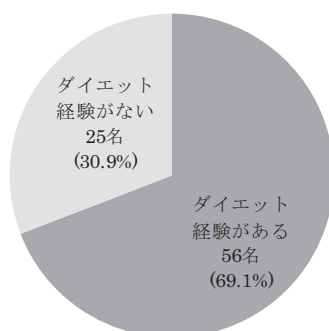


図 4 女子学生のダイエット経験の有無 (2014 年度)

なお、ダイエット経験が「ある」と回答した 56 名 (69.1%) の BMI の最低値は 17.6、最高値は 34.3、平均値は 22.0、ダイエット経験が「ない」と回答した 25 名 (30.9%) の BMI の最低値は 15.8、最高値は 25.5、平均値は 19.7 であった。

ダイエット経験者と未経験者の BMI 平均値の比較をまとめたものを図 5 に示す。

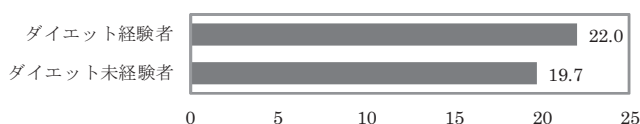


図 5 ダイエット経験者と未経験者の BMI 平均値の比較 (2014 年度)

②ダイエットを行った時期

これまでにダイエットを実施した時期を問う設問に関しては、全対象者 81 名中、「小学校低学年」が 0 名 (0%)、「小学校高学年」が 2 名 (2.5%)、「中学校」が 12 名 (14.8%)、「高校」が 51 名 (63.0%)、「大学」が 18 名 (22.2%) という結果となった。なお、この回答は複数選択可とした。

小学校在学中にダイエットを行っていた者は若干名であったが、中学校では 1.5 割近くの者が、高校では 6 割以上の者がダイエットを経験していることが分かる。大学入学後にダイエットを実施した者は、2 割強にとどまった。

結果をまとめたものを図 6 に示す。

(4)

になった。

また、68名の減量志向群の最低値は-28kg、平均値は-6.2kgであった。3名の増量志向群の最高値は+11kg、平均値は+5.7kgであった。

BMI値と理想体重の相関を分布図にまとめたものを図2に示す。

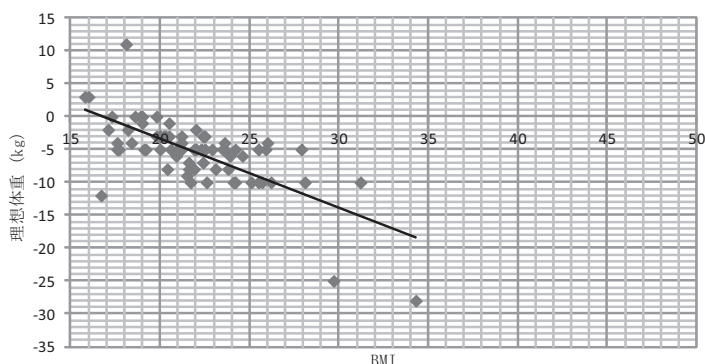


図2 女子学生のBMI値と理想体重の分布図（2014年度）

さらに、68名の減量志向群を-1kgから-5kg減量したいと回答した減量志向群（1度）、-6kgから-10kg減量したいと回答した減量志向群（2度）、-11kgから-20kg減量したいと回答した減量志向群（3度）、-21kgから-30kgと回答した減量志向群（4度）の4群に分類し、それぞれの群の理想体重の平均値およびBMI平均値を求めた。

-1kgから-5kg減量したいと回答した減量志向群（1度）は68名中44名（64.7%）であり、理想体重の平均値は-4.1kg、BMIの平均値は21.4であった。-6kgから-10kg減量したいと回答した減量志向群（2度）は68名中21名（30.9%）であり、理想体重の平均値は-8.6kg、BMIの平均値は23.8であった。-11kgから-20kg減量したいと回答した減量志向群（3度）は68名中1名（1.5%）であり、理想体重の値は-12.0kg、BMIは16.7であった。-21kgから-30kg減量したいと回答した減量志向群（4度）は68名中2名（2.9%）であり、理想体重の値の平均値-26.5kg、BMIの平均値は32.0であった。

以上の結果により、BMI値が16.7と低体重（やせ）群に属していながら-12kgと大幅に減量を望む学生が1名いたものの、総じてBMI値が高い者ほど、大幅に減量したいと考える傾向が強いことが示された。

結果を以下の図3に示す。



図3 減量志向群の理想体重平均値（2014年度）

である「普通体重」群については、本研究においては 18.5 以上 22 未満を「普通体重 (1 度)」群、22 以上 25 未満を「普通体重 (2 度)」群とさらに 2 つに分類した。

結果は以下の通りである。

回答が得られた 79 名中、BMI 値が 18.5 未満の「低体重(やせ)」群 に該当するのは 11 名 (13.9%)、18.5 以上 22 未満の「普通体重 (1 度)」群は 35 名 (44.3%)、22 以上 25 未満の「普通体重 (2 度)」群は 20 名 (25.3%)、25 以上 30 未満の「肥満 (1 度)」群は 11 名 (13.9%)、30 以上 35 未満の「肥満 (2 度)」群は 2 名 (2.5%) であった。35 以上 40 未満の「肥満 (3 度)」群、および 40 以上の「肥満 (4 度)」群は該当者がいなかった。

なお、全回答者 79 名の BMI の最低値は 15.8、最高値は 34.3、平均値は 21.8 であった。厚生労働省による「平成 23 年国民健康・栄養調査」の「BMI の平均値及び標準偏差 (15 歳以上、性・年齢階級別)」によると、15 ～ 19 歳女性の BMI 平均値は 20.72 となっており、本調査の回答者においては BMI の平均値が全国平均をやや上回る結果となった。

55 名 (69.6%) は「普通体重」に該当するが、その中でも 18.5 以上 22 未満の「普通体重 (1 度)」群は 35 名 (44.3%)、22 以上 25 未満の「普通体重 (2 度)」群は 20 名 (25.3%) であることから、「低体重」に近い BMI 値 18.5 以上 22 未満の「普通体重」に該当する者の割合が最も高いことが明らかになった。

結果をまとめたものを図 1 に示す。

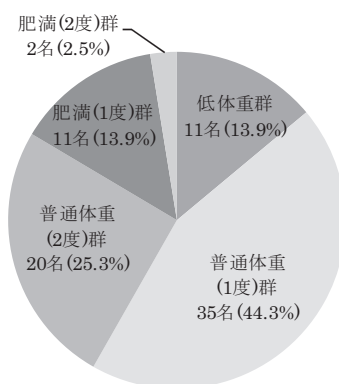


図 1 女子学生の BMI 値の分布 (2014 年度)

(2) 女子学生の理想体重に関する調査

女子学生の理想とする体型を把握するために、それぞれの考える理想の体重を、「+ kg」あるいは「- kg」で示すように求めた。この設問に関しては、81 名中 5 名が無回答であった。

回答が得られた 76 名中、「- kg」と回答した者、すなわち現在の体重よりも減量したいと考える減量志向群は 68 名 (89.5%)、「± 0 kg」と回答した者、すなわち現在の体重を維持したいと考える現状維持群は 5 名 (6.6%)、「+ kg」と回答した者、すなわち増量志向群は 3 名 (3.9%) であった。

本調査により、女子学生の 83.5% が「普通体重」もしくは「低体重」に属しているに関わらず、89.5% の女子学生が現在よりも体重を減らしたいと考え、瘦身願望を抱いていることが明らか

(2)

そこで本研究では、昨年度に引き続き女子短大生を対象に運動経験及び痩身願望とダイエット経験に関する質問紙調査を行い、現代の女子学生が抱く理想の身体イメージについて明らかにしようとした。

2. 方法

本研究では、2014 年度に実施した「女子短大生の痩身意識と身体イメージに関する質問紙調査」を分析の対象とする。調査対象は、2014 年度入学の 18 歳～19 歳を中心とする女子学生、有効回答者数は 81 名である。調査時期は 2014 年 7 月である。

本調査に関しては、選択回答方式および自由記述方式により全受講生に回答を求めた。なお、全対象者へ本研究の趣旨を説明し、研究参加への同意を得た上で、無記名で質問紙調査を実施している。

3. 結果

以下に「女子短大生の痩身意識と身体イメージに関する質問紙調査」の質問項目の結果をまとめる。

(1) 女子学生の BMI 調査

女子学生の身体の状況を把握するために、BMI の算出を求めた。女子学生に対し、体重ではなく BMI の記入を求めた理由としては、自身の体重を記入するよりも抵抗が少ないと予想されたためである。この設問に関しては 2 名が未記入であった。

BMI (Body mass index) とは、身長²に対する体重の比で体格を表す指数であり、 $BMI = \text{体重 (kg)} \div (\text{身長 (m)} \times \text{身長 (m)})$ で算出することができる。

この BMI 値は 22 の時に高血圧、高脂血症、肝障害、耐糖能障害等の有病率が最も低くなるとされており、体格指数として肥満度を表す一つの指標となっている。

日本肥満学会 (Japan Society for the Study of Obesity, JASSO) では、BMI = 22 の場合を標準体重としており、25 以上の場合を肥満、18.5 未満である場合を低体重としている。以下が日本肥満学会による肥満基準である。

表 1 日本肥満学会の肥満基準 (2000 年)

状態	指標 (BMI)
低体重 (やせ)	18.5 未満
普通体重	18.5 以上 25 未満
肥満 (1 度)	25 以上 30 未満
肥満 (2 度)	30 以上 35 未満
肥満 (3 度)	35 以上 40 未満
肥満 (4 度)	40 以上

この日本肥満学会の肥満基準に準拠し、2014 年度に調査を実施した女子学生の BMI 値をもとに、対象者を「低体重群」、「普通体重 (1 度)」群、「普通体重 (2 度)」群、「肥満 (1 度)」群、「肥満 (2 度)」群、「肥満 (3 度)」群、「肥満 (4 度)」群の 7 群に分類した。日本肥満学会の肥満基準の一つ

研究ノート

「女子短大生の瘦身願望と身体イメージに関する意識調査 (2)」

Survey on women's junior college student's attitude toward drive for thinness and a body image (2)

長谷部 (国府田) はるか
Haruka HASEBE-KODA

茨城女子短期大学 保育科
Ibaraki Women's Junior College,
Department of Early Childhood Care and Education

Key words ; ダイエット、瘦身願望、身体イメージ、健康、運動

要旨； 本研究により、女子学生の 83.5%が「普通体重」もしくは「低体重」に属しているにも関わらず、89.5%の者が現在よりも体重を減らしたいと考えていることが明らかになり、女子学生が必要以上に強い瘦身願望を抱えている状況が示された。

また、女子学生は自身の身体が肥満傾向にあると誤った認識をする傾向にあるなど、自身の身体に何らかの不満を抱いている者が 77.8%を占めている。この自己肯定感の低さ、自己不全感が必要以上の瘦身願望を誘発している可能性が示唆された。

理想とされる身体イメージについては、全体的に「女性らしさ」を表現するものであったが、痩せ傾向を示す言葉も含まれていた。一方で「男性らしさ」を表現するものや不健康なまでの「痩せ」の状態を表す言葉に対しては、理想的な身体イメージとはみなされていない点が明らかになった。

身体的に成熟し身体イメージが形成される青年期において、栄養バランスを著しく欠くような極端な食事制限を実施することは大きな危険性を孕んでおり、女子学生が正しい食と栄養の知識を身につける必要がある。同時に、一過性のブームにとどまらず、女子学生が生涯を通じて実践することのできる運動が望ましいと言えるだろう。

1. はじめに

筆者は 2009 年度より現在に至るまで 6 年間、I 女子短期大学において「健康とスポーツ」、「基礎体育」ⁱ、「保育表現技術（身体Ⅰ）」、「保育表現技術（身体Ⅱ）」、「身体表現」、「幼児体育」、「保育内容演習（健康）」、「総合表現」等の身体・健康関連の実技・演習科目の指導に携わってきた。受講する学生は保育科に所属しておりⁱⁱ、幼稚園教諭や保育士を目指して勉学に励んでいる。

担当科目が身体や健康に関する内容であることから、学生からは授業内外で「効果的なダイエット方法」や「痩せるのに適した運動」に関する質問を受ける機会が数多くあり、多くの学生が瘦身に関して強い興味関心を抱いている現状が伺えた。一方で、栄養バランスに欠けた食生活や、体育の授業外での運動時間の確保の難しさなど、女子学生が健康を維持・増進するには困難が伴う状況にも直面してきた。

執 筆 者（執筆順）

小 野 孝 尚（教授：日本近代文学・近現代詩）

小 野 春 江（非常勤講師：国文学・書道）

小 林 和 子（教授：日本近代文学）

本 庄 あかね（講師：日本近代文学）

長谷部（国府田）はるか（講師：舞踊学）

廣 部 朋 美（講師：幼児教育・特別支援教育）

神 永 直 美（教授：幼児教育学）

馬 立 明 美（講師：音楽療法士・こども音楽療法）

塙 雅 文（講師：国語教育）

小松崎 浩 司（講師：情報科学）

茨城女子短期大学紀要 第42集

平成 27 年 3 月 31 日 発行©

編集者 茨城女子短期大学紀要委員会

発行者 額 賀 修 一

発 行 茨城女子短期大学
茨城県那珂市東木倉 960-2

印 刷 ワタヒキ印刷(株)
水戸市城東 1-5-21
Tel. 029-221-4381

BULLETIN OF IBARAKI WOMEN'S JUNIOR COLLEGE

No.42 (2015)

< CONTENTS >

1. **Kosho ONO and Harue ONO ;**
A study on Kozawa Gansho..... 1
2. **Kosho ONO ;**
A study on Komori Sakan 51
3. **Kazuko KOBAYASHI ;**
A study of Mishima Yukio "KAZAN NO KYUKA"
-the Prologue of "Kikuta Jiro series"- 59
4. **Akane HONJO ;**
A study of Kitahara Hakushu "JASHUMON" 69
5. **Haruka HASEBE-KODA ;**
Survey on women's junior college student's attitude
toward drive for thinness and a body image (2) (1)
6. **Tomomi HIROBE, Naomi KAMINAGA, and Akemi UMADATE ;**
Consideration of the meaning of "Certified Child Music Habilitative
Therapy workshop" in the Childminder training school (23)
7. **Masafumi HANAWA ;**
Message to the young generation — Though the disaster volunteer (37)
8. **Koji KOMATSUZAKI ;**
Preparation of Regional Area Digital Archive:
Northern Ibaraki Prefectural Territory..... (51)

PUBLISHED

by

Ibaraki Women's Junior College

IBARAKI